
青春挽歌

銃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春挽歌

【Nコード】

N4669M

【作者名】

銃

【あらすじ】

気付けば夕暮れに染まる校庭に、一人たたずんでいた女学生、真菜月みする。

彼女はそこで一人の青年に出会う。

1（前書き）

どももです、銃です。

はい、これ女子向けです。（どちらかといいますと腐女子かも…）典型的な少女趣味展開をここぞと盛り込みすりこみした作品となっております。

例のごとく、あいもかわらず文脈つじつま展開めちゃくちゃです。昨年の夏、無クーラーの部屋で狂気のごとく紡ぎ上げた代物です。

まあ銃がうだった頭で学園物書くところなると思っして下さい。では…。

銃・

何となくこんな感じで表紙絵描いてみました、が、色々失敗ですね…。

面倒でなかったらいつかりベンジしたいです。

> i 1 0 2 6 3 — 1 0 4 1 <

華咲ク乙女ナオヨロシ。

黒キ三ツ編ミナオヨロシ。

衣^エハ清ラナせえらあナオヨロシ。

以上三カ条、マサニ参加状トミナス

学園ノ姫トシテ君臨セヨ。

青春挽歌

1

「……。」

真菜月みするはぼんやりと校庭に立っていた。

真菜月みするは女学生だった。

まだ昼間の熱の香るそよ風に、今時珍しい長く細い三つ編みを遊ばせている。

半袖の夏の「せえらあ」が、炎のように真っ赤な夕暮れに染まっていた。

誰もいない校庭にぼんやりと立つ女学生。

いくら女学生といえども一人制服で校庭に立つ姿はいささか滑稽だった。

真菜月みする自身もそれは感じていた。

そもそも彼女は――

「1111……どう？」

この学校の生徒ではなかった。

「えっと……あたし……さっきまでどうしてたっけ……？」

とりあえず真菜月みするは自分の行動を振り返る事にした。
とりあえず真菜月みするは校庭の真中から校舎に向けて歩く事にした。

次第に先程までの記憶が蜃気楼のように頭の中に浮かび上がる。

気持ち悪い男がいた。

脂ぎった中年だった。

真夏の盛りにも関わらず外套を羽織っていた。

そうだ、帽子の縁をわざとらしく触るその手は手袋までしていた。

黒の革手袋。

白い長そでに濃茶の毛の背広まで見えた。

どう見ても秋の暮から冬の装いだった。

でも脂は浮いているのに汗は全く欠いていなかった。

それも何だか気持ち悪かった。

そうだ、その男は何か呟いた。

そう、確か……

「良いねえ、ぜひ君を飼いたいなア。」

鳥肌が体中に走った。

その男の台詞そのものもあつたけれど、そう言うてにたりと嫌らしく笑った男の歯が

赤と黒の交互で染め上げられていたからだ。

そうして、気づいたら真菜月みするはこの見知らぬ校庭に立っていたのだった。

何とも古い校舎だった。

どう見ても木造だった。

玄関の観音扉にはめ込まれた歪みのある飴色の硝子に真菜月みするの姿も歪んで映る。

そつと両手で押してみると意外にも音も無くその扉は真菜月みするに道を示した。

前面に広がる空の靴箱の群れの先に奥へと続く廊下が見える。

遠くでかすかに聞こえる蝸ひくわしと烏のさえずりの他にそこに音は存在しなかった。

そこには、無人の廃校のような空気が充満していた。

(……なんか、わからないけどとりあえずここから出よう。)

真菜月みするは来た道を取って返した。

取って返したといってもそのまま校庭の真ん中に戻った訳ではけし
てない。

真菜月みするは校庭の端を歩きその先にあるであろう校門を目指し
た。

目指した、目指した、目指した……

気づけば校庭を一回りしまた校舎の玄関口に戻っていた。

「なんで……？」

真菜月みするは思わず呟いていた。

そう、校庭の何処にも校門どころか小さな通用門すらも存在していなかったのだ。
続くのは「ぼある」が外に出ていくのを防ぐかのような高い「ふえんす」ばかり…。

「……どうしよう。」

。

「え…？」

思わず真菜月みするは音のした方に顔を向けていた。
それは先程一度は中に踏み込んだ校舎の方から聞こえた音だった。
ここに来て初めて耳にする人工的な音。

涼やかな、風鈴のように寂しく響く音だった。

(……………)

真菜月みするの足が自然と校舎の中へと向かっていた。
普段の彼女ならば、こんな無人の廃校の様な場所へは決して足を踏み入れず迷わず「ふえんす」をよじ登りに向かっていた事だろう。
けれど真菜月みするはそれをしなかった。

普段の状況と何かが違う事に彼女はすでに気づいていた。

真菜月みするは土足のまま、また不思議ときしまない木造の廊下を進んでいった。

別に普段から彼女は校内を土足で歩くような習慣がある訳ではない。
その廊下は真菜月みするがその小さな足跡を残す以前に、沢山の大小様々の土足の跡で彩られていたからだ。

不良がたむろしている所なのかもしれない。

そついう考えが頭をよぎらなかつた訳ではない。

けれど真菜月みするは少しの恐怖心も覚えず、校舎の奥へと進んでいった。

階段を見つけると、真菜月みするの足は自然と上階に足を進めていた。

そちらから気になる音がしたような気がしたからだ。

（おかしい…。）

恐怖心を覚えない真菜月みするにも、その違和感には不思議を覚えていた。

外から見上げた校舎は、3階建てにしか見えなかつた。けれど今確実に3階以上の上階に足を踏み入れている。

階段の途中の踊り場の窓の数が、外から見上げた窓の数と一致していない。

結局6階に達したところで階段は終わりを見せていた。

やはりそこにも人の気配はしない。

炎の様だった夕暮れの日差しもわずかに暗く沈み、夜の香りをはらんでいる。

真菜月みするは6階の廊下を奥へと進んでいった。

人気がない木造の校舎が、一日の終わりを告げる鈍色の朱に染め上げられる様は、何とも心の深くを締め付けられる切なさがあった。

5つ程の教室の前を通り過ぎると、そこは行き止まりだった。

おそらく屋上へと続く階段がその奥にあると思われる非常扉のよう

なものが存在したが、建てつけが悪いのか錆びついているのか、押しても引いてもその扉は開かなかった。

「……えいつ！」

真菜月みするはとどめとばかりに、その開かずの扉を蹴りつけていた。

真菜月みするは小柄で大人しめな容姿に似合わず、実は意外とお転婆さんであった。

ばぁんつという大きな音がこだまし、彼女の足にその衝撃の余韻を残すばかりで、結局開かずの扉は開かずの扉のままであった。

――。

どこかの教室からその音はした。

その途端、真菜月みするの興味は非常扉からその音の在処へと移っていた。

そもそも真菜月みするは、この音の在処を求めていたからだ。

真菜月みするは非常扉から二つ程手前の教室の前に立っていた。

扉を横に押し開くと、昼の熱を残した夏の風が彼女の横を通り過ぎていった

全ての窓が開け放たれ、黄ばんだ「かあてん」が踊るように波を見せている。

真菜月みするはすぐにその教室の違和感に気づいていた。

それは教壇の上に置かれていた。

花瓶に活けられた彼岸花。

夕陽の光の中でもその鮮やかな朱が見て取れる、つまりここ最近誰かの手によって生けられたものである事は間違いない。

真菜月みするは無人の様な廃校で初めて人の気配を感じた。

真菜月みするは教壇へと進み、花瓶を目の前にし彼岸花と対峙していた。

そつと鼻先を華弁に近づける。

（あれ……？）

彼岸花は無臭の華といつか聞いた。

真菜月みするはもう一度彼岸花に顔を寄せた。

彼岸花は無臭の華といつか聞いたように、やはり無臭であった。

けれど真菜月みするは一瞬だけ、雲一つない夏空のようなさわやかさをそこに感じていた。

目の前の色鮮やかな彼岸花、整然とこちらを向く無人の机と椅子、終業式や卒業式を思い起こさせるような何の掲示もない殺風景な壁の四面、目をつむれば耳に触れる夏の風と「かあてん」のなびき。

真菜月みするはしばらく、その「のすたるじつく」な切なさに心を揺らしていた。

気づけばぼんやりと真菜月みするは、教卓の上に載せた両手の上に顔を乗せ、教室内を眺めていた。

真菜月みするは無防備だった。

だから彼女は、その時自分の身を襲った衝撃的な感触に、身を取り繕う事が出来なかった。

予期しなかったあまりの衝撃に彼女は

「ギヤアあアアあ~~~~~ッ!!」

乙女らしからぬ獣のような絶叫を上げていた。

衝撃は左足のふとももに走った。

衝撃といっても痛みではない。

真菜月みするは、自分の経験の中からその感触を言葉で表す事が出来た。

真菜月みするは犬を1匹飼育していた。

名前は「だん」、けれど雌。

薄い茶色の少し「めたば」な毛長犬だ。

ちょうど真菜月みするの衝撃は、その「だん」が彼女の帰宅を喜びその愛情表現として行うべろ舐めと同じものであったのだ。

教卓でべろ舐めは普通ありえない。

彼女は今まで不思議と感じていなかった恐怖を心一杯に溢れさせ、教卓から飛びのいた。

教卓のすぐ後ろの黒板に背中がぶつかる。

真菜月みするは教卓の中を凝視した。

「あなた、誰……？」

教卓の中には、何と一人の青年が体を押し込めるようにして座っていた。

半袖の「わいしゃつ」に黒い「すぼん」を膝の少し下まで捲り上げて穿いている。

典型的な夏の男子学生服を着用していた。

緩やかに弧を描く眉の下の、とろんとしたいたずらな黒い瞳が真菜月みするを捉えている。

柔らかかそうな黒髪の毛が上品な猫を思わせた。

（け…結構…美形だ…。）

真菜月みするは突如ふつふつとした淡い乙女心を押しとどめ、すぐに自分のされた事を思い出しその青年を詰問した。

「あつ…あなた！そこで何してるの！

自分が何したかわかつてる？今のは立派なセツ…セクハラよ！」

「せくはら？」

言葉の意味がわからないのか、その青年は不思議そうに真菜月みするを見上げた。

無防備なあどけないその表情に、また真菜月みするの乙女心がわずかに顔を出した。

その乙女心のとどめを刺すかのような満面の笑みを、青年は浮かべる。

ここまでは良かった。しかしその青年はそこから最悪の変態発言を口にしていた。

「昼寝してたら目の前にいきなり美味しそうな足があったから、思わず舐めちゃった。

ごちそうさま、美味しかったよ。」

一瞬乙女の夢を見た真菜月みするではあったが、彼女はまだ花も恥じらう15の乙女である。

決して痴女ではない。

いくら美男といえどもこのような蛮行は彼女の淑女精神が許すものではなかった。

「美味しって…あのねッ！」

真菜月みするが教卓の青年にまた一段と声を荒げようとした時、彼

女のその可憐な声よりもさらに荒々しい多勢の気配が遠く階下から響いてきた。

「な、何…？」

その足音の重さは男児を思わせる。

せまる多勢の男児の足音。

真菜月みするは恐怖を覚えた。

気づけば校舎を疲れた様に漂っていた無人の気配が消えている。

今はもう教卓から出て隣に立つこの青年の出現とともに、何かが大きく変わった事に真菜月みするは気づき始めていた、

「あーあ、大声出すから気付かれちゃったじゃない…。」

隣ではそりと半眼に薄く笑みを浮かべて呟く青年。

誰にと真菜月みするが尋ねるより前に、その教室の扉は荒々しく開け放たれていた。

「そこで何してるッ！

っお前は…ッ！」

乱入した複数の学らん姿の体育会系男児達が、青年と真菜月みするを見てそれぞれ思う所を口にしていた。

「入橋圭ッ！」

「入橋ッ！」

「女だッ！」

「「姫」だッ！」

（いるはし、けい……。）

真菜月みするは隣に立つ青年、入橋圭を見上げた。
そして自分を指さし誰にともなく口にしていた。

「姫……？」

その真菜月みするの呟きを合図にするかのように、筋骨たくましい男児達は真菜月みする目指して飛びかかってきた。

「姫は俺のものだッ！」

「俺のだッ！」

「いや「王子」になるのは俺だッ！」

（王子……？）

真菜月みするが一瞬乙女の妄想世界でしか普段耳にしないその言葉を反芻していると、その一瞬のすきに入橋圭は真菜月みするの腹部に自らの腕を通し、そのまま窓際に飛び退っていた。

真菜月みするが驚き入橋圭を見上げると、もう一方の指先が衝撃のふとももに触れている。

「ちよっ……！」

「悪いな、この姫はもう俺のもの。」

（はッ????????）

真菜月みするが己の理解値を超えた時、彼女の体は教室内にはすでになかった。

一瞬の「かあてん」のゆらめき、遠ざかる男児の怒声、そして空が見えた。

淡く星が瞬き始めている。

それとよく似た淡い光を自分のふとももに見た気がする。
そして自分の足先が空を泳いでいた。

（なんで、足が空にあるの……………？）

加速する落下感の中、真菜月みするの意識も加速的に落下した。

「う………。」

真菜月みするはぼんやりと覚醒した。

年季物の傘のついた豆電球が目の先にある。
その周りを小さな羽虫が幾つか飛んでいた。

（ここは……。）

「よく寝てたね。」

「ッ………！」

真菜月みするは完全に覚醒した。

一気に横たえられていた己の体をがばりと持ち上げる。

声の主は真菜月みするの傍らで「かつぶらあめん」をすすっていた。
背を向けていた声の主がゆっくりと振り返る。

その口元には小さな青ねぎが付いていた。

「ハラ減つてない？菓子パンかこれか選べるけど。」

そこには先程の青年が己の「かつぶらあめん」を示してあぐらを掻いていた。

真菜月みするは何も答える事が出来なかった。

どちらかといえば彼女は空腹だった。

けれどそんな事より何よりも、真菜月みするは今のこの状況で頭がいっぱいだった。

「用務員室だから自炊出来んの、でも俺そついうの駄目だから材料

なんも今ないんだよ。」

青年は自分の「かつぶらあめん」に何故か「まよねえず」を投入しながら説明をした。

くちゃくちゃとかきまぜると音をたてて啾^{すず}り出す。

何とも胸やけのするおぞましい光景だった。

「君、名前は？」

「あつ…あたし？」

みする…真菜月みする。」

「まなつきみする…ふうんじゃあ「みする」って呼んでいい？」

俺は入橋圭、好きに呼んでいいから。」

「ん…って、それよりここ何なの！学校でしょ？」

用務員室ってあたしこんな所で寝てちゃまずくない？」

真菜月みするは辺りを見渡した。

御丁寧にも真菜月みするの体は、用務員室の備品と思われる布団の中に置かれていた。

見れば周囲には蚊帳まで張られ、蚊取り線香がするすると細く煙をなびかせている。

部屋の隅には気散らした「わいしやつ」やら「かつぶめん」の空やら、急遽隅に追いやったであろう汚物の小山が出来ている。

目の前の入橋圭の手の物から推測するに、あの小山は彼の手によるものである…。

となれば彼はここで自活をしている可能性が高くなる。

彼の手元に置かれた使いかけの「まよねえず」がその可能性を色濃く見せる。

男子学生が学校の用務員室で自活する、少なくとも真菜月みするの通う学校にそのような習慣はなかった。

「ああ、大丈夫大丈夫、ここはみするの「城」だから。それにもうすぐ「セン公」も来ると思うし…。」

「セン公……。」

真菜月みするはその言葉を反芻した。

線香ではない、発音が違う。先公、それは先生の軽称ではなかったか？

「駄目じゃんッ！！」

「失礼。」

真菜月みするが否定の叫びをあげたのと、その人物が用務員室の扉を開けたのはほとんど同時の事だった。

真菜月みするは蚊帳の網目から透けて見えるその人物を凝視した。すらりと背の高い紳士、夏の陽気にも関わらず細身の体を黒の背広で固めている。

その髪の毛はきちんと撫でつけられ、神経質そうな眉毛と銀縁の眼鏡が印象的だった。

「ども、ひさしぶりですね。藤村センセ。」

入橋圭も軽く振り返り背の高い紳士、藤村に手をあげた。

（藤村……せんせ……センセって）

「セン公じゃんっ！！！」

真菜月みするは驚きのあまり、その藤村という男を指でさして声を上げていた。

紳士、藤村の神経質な眉毛がひくりとわずかに動く。

真菜月みするの位置からではその様子はうかがえない。

しかし彼女は、先生と呼ばれる目上の人間にぶしつけな声を上げた事に、少なからぬ緊張感を覚えていた。

「あ……。」

「これはこれは随分と無作法な姫君だ。

それにしても、これは……………」

藤村が室内をぐるりと見る（程広くはないのだが、気分的に）や、薄く「めす」で切るかのような冷ややかな笑みを浮かべると呟いた。

「すでに愛の巢……………」

夜の学校、用務員室、六畳一間、蒲団、蚊帳、青春男女――

「違いますッ！……！」

「おわっ！」

真菜月みするは激しく抗議し、入橋圭はびっくりと肩を震わせて驚いた。

「それで真菜月君、きみはどこまで入橋から聞いている？」

藤村教諭は真菜月みするに背を向けたまま質問した。

手元から軽快な包丁さばきの音が鳴り響く。

教師というより「えりいと」官僚が要人の「えすぴい」にしか見えないその紳士は、あろう事が用務員室の小さな台所で男の手料理を始めていた。

「夕食は済ませたかね？」

藤村教諭の質問に真菜月みするが首を横に振ると「ちょうどいい、私もこれからだ。」というや手持ちの「せかんどばっく」の中から黒の「えぶろん」とそろいの「ああむばんど」、それに「とまと」やら卵やらの食材諸々を出すやいなや自慢の腕を振るいだしたという次第である。

「何も……………それよりここでこんな事していいんですか？」

それに本当に藤村さんて先生なんですか？」

真菜月みするは納得がいかなかった。

不法侵入の学生の腹を満たす事よりも先にすべき事が教師にはあると、真菜月みするは考えたからだ。

「たおるけつと」を抱え込むように体育座りをしながら、藤村教諭の後ろ姿を凝視する。

広い背中ときちんと腰の辺りで絞められた「えぶろん」の紐、玄人の包丁さばきを見せる殿方にしてはすらりと長い指先、そして上品な時計で絞められた肘まで露わな筋の薄くのった腕の動き、真菜月みするは気づけばそこに見とれていた。

「えつちィ……」

そんな真菜月みするの視線がわかってか、入橋圭がにやにやとちやちやを入れる。

「つぶ……！」

そんな入橋圭の顔面に真菜月みするは、手元の枕を投げつけていた。

「ここは真菜月君の「領地」だから問題はない。

そして私は確かに「教師」だ。

称号は「公爵」、「ゲオルク様」の命により、君のような生まれ落ちたばかりの姫君を教え諭し、自らの領地を自らの力で治める力をつけるまで保護する事が私の使命。」

「……………はい????？」

口調は至極まともな藤村教諭の、理解不能な中世話に真菜月みするはさらなる混乱をきたした。

その間にも藤村教諭は「ふらいぱん」に薄く油を引き、解きほぐした卵で薄焼きを作っている。

何とも甘い香りが室内を満たしていった。

「一種の神隠しにあつたんだよ、みするも俺も。」

真菜月みするの隣で膝に枕とあごをのせた入橋圭が、けだるげにつぶやいた。

その間にも藤村教諭の包丁さばきの音が鳴り響く。

どうやら先程の薄焼き卵の千切りをしているらしい…。卵の千切り…もしかしたら夕食はあの夏の定番が来るかもしれない。

それにしても何とも現実感のない状況である。

「俺は変なババアに連れて来られた。そいつはこの女王で「ベロニカ」っていうらしい。」

で、たぶんみするは変なオヤジに会っただろ？そいつが「ゲオルク」、ここのキングだ。」

（変な、オヤジ…………。）

黒と赤の交互に染まった歯、
ぜび君を飼いたいなア。

「……………会った…気持ち悪いおじさん。」

真菜月みするは思わず身震いした。それ程にその男は薄気味の悪い姿をしていた。

ダンッ！！

突然の大きな音に、思わず真菜月みすると入橋圭は肩をすくめた。音のした方を見ると、藤村教諭が包丁を半分以上まな板に食い込ませて、こちらを睨みつけている。

もともと神経質な威圧感のある藤村教諭の敵視はすさまじいものがあった。

「両殿下の悪口を言う事は誰であろつと許されない。」

よくわからないがとりあえず真菜月みするは藤村教諭に謝罪した。
藤村教諭の放つ敵意が、その手に握る包丁を振り上げんばかりに強く感じられた為だ。

入橋圭も「もう言わないからさ。」と軽く謝罪を見せている。

藤村教諭は納得のいかない顔でとりあえず納得すると、小さな溜息をついてまた男の手料理へと戻っていった。

「この学校はその「両殿下」の箱庭で俺達は飼われてるつて訳。

女の子がほんの数人しかなくてさ、それぞれ集団作って敵対してるんだよ。」

「正確には真菜月君を合わせて現在7人の姫君が7つの国を築いている。」

「女の子はここでは姫って呼ばれる訳。」

「はぁ。。。」

わかったようなわからないような、とりあえず学園派閥争いのようなものがこの学校で展開されている事を真菜月みするはぼんやりと認識した。

「それじゃ王子は？男の子の事？」

真菜月みするは質問した。

質問しながらそれは少しちがうような気がしていた。

先程複数の男児がいながら「王子になるのは」って言っていたのをぼんやりと思い出していたからだ。

おそらく無条件でなれるものではないに違いない。

そしてやはり藤村教諭は真菜月みするの予想通りの回答を背中ごしから投げかけてきた。

「いや、全ての男児が王子とはなりえない。」

王子は姫と「婚約」して初めて称される男児の呼び名、大抵の男児は「騎士」に甘んじている。」

「「婚約」……。」

「そっ！……で、みするは俺と婚約したから俺王子。」

「ふうん、入橋くん王子なんだ………って。」

「婚約ウ~~~~~~~~ツ！！！」

真菜月みするは絶叫した。

その叫びは熱湯の湯でこぼし作業をしていた藤村教諭の手元を狂わせた程である。

藤村教諭はわずか指先に火傷を負った。

しかし藤村教諭は眉を少し動かしただけで黙々と麵の水洗いを始めていた。

「なっ……何で！！」

あたし？あたしと？？」

「そっ！みすると俺は婚約中。」

「うっ……嘘だ！」

あたしそんな事してないし！！聞いてないし！！」

「……聞いてないけど、確かにしたよ俺達。」

その証拠に——」

「君たち。」

入橋圭の話は藤村教諭が遮った。

見ると藤村教諭は手早くごまをすり鉢麵棒で搗り潰している。どうやら「たれ」を本格的に作り上げるつもりらしい。

「じきに出来る、布団を片付けたまえ。」

有無を言わさぬ藤村教諭の言葉に、二人はあたふたと布団を片付け

隅に追いやられていた昔懐かしのちゃぶ台を中央に配置した。

背筋をぴんと伸ばして正座して二人の待つちゃぶ台へ藤村教諭が給仕を行う。

そこには藤村教諭特製の冷やし中華が用意された。じまだれ

「あのセンス…俺のは？」

「入橋、君は先程あの気持ちの悪いものを食べただろう。」

入橋圭はそんなあという足を崩してうなだれた。

藤村教諭はそんな入橋圭を無視してさっさと「せかんどばっく」から出したきらきら輝く「ふおおく」と「すぷうん」で、何故か冷やし中華を「ぱすた」よろしく優雅に食べていく。

真菜月みするはそんな藤村教諭の姿をあっけにとられて見つめていた。

「…何だね、真菜月君。君もフォーク派かね？」

「いつ…いえー!」

「…早く食べたまえ。麺が延びる。」

「はっ…はあ。」

真菜月みするはとりあえず藤村教諭の冷やし中華を食する事にした。一口くちに運ぶとそのあまりの芸術性に真菜月みするは息を飲んだ。(何これ…ピリツと甘辛香ばしいみそだれなだけど…)

野菜もしゃきしゃきだし麺もエビみたいにプリツとしてるし…あり得ない位美味しい。)

「口に合わなかったかね？」

「っ…まさか!!」

すっごく美味しいです藤村先生!

こんな美味しい冷やし中華あたし初めて!」

「そりゃそつだ…野菜から麺まで全部藤村メイドの絶品冷やし中華だもん。」

入橋圭がややいじけた様子で物欲しそうに二人の皿を見つめていた。

（野菜から麺まで……。）

そんな「するおらいふ」生活からほど遠い容姿と空気を放つ藤村教諭をまじまじと見つめながら、真菜月みするは絶品冷やし中華を堪能した。

「それでは本題に入ろうか。先程は何を話していたかな。」

藤村教諭の入れてくれた「あいす」緑茶を前にしてちゃぶ台講義が始まった。

真菜月みするが教師に質問する学生よろしく「はい！」と元気に拳手をする。

「真菜月君。」

そんな真菜月みするを学生を指名する教師よろしく藤村教諭が指し示す。

「「婚約」って何ですか？」

入橋くんはあたしと婚約したっていうけど、あたしそんな事してません！」

「えっ…ちよつとしたじゃん、ちゃんと…。」

「ちゃんと？ちゃんとって何がっ！」

いつちゃんとしたのよ！！両親への挨拶は？婚約指輪は？結納は？」

「待ちなさい、真菜月君。」

「婚約」しているというのなら二人共「印」を持つはずだ。

入橋、真菜月君の「印」はどこにある？」

「しるし？」

「えつとみするの「印」はここに――」

「ッ……！」

真菜月みするは、無造作に己の太もに触れてきた入橋圭の顔に向けて「あいす」緑茶をぶっつけた。

そんな二人のやりとりを、藤村教諭は証券市場の動きでも見極めるかのような冷めた目つきで傍観している。

「つめて……おい、みする！」

いきなり何すんだよッ！」

「何すんだは入橋くんじゃん！」

勝手にあたしの太もも何度も触らないでよ！」

「だってそこにッ――」

「真菜月君、立ちなさい。」

「え？」

藤村教諭の一言に、あわや本気の痴話喧嘩に陥りそうであった二人の動きがぴたりと止まる。

真菜月みするは何となく釈然としなかったが、とりあえず藤村教諭が怖いのでその場にすくりと立ち上がった。

「それが「印」だ……。」

藤村教諭がすつと長い指先で指し示す。

真菜月みするはその指先を追って自分の太ももを凝視した。

「あ……。」

真菜月みするの太ももには夜空に咲く花火のような模様が小さく浮かび上がっていた。

白と藍と黄色の輝き、それが綺羅綺羅と色めいている。

「何これ！いつの間に……。」

「それで入橋、お前の「印」はどこにある？」

驚く真菜月みするをそのままに、藤村教諭は入橋圭に視線を移す。入橋圭は少しそのまま黙した後、己の「わいしゃつ」の襟もとを開き首筋を露わにした。

入橋圭の花火の刻印は左の首筋の鎖骨近くに咲いていた。

「確かに二人とも「婚約」しているようだ。」

「だからどうしてですかっ！」

一人混乱する真菜月みするを残して藤村教諭は早々に結論を出していった。

少し神経質そうに眉をひくりと動かすと、教諭らしく真菜月みするに丁寧な説明を始めた。

「初めに姫の体の何処かに口づけした男児、この者が「王子」候補となる。

そして「王子」候補となった男児が「姫」から許しの口づけを体の何処かに受けるとそこで「婚約」が成立し、その男児はそこで初めて「王子」となる。

二人の体にあるその「印」が口付けの証。

しかしその場所は——」

真菜月みするの太もも、そして入橋圭の首筋、藤村教諭は順々に二人の「印」を一瞥すると——

「……君達には、恥じらいというものがないのかな？」

不快感をわずかに浮かべ溜息をつくように藤村教諭は呟いた。

「つつち……違いますッ！！藤村先生、誤解です！」

ちよっとどつという事！入橋くん！」

「はい……？」

「はいじゃないよっ！」

何で入橋くんに「印」があるの？

あたし今の今まで寝ててキスなんてしてないのに……！」

「……あー、それは。」

「あつ……もしかしてあたしが寝てる間に無理矢理？」

太ももだけじゃなくて色々触ったんでしょ……！」

やだよ、信じらんない……最低だよ、入橋くん。」

真菜月みするは、今や瞳一杯に涙を浮かべ一粒こぼれ落ちるやわつと顔を覆って泣き出した。

そもそも真菜月みするはこの非現実的な状況にまだ適応出来ずに疲れていた。

その事もあってか真菜月みするはせきを切ったように泣きに泣いた。

「入橋、今の真菜月君の話は真実か？」

藤村教諭が「せかんどばつく」に手を伸ばしながら入橋圭を詰問する。

その声音は、今まで聞いた藤村教諭の声音の中で一番低く冷たい刃をはらんでいた。

そつと「せかんどばつく」の中から出席簿と書かれた黒い板を抜き出す。

「公則違反だ。」

「ちよつ……！待った、藤村センセ！」

入橋圭が両手を目の前に突き出して慌てて手を振る。

そんな入橋圭を無視して藤村教諭はぱらぱらと出席簿をめくる。

「マジで不可抗力だったんだよ！」

みする抱えて校舎の窓から飛び降りたら、みする気失ってて！

体持ちなおそうとしたらたまたま首にみするの口が当たったみたいでさ！

気づいたら正式に婚約成立してて！

嘘じゃないってホントだよ!!」

「…不可抗力。」

藤村教諭が手元の出席簿をぱたりと閉じた。

じいっと入橋圭を一しきり見つめた後、藤村教諭は真菜月みするに向けて言った。

「……だそうだが、どうする？」

「婚約破棄」するか？真菜月君。」

「え……婚約破棄？出来るの？」

「出来る。」

姫から婚約破棄をする事は可能だ。」

「本当に？」

真菜月みするの顔が涙ながらも華やいだ。

入橋圭が難しい顔をしている。

しかし真菜月みするはこの年で「婚約」などひやかしの対象にしかない称号を掲げている事には我慢ならなかった。

「どうすればいいんですか？藤村先生。」

「思いきり入橋の頬を張れ。」

それで婚約破棄は成立する。」

藤村教諭は感情のこもらない声で告げた。

真菜月みするはまじまじと隣の入橋圭を見つめた。

入橋圭は覚悟を決めた様に畏まって座っている。

「張るって…思い切りぶつつて事ですか？」

「そうだ。」

（ぶつ……。）

真菜月みするは拳を作り握り締めた。

余談になるが真菜月みするには兄弟はいない。

真菜月みするは一人っ子である。

ゆえに彼女は体を使った喧嘩というものをこれまでした事が全くなかった。

幼児の頃にあつたのかもしれないが、物心ついてからその先その記憶は彼女にはない。

人の頬を張る、「どらま」や漫画の中で頻繁に見かける、その人の触れ合いを自分が主導者となつて行う事に真菜月みするは少なからず躊躇を覚えていた。

「やれよ、みする。」

嫌なんだろう？」

しびれを切らした入橋圭がぼそりと呟く。

戸惑う真菜月みするの瞳と俯いていた入橋圭の瞳がぶつかった。

「けどそうなたらさつきみたいな野郎共が皆みするを求めてやってくるからな。」

覚悟しとけよ。」

「えっ……!!」

「入橋、脅迫はよくないな。」

「あ……いッ……ち……違うから！藤村センセ！」

また出席簿を持ち上げた藤村教諭に入橋圭は動揺した。

真菜月みするは考える。

どうして皆王子になりたいのか？

けれど真菜月みするの今の知識ではその結論を出す事は出来なかった。

「待ってください、藤村先生。どうして皆王子になりたいんですか？」

藤村教諭が入橋圭から真菜月みするに視線を戻す。

その途端、入橋圭があからさまに安堵の表情を浮かべていた。

「普段の特権もあるが、殿下に認められた姫と王子はこの学園を「卒業」出来るからだろう。」

「「卒業」…それって…」

「このおかしな世界から抜け出す方法の一つって事さ。」

「卒業」しないとは取らないがずっとここに閉じ込められる。」

「そんなっ…！何で！」

「言っただろ？俺とみするは一種の神隠しにあっただってさ。」

ここにいる学生連中は皆そうだよ。

ほとんどの奴がここを抜け出す為に必死こいてる。

そしてその鍵を握るのが——」

入橋圭がじつと真菜月みするを見据えた。

こんな近くで結構美形の青年に見据えられた事のない真菜月みするは幾分動揺を胸にきたした。

「この世に数少ない姫君だ。」

入橋圭の熱い真剣な眼差しと自分に向けて告げられた「姫」という言葉に、真菜月みするは不覚にもときめきを覚えていた。

「「姫」は不可侵の存在。」

「姫」に認められた「王子」のみが「姫」に触れる事が許される。

一方「王子」より後に認められた男児を称して「騎士」という。

「訣別」の時を除いて「騎士」は「姫」の許し無く「姫」に触れる事が出来ない。

ただ「騎士」でも「姫」に認められた者のみ共に「卒業」が許されている。」

藤村教諭が軽く注釈を入れる。

「だからすっごい逆ハーレム世界。」

どう考えてもベロニカの趣味だよな。」

へらっと笑う入橋圭に真菜月みするは緊張が解けてほっとした。

(…ってなんであたしほっとしてんの！)

真菜月みするは一人頭を抱えて懊悩した。

そんな真菜月みするを見つめて静かに入橋圭が言葉を告げる。

「俺じゃ、駄目かな…。」

「え…………。」

「だから俺が、みするの王子じゃ駄目かな？」

「あ…………えと…どうなんだろ…。」

あたし、まだよくわかんないし…さ…。」

真菜月みするは、自分の耳が熱くなるのを感じていた。

助けを求めるように真菜月みするは藤村教諭の方を見たが、いつの間にも蚊帳の外へ出たのものが、藤村教諭はこちらに背を向けて流しで片づけを始めている。

(えっ…………ちょ…先生…!!)

藤村教諭は不純異性交遊は良しとしないが、青春男女の自由恋愛は奨励している。

そんな藤村教諭なりに気を使っているようだ。

「ごめんなさい！」

無理だよ、入橋くん！

あたしそんないきなり結論出せないよ！」

真菜月みするはお手上げの「ばあず」を取って入橋圭に詫びた。

入橋圭はそっかと呟くと己の頬を真菜月みするに突き出した。

「じゃ、どうぞひと思いにやって下さい。

みする姫。」

「いや…………実をいうとそれも無理。」

「はい??。」

入橋圭は訳がわからないといった顔をして真菜月みするをまじまじと見つめた。

こういう間の抜けた顔も可愛らしいなと真菜月みするは密かに思った。

「あたし、人叩いた事ないし…」

それに入橋くんと縁切ったらさっきみたいな男子達が沢山襲ってきてあたしにキスするんでしょ？

それも困るし絶対ヤダし…。。」

「それじゃどうすんのさ？」

「だから同盟！！」

「どーめい…？」

「じゃなかったら友達！」

「友達…」

真菜月みするは入橋圭の目の前に手を出した。

ちようと握手する様な形で差し出されたその手を入橋圭はまじまじと見つめる。

「この世界から抜け出す為にはとりあえず「姫」と「王子」が最低条件なんですよ？」

幸か不幸かこうして縁があつた訳だし…。

とりあえずお互い元の世界に戻る為に力を合わせて頑張るって形じゃ駄目かな？」

「…つまり、お友達からのお付き合いってやつ？」

「うん、まあ、それ。」

「ふむ…」

入橋圭は己の口元に手をあてて少し思索する様な姿勢を取った。

悩むまでも無い事だろうと真菜月みするは少し呆れた。

しかしそんな入橋圭の姿に、真菜月みするは彼は本気で自分と恋仲になりたいのではという甘い疑惑を不覚にも頭によぎらせてしまっ

ていた。

「うん、じゃあいいや。それでよろしく！」

それまでの「ぽおず」が嘘のような軽い応答で、入橋圭は真菜月みするの要求をのんだ。

そして差し出された真菜月みするの手をしっかりと握る。

「しっかり俺が守るから…。」

「うん！」

二人の視線が信頼でつながる。

しかし入橋圭は真菜月みするのつかんだ手をそのまま自分の唇に近付けた事によりその信頼をすぐにぶちやぶっていた。

「ギャあつ！」

「…ッテエ!!！」

「何すんだ！お前！」

てかさつきから悲鳴ひどすぎ！怪鳥かよ！

それに人殴った事ねえって嘘だろ！

思いつきりかましやがって…!!！」

「入橋くんが悪いんじゃない！」

いちいちばいばいキスなんかして！

俺が守る？

そうよ！まず入橋くんが守ってよ！

あたしの体に触れんの禁止！」

「…禁止だあ？」

はっ…あいにくだったなア。

王子は姫の意思なんか無視して勝手に触れんだよ!!！」

「最低ッ！そんな事したら婚約破棄してやるからッ！」

「あつ！みする…それはよして…。ごめん、顔はやめて、ぶたないで…」

和解と同時に始まった痴話喧嘩を背中越しに聞きながら藤村教諭は密かに思った。

（案外似合いの「婚約」だ…。）

真菜月みするは、中々寝付く事が出来なかった。

先程気絶と共にそのまま寝入ってしまった事も要因だが、六畳一間に今日知り合ったばかりの接吻魔の青年と、視界の隅にちらりとする、今や黒の「しるくぱじゃま」に着替えた藤村教諭の眠る「はんもつく」が、何とも落ち着かない事が大きいだろう。

（これで寝るとかってさあ……無理だよ……）

「んー……。」「

！」

蚊帳の隅で、座布団を枕にして寝ていた入橋圭が寝返りを打つ。

「しゃつ」が透けて、首の辺りがほんのりと淡い光を放っている。

真菜月みするはぼんやりとその光に目を奪われていた。

（「印」の証……）

あそこにあたしの唇が……。）」

真菜月みするは先程見た、意外と白い入橋圭の白い首筋と鎖骨を思い出し、一人また懊悩した。

（絶対……眠れないから。）

真菜月みするはこちらに無防備な寝顔を向ける入橋圭を直視ししな

いよう、反対側に寝がえりを打っていた。

「……な……。」

布団の衣擦れの音に入橋圭の寝言がまぎれる。

真菜月みするは、もう一度入橋圭の方を振り返った。

入橋圭は先程と変わらないあどけない寝顔で眠りこけている。

（寝言……？）

真菜月みするはまた背を向けた。

遠くで夏虫と蛙の鳴き声が幻のようにこだましている。

昼間の熱気がしつとりと和らぐ夏の夜。

世界の全てがゆっくりと疲れを癒すそんな時間。

世界の全ての一つである真菜月みするも、気づけばうとうとと眠りに落ちてしまっていた。

遠くで笛の音のような音を聞いた気がしたが、夢か現かその時の真菜月みするには判然としなかった。

藤村教諭の朝は早い。

真菜月みするが目を覚ますと、すでにのりの効いた「しゃつ」に身をつつみ、おさんどんに励んでいた。

吊ってあった「はんもつく」もきちんと片づけられている。

「いつまで寝ているつもりだね？」

もう学生の活動時刻はとつくに回っている。」

「えっ……あ、はい！すみません。」

真菜月みするは教師に遅刻を怒られた学生よろしく、しょんぼりと

謝罪した。

うなだれて前を見れば、まだ入橋圭が蚊帳の隅で腹を出して眠っている。

入橋圭は昨日の「わいしゃっ」にひざ丈の「はあふぱんっ」という、何とも中途半端な格好をして眠っていた。

対する真菜月みするはというと、藤村教諭が「せかんどばっく」から出してくれた夏用体操着の上下を着用している。

その胸元には御丁寧にも藤村教諭直筆の達筆で、「真菜月」と「まじっく」で記入されていた。

自分の持ち物にはきちんと名前を書かなければいけないという、いかにも教諭らしい有無をいわさぬ名言で書き上げられてしまったのだ。

（もしかしたら、これが嫌で入橋くん上シャツなのかも…。）

そんな事を真菜月みするはぼんやりと考えていた。

「真菜月君、いい加減入橋を起こしたまえ。

朝食が出来る。」

「あっはい！」

真菜月みするは、とりあえず入橋圭の肩の辺りを揺すってみた。

入橋圭はその顔に少し不快感を浮かべると、わずらわしそうに真菜月みするのその手をぱしりと払っていた。

「なっ…。」

「甘い。」

真菜月みするが入橋圭のその行動に少しむっとしたのと、蚊帳の外から藤村教諭が発言し入橋圭のその後頭部を宙に浮く程の勢いで蹴りあげたのは、ほぼ同時の事であった。

「うでッ！つゝゝッ。」

入橋圭が後頭部を押さえて丸くなる。

そんな入橋圭の様子を藤村教諭は冷ややかな目つきで見下した。

「真菜月君、入橋はこの位しないと起きない。」

よく覚えておきなさい。」

「はぁ……。」

真菜月みするは藤村教諭の手慣れた入橋圭の扱いに少し感心した。

その日の朝食は、納豆の卵かけご飯と浅漬けの一揃い、それと胡瓜の冷たい味噌汁であった。

品目としては何という事もない素朴な朝食ではあったが、藤村「めいど」のなせる業であろうか…。

全ての食材に新鮮極上が宿っており、真菜月みするも入橋圭も朝からおかわりをした程だった。

（これも全て藤村メイド…。）

真菜月みするは「すうつ」で鶏舎を見回る牧歌的な藤村教諭の姿を、悶々と思い浮かべながら朝食を堪能した。

「あー、幸せ」。藤村センス、まじ俺の嫁にしたいから。」

朝食にご満悦の入橋圭はお腹をさすりながら告白する。

「入橋、教師と生徒の恋愛は禁止されている。」

その告白に藤村教諭は後片付けをしながら真面目に対応をする。

（藤村先生って案外、可愛い…。）

本人に告げたら、相当殺気のかかった視線で釘づけにされるであろう印象を真菜月みするは思いつき、一人微笑ましい気持ちに浸っていた。

「ところで真菜月君、君は料理は出来るのか？」

微笑ましく浸っていた真菜月みするに、藤村教諭が痛い所を質問す

る。

見れば興味深げに入橋圭も真菜月みするの方に視線を向けていた。

「……ちよつとだけ。」

真菜月みするは、消え入りそうな声で呟いた。

「ちよつと？それってどんだけ？」

入橋圭が怪訝そうな顔をして真菜月みするを見つめている。

真菜月みするは目をさ迷わせて狼狽した。

彼女の手料理はもっぱら「温めてちん」であつたからだ。

「……こりや早々に雅の奴でもスカウトするかなあ。」

何となく真相を察した入橋圭が、やれやれと言った感じで投げやりに呟く。

「みやび？」

真菜月みするがその名前を復唱していると、入橋圭は着るものを持つてさつさと用務員室の扉に手をかけていた。

「藤村センセ、俺一風呂浴びて雅んトコ行ってくるから。」

その間みするの事よろしく。」

「入橋、騎士の一人もない姫を一人にするのか？」

「騎士がいらないからこそその先生でしょ。」

弱者の特権使わなくちゃ。」

「……教師を「使う」？」

「うわっ！やべ、嘘だからっ！」

入橋圭は暗殺者のような空気を放出する藤村教諭と真菜月みするを部屋に残して、さつさと部屋から逃げるように出て行った。

ぱたぱたと遠く響いていく入橋圭の足音。

その音が扉のばたりと閉まる音と共に消失した。

おそらく「といれ」にでも入ったのだろっ…。

気づけば六畳一間に真菜月みするは、このとっつきにくそうな藤村教諭と二人きりになっていた。

（う……微妙にきまずいんですけど。）

何とも重い空気が立ち込める。

真菜月みするがどうにも耐えずらくなってきたその時、藤村教諭が言葉を発していた。

「今日はこの恐ろしく汚い部屋を掃除する。

真菜月君、君にも手伝ってもらいたい。

いいかね？」

一応了承を取ろうとするが、そのはらむ空気が明らかに否を言わせない藤村教諭の言に、真菜月みするは素直に従った。

どの道彼女にはこの世界でまだすべき事を見いだせていない。

それにちょうど体操着というのも掃除に適している。

藤村教諭指導のもと、真菜月みするは主婦と化して六畳一間の掃除に参加した。

入橋圭は用務員室傍の男子便所で全ての身だしなみを整えてそこを後にした。

一見するとただの男子便所のようになっているが、内部にはすでに入橋圭の専用と化した「しゃわぁ」まで内蔵されていて、外国の「ばするうむ」の様相を呈していた。

入橋圭は男子便所を後にすると校内の上階を目指していた。

入橋圭の目指す人物、白石雅。

多喜勇治と共に最後まで入橋圭のそばを離れなかった人物である。

入橋圭は白石雅が姫に仕えるとは思えなかった。

しかしここでは姫無しでは生きていけない。

それは冗談ではなく事実としてだった。

この学内では生活のあらゆるものが配給制だった。

そしてそれは姫の徳によって左右された。

姫が己の配下に施しを与える。

これがこの学園での不毛な支配体系だった。

男児一人では生きていけない。

しかし白石雅が死ぬ事は死んでもあり得ない事だった。

入橋圭は確信している、何故なら己が生きているからと。

そう…白石雅は入橋圭を心から愛している男児であった。

「入橋はよくこんな所で生活をしていられたな。」

藤村教諭の言葉に真菜月みするも賛成だった。

冷蔵庫を開けば闇、戸棚を開ければ闇、押入れを開けば闇。

昨晩までそこでよく寝ていたものだと思菜月みするは寒気を覚えた。
ほこりをごっそりと載せていた蚊帳は、今や外され窓も扉も全開に
されている。

黒一色だった藤村教諭が、ほんのり白くなる程に用務員室の闇は深
かった。

藤村教諭と真菜月みするは、今や揃いの黒「ますく」で格闘してい
る。

「もう！

入橋くん何でゴミ捨てないのぉ。

…っぐ、臭いよオ。

ヒイツ！小蠅エ！

げエツ！ゴキイツ！」

またまた乙女らしからぬ奇声をあげて押入れを冒険していた真菜月
みするが錯乱した。

入橋圭の服を分別していた藤村教諭が、そんな真菜月みするにそつと近づく。

近づきながら藤村教諭は、真菜月みするを翻弄し散開した無数の小蠅と「黒の貴婦人」を目にも止まらぬ速さで捕えていった。

「騒ぐ程のものじゃない。」

それだけ言々と藤村教諭は何事もなかったように窓辺に近づくと、そつとその手を開き彼等を逃がしていた。

「無駄な殺しはしない。」

慈愛の言葉も藤村教諭が語ると、何故か凄腕の暗殺者のように聞こえてくるから不思議である。

（良い人なんだろうけどなあ…。）

真菜月みするはそんな藤村教諭をぼんやりと見つめていた。

藤村教諭の氷の視線が真菜月みするの瞳を貫く。

常時敵意を放つ藤村教諭の視線に、真菜月みするは叱られているような気分させられる。

「真菜月君、君は私の分類したものを外に出す作業をしてもらおう。この部屋の掃除は骨が折れる。」

思わず助かりますと口にした真菜月みするは、藤村教諭から運搬の指導を受ける事となった。

「この袋の山が入橋の衣服だ。」

これは男子トイレの脇にでも放置しておきなさい。

入橋には私から洗濯するよう指示する。

もし従わない場合は焼却炉へ捨てる。

そしてこの袋の山はごみだ。

焼却炉で燃す。

焼却炉の場所は知っているか？」

「いえ、知りません。」

まだどこがどこかわからなくて…。」

真菜月みするがそう言つと、藤村教諭はだまって自分の「せかんどばつく」を漁り始めた。

中から折りたたまれた羊皮紙を一枚抜き出す。

それを藤村教諭は真菜月みするに手渡していた。

「入橋がすでに持っていると思うが、この学園の地図だ。使いなさい。」

くたりとした羊皮紙を真菜月みするは広げてみた。

黄ばんだ羊皮紙の上には筆で描いた様な学園の見取り図が描かれている。

まるで某魔法学校の地図である。

階層ごとに平面に描かれた教室の枠の中央には、何年何組などといった教室名が書かれている。

全ての文字が旧漢字で書かれたそれはまるで古文書のようなものであった。

「ここが今真菜月君のいる用務員室だ。」

藤村教諭の示した1階の小さな部屋が、絵の具を落としたような濃い藍色に染まっている。

よく見れば大小様々の7色の色が校内のあちらこちらに広がっていた。

「この色は領地を示している。」

今真菜月君の色はここから男子トイレの所まで続いている。

つまりこれが真菜月君の領地だ。」

「あたしの領地…。」

ざっと見取り図の色を辿る。

どの色も真菜月みするの色より大きく広がっていた。

「領地の色は一定期間その場所にその色の騎士が出入りすると染まるようになっていいる。」

とにかく今は他の色のある所に近づかないようにしたまえ。

さて焼却炉の場所だが――」

そういうと藤村教諭はその羊皮紙を引っくり返し、今度は校庭全ても網羅された立体的な学園図を示して焼却炉の場所を真菜月みするに教授した。

真菜月みするは用務員室の外へ出た。

とりあえず入橋圭の汚物を男子便所の前に山積みになると、焼却炉目指して外に向かう。

外へ出る為の一番近い通用口は、用務員室の隣の奥まった廊下の先にあつた。

外に出た真菜月みするは夏の日差しの強さに思わず目を細めた。

遠くで油蟬のやかましい鳴き声が聞こえてくる。

けれど人の気配はやはり全く感じられなかった。

（あたし、本当に何してんだろうなあ……。）

夏の日差しは容赦なく、地面とそこを歩く真菜月みするをじりじりと焼きつける。

地図で示された場所には確かに焼却炉があり、煙をゆらゆらと空へ伸ばしていた。

（環境に悪いから焼却炉って駄目なんじゃなかったっけ……。でも先生が言うんだし、いっつかもう……。）

夏の暑さと焼却炉の熱さで考えるのも面倒になった真菜月みするは、両手のごみをぽんぽんと焼却炉に投げ込むと、もと来た道を歩き出した。

あともう一往復しなければならぬ、それを思い真菜月みするが少しうんざりした時だった。

「姫だあゝゝゝ!!」

何処にいたものやら、一人の男児が真菜月みするに飛びかかってきた。

その日も優雅に、ことり姫は食後のお茶を楽しんでいた。

何処から調達したものが、猫足の長椅子にゆったりと腰を掛け華やかな「くつしよん」にその華奢な体を預けている。

その背後では学校にはいささか不似合いな「れえす」の「かあてん」が、夏の風に吹かれて揺れていた。

「くつしよん」や「れえす」の「かあてん」、それらは全てことり姫と一部の騎士達の手によるものであった。

学内校舎三階家庭科室並びに裁縫室、そしてそこに隣接する教室3つ。

それがことり姫の領地であった。

「ねえ、静馬。」

ことり姫が、そつと隣りに腰掛ける日野宮静馬ひのみや しずまに向けて手を伸ばす。その白く小さな手の甲には、桃色の淡い火花が咲いていた。

日野宮静馬がことり姫の問いかけに目視で応じる。

彼は存外無口で真面目な人物であった。

その事は彼の精悍な顔つきや、夏の陽気にもかかわらず詰襟もきちんと学らんを着こなしている所にも窺える。

教室の中こそ冷房が効いておりそれなりに過ごしやすいが、日野宮静馬は屋外でもこの服装で行動をしている。

それでいて汗は一粒も浮かべず涼しい顔をしていられるのは、日野宮静馬の精神力のなせるわざと言った所だろうか…。

そんな日野宮静馬をことり姫こと、早蕨さわらびことりは真に信頼を置いていた。

そう、彼はことり姫の王子であった。

「雅をここに連れてきて。」

昨日新しい生地を取り寄せたの。

今度造る制服の柄について二人でお話したいわ。」

ことり姫が、まさに小鳥のさえずりのような可愛らしい声で、日野宮静馬にお願いをした。

日野宮静馬は室内に目を移す。

そこには十数人の男児がそれぞれ華を生けたり、ことり姫の食後のお茶を片づけたり、扉の前で見張りをしたりと、ことり姫の為に静かに騎士としての務めを果たしていた。

日野宮静馬の視線が一人の男児に止まる。

日野宮静馬がその男児に向けて上げかけたその手を、ことり姫がそつとその小さな手で包み込むように押しとどめた。

「ことり？」

日野宮静馬が静かな声でその名を呼ぶ。

ことり姫は穏やかな笑みを浮かべて日野宮静馬に告げていた。

「静馬に呼んでてもらいたい。」

静馬と雅、二人が並んで扉を開けてくる姿を眺めていたいの。とても素敵な絵になるから。」

ことり姫がはにかむように微笑んだ。

日野宮静馬は、このことり姫の微笑みが好きだった。

この微笑みの為なら何でもしたい、そう心に誓うようになって随分と久しい。

日野宮静馬はことり姫のその可愛らしい小さなお願いに軽く頷くと、そつと隣に置いておいた軍刀を手のことり姫の元を後にした。

日野宮静馬が廊下に出るとそこでもことり姫に仕える騎士たちが、床を拭いたり廊下の窓に掛けられた「かあてん」を取り換えたりと、それぞれの仕事に従事していた。

ことり姫に仕える騎士は、皆穏やかな顔をしていた。

良い所を見せて共に卒業したい、そういった欲の皮を貼り付けたものはすでにこの国には一人としていなかった。皆ことり姫の人柄に惚れ、心から慕っていた。

（本当に良い国になった…。）

日野宮静馬は、仕事の手を休め己に挨拶をする騎士達に軽く手を上げながら奥の裁縫室へと向かっていった。

裁縫室からはすでに「みしん」を動かす音が鳴り響いていた。

扉を開けば整然と並べられた「みしん」を前に、男児達がそれぞれ自分の作品を創作している姿がまず目に入る。

そして壁際にはやはり猫足椅子に腰かけた男児達が、刺繍をしたり編み物をしたりとそれぞれの仕事に没頭していた。

良い年した青春男児達が裁縫に勤しむ姿は、一種異様な雰囲気醸し出していたが、この国ではそれが正しい姿として存在していた。

皆が脇を通り過ぎる日野宮静馬に、仕事の手を止め軽く会釈をする。

日野宮静馬はそれに応えながら、目指す奥の一角へと向かって行った。

「雅、ことが呼んでいる。

新しい制服の生地が届いたらしい。」

窓辺で優雅に、まるで「おるがん」でも弾くかのように「みしん」を動かしていた白石雅はおもむろに顔を上げた。

肩までかかる栗色の髪の毛、同じく栗色の透き通る硝子玉のような夢見る瞳、「あんでいくどおる」を思わせる上品な顔の造形、何より淡い花柄に「れえす」をあしらった既製品のようなお手製の「せえらあ」姿は、深窓の令嬢を想わせた。

男児でも思わず見惚れる女装の麗人、それが白石雅その人であった。

「本当に？嬉しい。
今行きます。」

男声というより声の低い落ち着いた女性のような声音で白石雅は日野宮静馬の言葉に応じると、蝶のように軽い足取りで日野宮静馬に付き従った。

誰もがその後ろ姿に振り返り、そして目を奪われる優雅な所作。皆白石雅を密かにもう一人の姫君として慕っていた。

「ことりは雅の事を気に入っている。」

「僕もことりさんの事は好きです。」

「……なら共に「卒業」しよう。」

日野宮静馬が隣を歩く白石雅を歩みを止めてじっと見つめた。それに合わせる様に白石雅も足を止めて、その硝子玉の様な瞳にその精悍な顔つきを穏やかに映す。

まるで青春映画の「わんしいん」のような光景に、廊下にいた騎士達是我知らず見とれていた。

「御好意はとても嬉しく思います。」

けれど僕は——」

「入橋圭か？」

彼は駄目だ。」

「……………」

白石雅が夢見る瞳でぼんやりと日野宮静馬をじっと見つめた。

（…………これが本当に男児の顔か？）

不覚にも胸の奥でうずきかける自分を日野宮静馬は心の内で叱責する。

「行方不明になって久しい。」

ここでは姫なくして男児は生きていけない。」

「けれど圭の墓標はありません。」

「っ——」

「ありがとうございます静馬、けれど僕は圭を待ちます。」

穏やかだけれど、芯のある静かな言葉に日野宮静馬は黙した。

こうしたやりとりを白石雅は、ことり姫や日野宮静馬との間で何度も交わしていたが白石雅の決意が揺らぐ事はなかった。

日野宮静馬は歩み始める。

けれど白石雅は歩みを止めてそこに留まっていた。

「雅？」

怪訝に思った日野宮静馬は白石雅を振り返る。

あまり感情を外に出す事のない日野宮静馬ではあったが、その時の彼は誰の目から見ても驚きの表情を浮かべていた。

そこにいる白石雅の表情が、日野宮静馬が初めて目にするものであったからだ。

いつも夢の中からこちらに寂しげに微笑むような表情しか浮かべた事のなかった白石雅が、今や瞳を大きく見開き、まるで初めて生命誕生の瞬間を目撃しているかのような高揚感を湛えている。

その唇がわずかに震え、小さく言葉を紡ぎ出していた。

「圭……。」

その言葉に我を取り戻した日野宮静馬は白石雅の視線を辿った。

幻ではない、そこには確かに入橋圭の姿があった。

人をくつたようにわずかに浮かべた微笑みも、実はその瞳の奥に見え隠れする誠実も全て日野宮静馬の知る在りし日の入橋圭の姿であった。

まるで「だんす」にでも誘う貴族さながらに、入橋圭がそっと右手を差し出した。

「行こう、雅。」

日野宮静馬がいけないと思った時にはすでに遅かった。

日野宮静馬の両の腕が己の意に反して背中へ回ると、白石雅が隣を風のように駆けていくのはほぼ同時の事だった。

（蜘蛛。）

日野宮静馬が忘れかけていた白石雅の「通り名」を思い出す。

日野宮静馬の手を離れた軍刀が床を鳴らすのと、白石雅がことり姫のいる教室へ足を踏み入れるのもほぼ同時の事だった。

「雅ッ！」

跡を追おうとした日野宮静馬であつたが、まるで簀^{すま}巻きにされているかのように体の自由が利かず、その場で受け身もとれずに倒れ込んだ。

いきなりの事に行動を起こせなかった廊下にいた騎士達が、慌てふためきながらも日野宮静馬の救出に向かう。

「俺よりことりを守れッ！」

その言に何人かの騎士達が白石雅の跡を追って教室へと踏み込んでいく。

入橋圭は何もしない。

ただその光景を眺めていた。

教室に突如飛び込んできた白石雅に、ことり姫は初め驚きと喜びの表情を浮かべていたが、すぐに色を失くし寂しげな微笑みを柔らかく浮かべていた。

ゆつくりとことり姫を見つめながらことり姫に近づいてくる白石雅。その後ろからなだれ込むように廊下の騎士達が突入する。中にいた男児達は誰もがぎょっとした。

「誰もその場を動く事は許しません。」

ことり姫が可愛らしい声で静かに告げる。

すると室内の騎士達はもとより、白石雅もその場に足が固まったように動けなくなっていた。

ことり姫の徳の高さ故の力だ。

この国の男児は触れる事はおろかその言葉にも逆らう事は許されない。

しかし白石雅にとってそれは一瞬の事でしかなかった。

すぐさま己の意思で歩を進めことり姫を目指し始める。

「行ってしまうのね…。」

そんな白石雅を見つめながら、小さくことり姫は呟いていた。

動けなくなった男児達がその意味を察し、口々に白石雅に向けて非難の声を上げていたが、ことり姫の「静かにして」の一言で誰も話す事が出来なくなっていた。

白石雅はことり姫の前に静かに跪いていた。

ことり姫がそつと手を差し出すと、白石雅は慣れた手つきでその指先に口づけをした。

それはかつてことり姫に「騎士の誓約」を立てた時と全く同じ情景であった。

白石雅がゆっくりと顔を上げ、少し上に位置することり姫の顔を眺める。

ことり姫はそんな白石雅の顔を眺めて寂しく微笑んだ。

「雅、今までで一番綺麗。」

「ありがとうございます。」

そう言うとき白石雅はことり姫の手を握ったまま立ち上がる。

今度はことり姫が白石雅を見上げる形となった。

「私は綺麗な雅が好き。

私には雅を傷つける事は出来ないわ。

だから雅が私を拒絶して。

私はそれを許します。」

ことり姫が恐れのない瞳で白石雅を見つめる。

その言の意味を悟った室内の動けず話せない男児達が、悲痛の表情を浮かべて苦悶した。

白石雅の手がことり姫の手から離れる。

そしてその右手は頭上へと大きく振りかぶられ

「幸せになってね、雅。」

ことり姫の小さな願いの言葉と共に振り切られていた。

彼はとある国の騎士であつた。

騎士といつても下級騎士である。

その証拠に彼はいつもごみ捨ての仕事をやつてついていた。

彼の仕える国は五十人の騎士がいる。

彼はその国のごみを全て一人でいつも焼却炉に捨てていた。

どれだけ頑張つても汗臭いから近寄るなど皆から敬遠される今の状

況に、彼は不満を覚えていた。

その日もいつものようにごみを捨てていた。

そこにいつもとは違うものを見た。

人影だ。

この時刻にごみを捨てに来る国はここ随分とない。

彼はその姿に驚いた。

どう見ても女子である。

「すかあと」でなく「はあふぱんつ」の体操着姿をしているが、明らかに女子である。

彼は茂みを迂回してその女子を窺った。

見た事のない女子だ。

美人ではないが十分可愛らしい魅力的な女子である。

その体のどこにも「印」は見られない。

彼は女子の「はあふぱんつ」に隠れた太ももにそれがあるとは思いつきもなかった。

だから彼は思わず喜び叫んで飛び出していた。

何が起きたのか真菜月みするはわからなかった。

いきなり背後の茂みから飛び出してきた汗だくの男児。

真菜月みするは嫌悪を覚えた。

真菜月みするは恐怖を覚えた。

次の瞬間その男児はまるで真菜月みするとの間に壁でもあるかのようになり、弾かれまた茂みの中に戻っていった。

「……………何？」

おそろおそろ真菜月みするが茂みを除けば、そこには男児が伸びている。

（「騎士」は「姫」の許し無く「姫」に触れる事が出来ない。）

昨晚の藤村教諭の説明が真菜月みするの頭に浮かぶ。

（これが、それ……………??

でも吹っ飛ぶとかって……………うわあ…。）

真菜月みするはそれが理屈ではない事を知った。

とりあえず男児の危険が無い事を知り安堵する。

（でも起きると面倒だから今の内にさっさと済ませちゃお。）

真菜月みするはもと来た道を戻り、全てのごみを焼却した。

日野宮静馬が白石雅の呪縛から逃れことり姫のいる教室に踏み込んだ時、室内は男児達の聞くに堪えない号泣で溢れていた。

騎士達は自らの意思で姫の体に触れる事が出来ない。

まるで毒林檎で亡くなった白雪姫を悼む小人のように、皆ことり姫のいる長椅子の周りで臥して涙を流していた。

日野宮静馬はその小山のような人垣を乱暴に掻きわけて、中心にいるであろうことり姫の元へと辿り着いた。

そこにはことり姫が長椅子に寝そべるようにして気を失っていた。男児に思い切り振り切り切られたその左頬はすでに赤く腫れてきている。おそらく時間が経てばもっと腫れあがる事だろう。

悲しみと苦痛を儚げに浮かべて、その閉じられた瞳からわずかに涙を滲ませている。

その涙に気づいた途端、理性を失い日野宮静馬はことり姫を掻き抱いていた。

誠実な日野宮静馬がことり姫をこんなにしっかりと抱き締めた事は、これまでに一度もない。

そのあまりに小さく華奢なことり姫の体に、日野宮静馬は驚くと同時に狂おしい愛しさを、そして入橋圭達に対する狂おしい憎悪を抱いていた。

ことり姫の優しい香りと柔らかさが、何とか日野宮静馬の怒りをぎりぎりの所で押さえつける。

けれど日野宮静馬は心の中で深く誓いそしてそれを口にしていた。

「……許さない。」

「何か前より綺麗になつてない？雅。」

入橋圭は隣を歩く白石雅をまじまじと眺めながら明るく言った。

白石雅はそのあまりに直接的な賛美に思わず頬を赤らめる。

「恥ずかしいよ圭。」

そう言つて伏し目がちに恥じらう様は乙女そのものだった。

そんな白石雅を懐かしそうに眺めながら、入橋圭はふいに階段の踊り場で立ち止まる。

そんな入橋圭に合わせて白石雅も慎ましやかにその場に留まった。

「前にも言つたじゃん。」

恥ずかしがる事ないって。

雅は雅らしくしている姿が一番だよ。」

恥ずかしがる事ないって。

それが素直になる事を白石雅に教えてくれた入橋圭の大切な言葉。そして白石雅が入橋圭に恋をした大切な言葉だった。

白石雅が伏し目がちにしていた瞳をそつと入橋圭に向けて窺う。

入橋圭は何も言わず白石雅の頭をそつと己の肩に抱き寄せていた。

「お待たせ雅。」

「うん……。」

白石雅は入橋圭が自分を恋愛の対象としていない事を知っていた。入橋圭は白石雅が自分を恋愛の対象としている事を知っていた。通常こうした認識を持った同性同士の関係は、一方からの強烈な拒絶によりすぐ終わりを見せてしまう。しかし入橋圭はそれをしなかった。

白石雅から愛の告白を受けた時は、さすがに驚きはしたが不快感を表す事はなかった。

入橋圭は頭を掻きながら照れくさそうにこう言った。

「んゝ男とか女とかで雅見た事無いからよくわかんないなあ。とにかく俺は雅が好きだよ。」

白石雅は自分自身を好きだと言ってくれた入橋圭に再び恋に落ちていた。

その後俺とどうかしたいのと訊くびくびくとした入橋圭の質問に、白石雅はただそばにいたいと素直に答えていた。

そっかわかったと答えた入橋圭の顔を見た時、白石雅は彼なら自分が望めば受け止めてくれるかもしれないと思った。

けれどそれを白石雅は望まなかった。

そういう望みがないと言えは嘘になる。

しかしそれを望めば初めて自分を認めてくれた入橋圭を傷つけ、今の関係が壊れる事は間違いない。

それは閉じられたこの世界であまりに苦しく辛いものであった。

だから白石雅は時に男のように信頼し、時に女のように信頼してくれる、この今の入橋圭の傍にありたいとこの時より強く思ったのだ。

「……何かこうしてると微妙にムラムラしてくんだけど。」

入橋圭が白石雅の頭を抱えたままぼつりと呟いた言葉に、白石雅はくすりと笑った。

「そうなると僕は嬉しい。」

「えっ… やっぱそういうもんなの？」

「だって僕は男の子だよ、圭。」

「なる程。」

二人はお互いの顔を見つめて無邪気に笑った。

友情とも愛情ともつかない不思議な関係、けれど確かな信頼で二人は結ばれていた。

入橋圭が笑いを止めて静かに白石雅を見つめる。

その決意に満ちた顔に白石雅も笑いを納めてその顔を真剣に見つめ返した。

「俺はここを「卒業」したい。」

入橋圭は決意を言葉に表して己の首筋を白石雅に露わにした。

淡く咲く花火に白石雅は目を見開き、ついで入橋圭の顔を眺める。

「圭、どうして…もう。」

困惑する白石雅に対して入橋圭は軽く微笑んだ。

その瞳の奥の寂しさに白石雅の心も思わず悲しみがよぎる。

「帰りたいんだ、元の世界に…。
ここはもう嫌なんだ。」

その短い言葉に白石雅は入橋圭の心の全てを読み取っていた。

軽く唇を結んだ後、白石雅は優雅に入橋圭に微笑んでいた。

男児でも見惚れる極上の笑顔を、入橋圭を心から安心させる為に…。

「わかったよ圭。」

僕は君の為に騎士になる。」

丁度昼飯の準備でもしようかと藤村教諭と話し始めた時、入橋圭は白石雅を連れて用務員室に帰還した。

真菜月みするは、突如現れた麗人に絶句した。

唇をわなわなと震わせながら、入橋圭に駆け寄った。

「ちよっ……ちよちよちよ。」

「みする、何言いたいかわかんない。」

本当はわかつているであろう入橋圭が、意地悪く真菜月みするの言葉をまっつてにやにやしている。

その隣で、麗人白石雅は少し驚いた顔をしてその様子を眺めていた。

「一夫多妻制だったの??」

真菜月みするのその言葉に、入橋圭と白石雅は爆笑した。

入橋圭と白石雅は、目をぱちくりさせる真菜月みするの前に、げらげらと笑い転げた。

こっという笑い方をすると、白石雅の男性が少し際立つて見える。

真菜月みするはそれに気づき、思わず指を指して声を上げていた。

「え……まさか男の子??」

真菜月みするは、目の前に座る白石雅をまじまじと見つめていた。こっして澄ました顔でいる白石雅は、どう見ても女性にしか見えな

い。
そしてどう見ても、自分より美しい容姿にしか見えなかった。

「こちら白石雅。

女装好きの男の子。

基本女の子好きなノン気だけど、俺の事だけ本気で好き。

料理裁縫、家事なら何でも出来る淑女の鏡。

けど通り名「女郎蜘蛛」の「称号」を持つ糸の使い手でもある。
王子経験も2回ある男としてもかなり切れる奴だから。」

「そんなに褒められると困る」と恥じらう白石雅の姿は、初めて恋をして恥じらう乙女の姿そのものだった。

折角午前中の静かな時間で冷静さを取り戻しかけていた真菜月みするではあったが、この白石雅の出現にまたも平静をかき乱されていた。

色々突っ込み所はあったような気もしたが、真菜月みするはただただその説明を耳に流す事しか出来ないでいる。

「という訳だからさ。

みする雅にキスしてよ。」

「はいッ????」

それまでならだと耳の中を通り過ぎて行った入橋圭の言葉が、突如脳髓に突き刺さる。

入橋圭はただ面白そうにへらへらしている。

白石雅は変わらず澄ました顔をして、真菜月みするを見つめている。
藤村教諭は自由恋愛を推奨すべく、一人おさんどんに移ろうと席を立てようとしていた。

「藤村先生、この問題よくわかりません!」

真菜月みするははしとばかりに歩き出した藤村教諭の「ずぼん」の裾を掴み、助けを求めている。

藤村教諭は真菜月みするを物乞いでも見下すように一瞥すると、と

りあえずその場で足を止めて説明を始めてくれた。

放つ空気の緊張感はとても重苦しいものではあったが、この世界でとりあえず一番常識人として見える藤村教諭に、真菜月みするは頼らざる負えなかったのである。

「昨夜少し説明したと思うが、「騎士」とは「王子」以外に「姫」に認められた男児の事をいう。

「騎士」になる為には「騎士」の誓いを立てる必要がある。

これを「宣誓」という。

「王子」の「婚約」と異なり、「宣誓」はまず「姫」の許しがなければ成立しない。

姫の「祝福」を受け、「騎士」はそれに対し「宣誓」を行う。

これで主従関係は成立する。

平時、「姫」の許しなく「姫」に触れる事は出来ないが、「宣誓」を破棄する時のみそれは可能となり、「騎士」は自らの意思で行う事が出来る。

勿論これは「姫」からも行う事が出来る。

確認事項はあるかね、真菜月君。」

「…つまり「祝福」がキス。」

「正解だ、あとは真菜月君の好きにしまえ。」

それだけ言うと、藤村教諭は軽く足をはらい真菜月みするの手をどけると、台所へと向かっていた。

真菜月みするがここに来て藤村教諭の事でわかった事は、神経質で自分の「ぺえす」を乱される事が非常に不愉快だという事だった。藤村教諭の「すけじゅうる」は、もう昼のおさんどの時間になっているのだろう。

それだけ言葉をかわすと、さつさと無言で台所に向かっていた。

これ以上話す事はないといわんばかりの有無を言わさぬ拒絶。

真菜月みするは正面の問題に向き合う事にした。

「あたしからするの？」

「そつ……みするからするの。」

「キスしないと駄目なの？」

「そつ……キスしないと駄目なの？」

「入橋くん、面白がつてない？」

「そつ……俺面白がつてんの。」

入橋圭はご満悦の顔だ。

それはどう見ても「せくしゃるはらすめんと」の陰謀にその身をゆだねている顔である。

乙女から初対面の男児に西洋よろしく接吻をするなど、純日本女学生の実菜月みするには大きく抵抗があった。

それを察した白石雅が、そつと助け船の言葉を投げかける。

「実菜月さん、「祝福」は手でも大丈夫だから。」

「ちよつ…雅！余計な事言うんじゃねえよ！」

そう抗議した入橋圭の顔面に、実菜月みするは手近の座布団を投げつけていた。

「なんて手の早い姫だ」と入橋圭はぶーぶー文句を並べていたが、実菜月みするはそれを無視して白石雅に向き合った。

白石雅はわずかに頬笑みを浮かべながら、その右手を実菜月みするの前に差し出す。

舞を踊るかのような優雅な仕草に、実菜月みするは思わずみとれていた。

その姿は「みつしゅん」系「すくうる」に通う令嬢を思わせる。

実菜月みするは思わず「はい、お姉さま」と口走りそうになった口を軽く結んで、その手をそつと取っていた。

実菜月みするは衝撃を受けた。

白石雅の手は実菜月みするの手より白かった。

白石雅の指は実菜月みするの指より細く長かった。

白石雅の爪は真菜月みするの爪より形良く光沢を放っていた。

（女としてすごく悲しいんだけど…。）

真菜月みするは軽く消沈した。

とりあえずその彫刻のように美しい手を、真菜月みするは自分の唇に近づけていく。

が、その行為は途中でびたりと静止した。

入橋圭が隣で、目を爛爛とさせてその様子を眺めている。

白石雅が涼しげな顔で、唇を近づけようとする真菜月みするの顔をじっと見つめている。

その瞬間真菜月みするは衆人環視の中、口付けを行う事に激しく抵抗を覚えていた。

「駄目！白石くんだけ来て！」

真菜月みするはそれだけいうと、白石雅の手を取ってそのまま用務員室の外へと出ていった。

入橋圭は「あゝん、待って」と甘い声を出すや、その後を追おうとした。

しかし用務員室の扉の前まで来た時、入橋圭は歩みを止めていた。入橋圭の視線が隣の壁へと移る。

そこには菜箸が垂直に刺さっていた。

その衝撃の激しさゆえか、びいんと耳に響く音を鳴らしながら、それはかすかに震えている。

「入橋、正しくない。」

藤村教諭の有無をいわさぬ説法に、入橋圭は「はい」と小さく答えて固まった。

用務員室前の廊下は静けさに満たされていた。
扉一つ隔てた用務員室の音さへすでない。

藤村教諭の話だと、自分たち以外にも人がかなりここで生活をしているはずなのに、耳に入るのは風に吹かれる青葉と蝉の音ばかりである。

真菜月みするは瞬時に思った。

（こっちのがきまらなかった…。）

人気のない廊下に青春男女が二人。

御丁寧に手までつないでしまっている。

真菜月みするはこの先、どういう手順で事を進めればいいものやらと困惑した。

何よりこれから口付けするという事を、お互い認知しているというのがどうしようもなく恥ずかしい。

（べっ…別に口じゃないんだし。

義務なんだし…。

いいのよしても！）

真菜月みするは訳の分からない言い訳を自分の中で呟くと、白石雅を見つめて宣言した。

「それじゃキスします。」

「はい、どうぞ。」

まるで執刀医のような応答に、白石雅は少し可笑しそうにほほ笑む。笑顔がこぼれるとは、まさにこういう人間の表情を言うのである。

（本当に綺麗だなア…。）

真菜月みするは、またそこで躊躇し固まっていた。

しかし時間をかければかける程、恥ずかしさが増す事を悟った真菜月みするは、そのままひと思いに、白石雅の手の甲に触れるか触れないかの口づけをして手を離していた。

白石雅の手の甲に小さな華が咲く。

姫からの「祝福」が正式に成立した証である。

たった1秒足らずのこの行いに、真菜月みするはどっと汗をかいてしまっていた。

「は、恥ずかしい。」

真菜月みするは己の手を顔にあてようとした。

しかしその手は白石雅に優しく奪われ、そのまま白石雅は跪くと、そつとその手に口付けをしていた。

あまりに流れる所作に、真菜月みするは恥ずかしい事も忘れて見惚れていた。

真菜月みするの指の上で、柔らかな白石雅の唇が動き言葉を紡ぐ。

「僕は貴女に誓います。」

指先に触れる白石雅の温かい吐息に、真菜月みするは心臓が引っくり返りそうになった。

あわあわと今にも泡を吹きそうな真菜月みするの前に、白石雅はすくりと立ち上がる。

（スカートはいた王子様だ。）

真菜月みするはあわや恋に落ちかけていた。

白石雅がぼんやりとしている真菜月みするに微笑みかける。

「真菜月さん、さっきまで掃除してた？」

いきなり発せられた白石雅の場違いな質問に、真菜月みするは首をかしげた。

白石雅が変わらぬ綺麗な笑顔のまま、真菜月みするに真実を告げていた。

「何だか手、雑巾臭かったから。」

「いやぁアアア~~~~！ごめんなさい~~~~ッ！！」

真菜月みするは顔を完全に覆い隠して絶叫していた。

初めて校内放送の「めでい」を耳にした真菜月みするは、「あーやっぱり学校だったんだなあ」という牧歌的な感想を抱いただけであった。

それは昼食の最中、卓袱台を囲みざるそばを食している時の出来事であった。

（お昼の校内放送か何かかな？）

真菜月みするは、一人浮かれ気分で周りの人間を見回してみたが、どうもそうではないらしい。

皆部屋の上隅に設置された「すぴいかあ」に、玉音放送を拝聴する国民よろしく集中している。

真菜月みするがどうしたのと皆に質問するより先に、「すぴいかあ」は言葉を発していた。

「わたしは早蕨さわらびことりの王子、日野宮静馬だ。

学園を統治する姫並び王子に警告する。

入橋圭が姫を得た。

繰り返す、入橋圭が姫を得た。

配下並びに入橋圭の手の者に十分警戒されたし。

繰り返す、配下並びに入橋圭の手の者に十分警戒されたし。

以上。」

玉音放送というより空襲警報のような内容の校内放送は、一方的に

語るだけ語ると短い「めろでい」を流して終わりを告げていた。

「戦争開始だ。」

「え？」

突然物騒な事をいう藤村教諭を真菜月みするが見ている間に、白石雅がそつと席を立つ。

「早いな静馬は。」

もう網かけといたほうがいいよね。」

「うん頼むわ、雅。」

入橋圭と白石雅がお互い勝手を心得ているといった様子で応答すると、白石雅が用務員室を後にする。

藤村教諭と入橋圭は、何事もなかったようにざるそばを啜り出す。さすがに何が起きているのか知りたくなつた真菜月みするは、2人に質問をぶつけていた。

「ちょっと…どうしたの？」

いまの放送何なの？

それに戦争って…。」

「奪いあいだからね。」

入橋圭が口にそばを入れたまま、ぼそぼそとしゃべり出した。

「国が出来るとその分だけタイミング良く、男児がぼんぼん神隠しされてくる訳じゃないからさ。」

そうなんと今いる男児から選ぶ事になるだろ？

でも男児は皆どこかしらの姫に今仕えてる。

姫の徳が増えないと卒業出来ない、徳を増やすには人を集めるのが手っ取り早い。

だから俺達は卒業するために、ある程度他から人を奪う形になるのさ。」

例えば雅、今放送してた日野宮の国から奪ってきた。

だからアイツは怒って特権使って校内放送仕掛けてきたって訳。」

「……そうなる、どうなるの？」

真菜月みするは恐る恐る入橋圭に質問した。

「この国の騎士を増やすのが難しくなる。

今日みたいな雅の不意打ちがもう出来ない。

けど俺達だけじゃなく他の国のヤツ等も相当苦勞すんだけどな。

今の国がもう嫌だつて騎士達の内乱とかに氣をつけないとなんないし。」

真菜月みするはやはり何が何やら話についていく事が難しかったが、自分が大きな抗争に巻き込まれかけているという事は把握した。

そう…大きな抗争…大きな――

「のんびりしてて大丈夫なの！

攻めてくんじゃない??」

真菜月みするは動揺した。

入橋圭は半眼で余裕たつぷりににんまりと微笑む。

入橋圭のよく見せる微笑み、その表情はどことなく「ありす」の「ちえしゃ」猫を思わせた。

入橋圭は藤村教諭手製の漬物に手をのばし、ぱりぱりと食べながら話を続けた。

「大丈夫大丈夫。

国民の少ない出来たての国はこうして「セン公」の保護下にあるから、攻め込まれる心配はまだないの。」

だから心配するのは騎士になりたいってくる奴等だけ。」

入橋圭がそう言った所で、白石雅が用務員室の扉を開けて戻ってきた。

入橋圭の「守備は？」の質問に「問題ないよ。」と答えると、何事もなかったように席に着くとざるそばを啜り始める。

入橋圭は真菜月みするが「何が？」と聞く前に、白石雅の行動を説明した。

「雅には、今俺達の領地に侵入出来ないよう糸を張ってきてもらったんだ。」

俺や雅って相当有名だから乗り換えたいって奴等、結構来ちゃうだろうからさ。」

「えっ！そうなの？よかったじゃない入橋くん。」

「それがそうとも言えないんだよね、みする。」

人が増えたら藤村センスの鉄壁の義務教育が終わっちゃうんだ。そしたら自分たちで自衛しなくちゃなんない。

でもそんな簡単に鞍替えする弱い騎士ばっか集めた国だったら、すぐ潰れて終わりなんだよ。」

「そう、なんだ…。」

何やら色々と複雑そうな話に、真菜月みするは不安を覚えた。

そんな真菜月みするの頭を、向かいから入橋圭が軽くぽんぽんと叩く。

「とにかく、始めは信頼の置ける力のある騎士を仲間に加える事が大切だから。」

少し俺達にまかせてよ、みする。」

入橋圭はそれだけ言っと、ずるずるとそばを啜り出した。

そこで終始皆のやりとりを静観していた藤村教諭がぼそりと呟いていた。

「そこまで建国を心得ているなら、君達に私の義務教育は不要だな。」

「いえ！駄目です！」

教えてください、いってください！」

入橋圭が血相を変えて藤村教諭に懇願した。

（何か、今日はすごい色々あつて疲れちゃった。）

真菜月みするは一人体操着を脱ぎながら、今日一日の事を振り返っていた。

真菜月みするは男子便所にいた。

真菜月みするは、別に普段から男子便所を使用する習慣がある訳ではない。

昨晚女子便所を使用しようとした所、長らく使用されていなかった為か水道も下水もきちんと機能せず、外観もどうしようもなく不衛生であつたためだ。

という訳で真菜月みするは、昨晚より男子便所で用を済ませている。少ない便所の個室と男児用小便器の立ち並ぶその空間は、乙女である真菜月みするにとって決して居心地の良い所ではなかった。

別に悪い事をしている訳でもないのに、何だかいたたまれない気分になせられる。

真菜月みするは裸になると、便所の奥に設置された「しゃわあ」に足を踏み入れた。

そこには石鹸や「しゃんぷう」、「りんす」等の洗面用具が乱雑に床に散らばっていた。

用務員室を闇で埋め尽くしていた入橋圭にしては綺麗に片付いているなど、真菜月みするはぼんやり思った。

服もきちんと代えていた所を見ると、こと身支度に関しては清潔な人物なのかもしれない。

爽やかな花の香りが真菜月みするの鼻をかすめた。

何やら他人の家に勝手に入ったようで落ち着かない。

おそらく彼氏の家で「しゃわあ」を使ったら、こんな気分になるのだろう。

（って…入橋くん、彼氏じゃないしッ…！）

真菜月みするは思い切り「しゃわあかあてん」を閉めると、昼間の汗を流し始めた。

真菜月みするは手近な洗面用具に手を伸ばした。

入橋圭の使用する洗面用具。

入橋圭がかすかに漂わせる香り。

使えば使う程に、その狭い空間は入橋圭の香りで満たされていく。真菜月みするは無性に恥ずかしくて仕方がなくなってきた。

（くそお…また入橋くんのセクハラだ…。）

半ば八つ当たりな事を考えながら、真菜月みするは頭を洗う。

（あれ？この香り……。）

昨晚も使用した「しゃんぷう」の香りに、真菜月みするは何か引かかるものを感じた。

（何処かで嗅いだ事があつたかも…。）

そう…少し前に…。）

机の上の彼岸花

「あ……。」

真菜月みするの記憶が、突如一つの光景を浮かび出していた。

それは昨日の教室で嗅いだ彼岸花。

無臭の華から一瞬だけ香った爽やかな夏の香り。

それはまさにこの「しゃんぷう」の香りであった事に、真菜月みするはこの時気づいた。

（じゃあ……あの華は、入橋くんが置いたもの……？）

真菜月みするの体を伝い、泡が床へと流れていく。

「しゃわぁ」で流されたそれは、「たいる」に埋め込まれた排水溝へと吸い込まれていった。

（どうして？）

ぱんつという男子便所の扉が乱暴に開く音で、真菜月みするは我に返った。

その後突如「ばけつ」が床に弾ける音が響き渡る。

突然の事に真菜月みするは体をびくりとさせた。

何より真菜月みする全裸である。

とりあえず手近の手ぬぐいで前だけ隠してみたが、真菜月みするは安心感を得る事が出来なかった。

相手は一言も発さず、扉の前に立ってこちらを窺っているようだ。

相手の姿は半透明の「かあてん」でいまいち判別としない。

「誰？入橋くん？？」

真菜月みするはおそろおそろ声を発していた。

その声を合図に、突如相手がこちらに向かって歩き出す。

かつんかつんと相手が近づくとびにその靴が「たいる」を打ち鳴らす。

固く鋭いその足音、それは普通の靴というより――

「ビーンゴ！あんたが昼間の放送の姫だね？」

「はいひいる」の立てる足音だった。

「藤村先生、僕にも体操着出してくれませんか？」

白石雅は藤村教諭に話しかけた。

何やら手帳を確認していた藤村教諭は、白石雅の服装を一瞥する。

「この格好ではいざ戦いの時に動けませんから。」

服も生地も全てことり姫の所に置いてきてしまいましたし。」

「そうか、わかった。」

そう言うや藤村教諭は、「せかんどばつく」から新しい体操着を取り出した。

きちんと胸の枠内に「白石」と書き上げると、それを無言で白石雅に渡す。

「ありがとうございます。」

お礼を言うと、白石雅はその場で制服を脱ぎ捨て、体操着に袖を通していた。

「あれ？普通に着替えるんだね、雅。」

体操着から頭を出した白石雅に、入橋圭が質問を投げかける。

さらっと髪の毛を払うと白石雅は、入橋圭に不思議そうな顔を向けていた。

「うん、まだ真菜月さんも戻ってこないだろうし。
問題ないでしょう？」

「いや、まあそうなんだけど、ほら俺いる、よ？」

入橋圭が照れくさそうに自分を指さした。

白石雅はそれが分からないといった顔をして、入橋圭に微笑みかけ

て答えていた。

「圭がいるって…別に。」

圭の事は好きだけど男同士なんだし、気にする事もないでしょう?」

(それは、そういうものなのか……。)

入橋圭と藤村教諭はにこにこ微笑む白石雅を見て、同じ感想を抱いていた。

白石雅は脱ぎ捨てた制服を手に取り眺めている。

「少しサイズが大きいけど真菜月さん着るかな?

お姫様がいつも同じ制服体操着ていうのも可哀そうだし…。裁縫用具があればもう少し治せるんだけど…。」

そう言つて白石雅が藤村教諭に簡単な裁縫道具を出してもらおうと思つた時、突如「ばけつ」の弾ける音が廊下から響き渡つた。

途端に白石雅と入橋圭の顔が強張る。

「圭ッ!」

「あぁッ。」

二人はすぐに用務員室を後にし男子便所へと向かつていた。

白石雅は昼間網を張っていた。

糸の結界は白石雅の十八番だ。

奥に進めば進むほど危険度が増すように仕掛けてある。

まず見える糸で警戒を呼びかけ、次第に殺傷性のある見える糸、次に殺傷性のある鋭利に見える糸と見えない糸で複雑に張り巡らせた結界が襲う。

最後には神経性の薬を糸に塗りつけ、触れれば瞬時に糸が集約して絡まるおまけ付きだ。

さらに白石雅は用心深い。

真菜月みするが男子便所に入るのを確認すると、最後に外から開けた時のみ落ちるよう「ばけつ」を仕掛けておいた程だ。

しかしその最後の「ばけつ」が弾ける音がした。

しかしそれより前に、罨と共に仕掛けたかかった事を告げる報せが一切なかった。

それは通る者を傷つける結界が全く機能していない事を意味している。

つまり相手は男児が傷つける事の出来ない相手…。

（姫か……！）

「みするッ！」

「真菜月さん！」

二人が男子便所に駆け込んだ時、そこには一人の姫と藤村教諭が対峙していた。

「誰ですか…？」

女性の声に少し安心した真菜月みするは、そっと「かあてん」から顔を出して相手を窺った。

そこには一人の女性が立っていた。

黒の「せえらあ」を着て密編みをしているが、どう見ても青春乙女には見えない。

制服の襟もとは大きく開き、その隙間から黒の下着が覗かせ、むっちりと官能的なその肢体はいかかわしさで満ち満ちている。

「すかあと」「こそひざ丈まであるが、それは戦禍を潜り抜けた兵士

の服のようにびりびりと破け、そこから伸びる足は網「たいつ」にかなり踵の高い真っ赤な「はいひいる」という出で立ちであった。同じく真っ赤な「るうじゅ」の口の端には、またまた同じく真っ赤な花火が咲いている。

「私は暗罪凌子、姫よ。」

「あんざい、りようこさん？」

姫というより女王様、「せえらあ」よりも「ぼんてえじ」が制服の様な女、凌子様がそこには立っていた。

実際彼女は現世で女王様をしている女であった。

たまたま「ほてる」の一室で、いつものように鼻息ばかり元気なたるんだ中年男の客をいたぶり「ばるこにい」で一服していた所、たまたまその時の「ぷれい」で着用していた「せえらあ」から勘違いされて神隠しされた女であった。

暗罪凌子というのも店での名前である。

「困るのよねえ、女の子が増えると。」

その度に野郎共が無駄にサカつてさあ、迷惑なのよ。」

そういうや凌子様は、己の背後から大きな「さばいばるないふ」を取り出していた。

この世界で殺傷は合法だ。

特に姫を罰する者は誰もいない。

人を傷つける事に快楽を覚える凌子様は、この世界で完全に狂気の女へと生まれ変わっていた。

「だから死ねよッ！」

凌子様は「さばいばるないふ」を逆手持ちにすると、真菜月みするに斬りかかっていた。

真菜月みするはこのような状況に慣れていない。

真菜月みするはこのような状況に対処する術を知らない。

ただ「たいる」の壁にへばりつき、恍惚に笑みを浮かべる凌子様の凶刃を見つめていた。

（黒……。）

真菜月みするはその時色しか判別できなかった。

目の前一色の黒、真菜月みするは死んでしまったのかと一瞬思った。

「間近にするのは初めてだが、まさかここまでアバズレだったとはな……。」

「ふ……藤村先生イ……。」

藤村教諭の刃物のような冷たいその声に、本物の刃物を前にして真菜月みするは安堵を覚えていた。

極度の緊張状態から安心感を抱いた真菜月みするは、へなへなとその場に座り込んでしまっていた。

見れば藤村教諭は凌子様の凶刃を、あの出席簿の板を使い片手で受け止めている。

「使いなさい。」

そう言うや藤村教諭は振り返らずに、さっと自分の上着を真菜月みするに投げかける。

真菜月みするはそれをあわてて受け取った。

高価そうな「すうつ」はまだ止められていなかった「しゃわぁ」ですぐに濡れていく。

そっけないが確かな藤村教諭の優しさに触れて、真菜月みするは涙が出そうになった。

「へえ！

藤村センセイ、あんた「セン公」なんだぁ。

結構良い男じゃない？」

凌子様は「さばいばるないふ」を手元に戻して、ねっとり品定めするように藤村教諭を眺めた。

凌子様はこの学園で「義務教育」を受けていない。

この学園に辿りつき初めに会った男児から事情を聞くと、その男児を筆頭に半日で十数人の騎士を集めていたからだ。

それはあまりに簡単な事だった。

王子のみならず、騎士にも簡単に体を許す妖艶な姫に、食いつかない青春男児がいない訳がない。

しかし現在ではほとんどの男児が、姫とは名ばかりの毒婦、凌子様の恐怖政治に脅え、逃げるに逃げられずへつらっているというのがこの国の内情であった。

「みするッ！」

「真菜月さんッ！」

突如男子便所に入橋圭と白石雅が乱入してきた。

二人は凌子様、藤村教諭の姿を捉え、その背後で座り込む真菜月みするの姿を見つけると、とりあえず落ち着いた顔を見せた。

凌子様がゆっくりと顔だけ後ろに向ける。

「もう来たの？入橋圭。

あら？白石雅までいるのね。

ああ、だから日野宮静馬の放送だったのかあ。」

入橋圭があからさまに嫌な顔をし、白石雅は冷えた表情でそんな凌子様を見返した。

「凌子様、僕達は——」

「白石、ここは私に全て任せなさい。」

入橋、君もだ。」

藤村教諭が白石雅の言葉を低く遮る。

その声に凌子様はまた首を回して藤村教諭に向き直った。

「助かるわア。」

さすがにか弱い女の子一人でいきなり男三人はつらいから。」

凌子様はにたりと笑った。

藤村教諭は凌子様に向けて話し始めた。

「真菜月君は義務教育中だ。」

姫といえども手を出す事は許されない。」

「出してみたらどうなるのお？」

「懲罰する。」

「へえ……。」

凌子様は己の唇をいやらしく舐めた。

「さばいばるないふ」の腹を己の太ももにひたひたと当てて「りずむ」を取っている。

（この人、何でこんなに楽しそうなの……？）

真菜月みするは戦慄した。

「いいわア懲罰ッ！」

私の大好きな遊びよッ！

藤村センセイッ！」

凌子様は嬌声を上げて高笑いを始めた。

「うげエ……。」

入橋圭がわずかにうめく声を上げる。

一仕切り笑うと、凌子様はまたねっとりとした目付きで、藤村教諭を眺めまわした。

その視線は何とも強烈な色気で艶めかしく、その動き一つでぞくりとしたものを背中に走らせる。

青春男児なら大抵はころりと転がってしまいそうな視線ではあったが、青春乙女である真菜月みするにとつて藤村教諭の背後で見るそれは、不快で恐ろしいものにしか映らなかった。

「でも私まだ手にかけてないんだし見逃してくれるわよねえ。

今日はもう何もするつもりはないんだし…ね？」

「いや駄目だ、暗罪君には罰を受けてもらう。」

「ふうん…そ。」

凌子様がうすら笑いを沈めその瞳に狂気をぎらつかせる。

次の瞬間、突如凌子様は藤村教諭に不意打ちを食らわせようと凶刃を振るっていた。

「だから「セン公」って嫌いなんだよッ！

頭ガチガチでさあッ…死ねよッ！！」

凌子様の凶刃は藤村教諭の心臓を狙っていた。

しかし藤村教諭は右腕を突き出し、そこで刃を受けていた。

藤村教諭の動きには余裕があった。

おそらく右手に握る出席簿で受ける余裕もあつたに違いない。けれどそれをしなかった。

凌子様は確かな手ごたえを感じた。

目の前の藤村教諭の腕にも刃は食い込んでいる。だが血しぶきを噴いたのは凌子様の右腕だった。

「ッア……。」

凌子様の右手が握っていた「ないふ」から離れる。

凌子様はその場に何が起きたかわからず、右腕を押さえてしゃがみこんでいた。

どくどくと溢れる血を眺めていた凌子様は、青ざめながらもきつと目の前に立つ藤村教諭を睨みつけていた。

藤村教諭は何も言わない。

その右腕に「ないふ」を突き立てたまま、凌子様に蔑みの眼差しを投げかけていた。

不思議な事に血の一滴も流れていない。

「「公爵」を傷つける事は姫であろうと出来ない。
だが……」

そう言うや藤村教諭は、自分の腕に突き刺さった「さばいばるないふ」を引き抜くと、迷わず「たいる」に投げ出されていた凌子様の右手の平に、その凶刃を突き立てていた。

「イああ~~~~アッ！」

凌子様は絶叫した。

「うげエ……。」

入橋圭がまたわずかにうめき声を上げる。

藤村教諭は全く顔色を変えずに、それを「たいる」にまで突き立てる。

丁度釘づけにされたような右手の「ないふ」を引き抜こうと、凌子様はその柄に左手を添えた時、その手ごと藤村教諭が上からその柄を思い切り踏みつけていた。

「グッ!!」

「公爵にはそれが出来る。」

「くうッ……。」

凌子様が痛みに悶絶する。

すでにその身は「たいる」の上にへばりつくような形になっていた。

「私も――」

藤村教諭は「ないふ」を踏みつけた足の膝に腕を置きながら、凌子様にそつと顔を近付けた。

藤村教諭の眼差しが凌子様の瞳を貫く。

「懲罰は大好きな遊びだ。」

凌子様は戦慄していた。

（何？この目……。）

齒がかちかちと鳴りやまない、瞳を逸らす事もかなわない。

骨の芯まで底冷えさせる藤村教諭の瞳に完全に心を掴まれていた。

虐げる事で快楽を覚える凌子様の瞳はまだ理性宿る人のそれだ。

けれど藤村教諭のそれは違う、獣の本能に近い光を宿している。

感情に波風立てず平気で人を殺傷出来る悪魔の瞳。

意識せず凌子様の瞳からは涙がこぼれ落ちていた。

「だが今は仕事中だ、遊びの時間ではない。」

それだけ言つと藤村教諭は「ないふ」の上の足をどけて、表情を変えずに凌子様からそつと離れた。

藤村教諭はぱらぱらと手元の出席簿をめくり出す。

凌子様は「ないふ」も抜かずただがたと震えていた。

「暗罪君、君には義務教育を妨害した罪で罰を与える。

現在の君の国の徳を半分に減俸及び君には1か月の休学をしてもらう。」

「休……学……？」

怯えた虚ろな瞳で凌子様が藤村教諭を見上げる。

凌子様からは、さっきまでの狂気が嘘のように消えていた。

藤村教諭はそんな凌子様を一瞥し話を続ける。

「そうだ…。」

1か月君には国で眠りに就いてもらう。

起きた時君は真の仲間を得る事だろう。」

凌子様はそれが何を意味するか悟った。

恐怖政治で虐げてきた自分にはほとんどの男児が反感を抱いている。ほとんどの騎士が「誓約」を「破棄」しようと自分を襲うだろう…。果たして何人の騎士が手元に残るものか、多くの男児に張り飛ばされた自分は無事であるものか、そこまでは凌子様にもわからなかった。

「さあ…おとなしく自分の小屋で休むがいい、この薄汚い雌豚が。」

藤村教諭がぱたりと出席簿を閉じると、凌子様はその場から忽然と姿を消していた。

「たいる」にはまだ鮮やかな血だまりばかりが映えていた。

「センセ、結構ノリノリ…………。」

少しすると入橋圭がぼそりと呟いていた。

藤村教諭はそれを無視して、呆けている真菜月みするに振りかかる

「じゃわあ」を止める。

「大丈夫か？真菜月君。」

「あ…………。」

真菜月みするは混乱していた。

人に殺されかけたり、人が目の前で刺されたり、人が目の前で消え

たり、とても真菜月みするの常識では理解出来ない出来事が立て続けに起きたからだ。

表情の乏しい顔つきで、真菜月みするはとりあえず一度頷いた。

「体をしっかりと拭いてから部屋に戻ってきなさい。

その二人！もう大丈夫だから早く部屋に戻りなさい。

いくら認められた王子騎士といえども、まだ日の浅い姫の肌をいつまでも見ている事は好ましい事ではない。」

藤村教諭はてきぱきとそれだけ言つと、さつと「しゃわあ」室の「かあてん」を閉めていた。

孤独の空間に締め切られた途端、真菜月みするを恐怖が襲った。

「怖いよ先生！行かないで！！」

真菜月みするは「かあてん」を開けて藤村教諭の「ずぼん」の裾を掴んでいた。

真菜月みするの手がかすかに震えを帯びている。

藤村教諭は静かに腰を落とし真菜月みするに視線をあわせると、いつもの冷たい声で話し掛けていた。

「大丈夫だ、真菜月君。

君は私の大事な生徒だ。

何処にいても必ず守る。」

それだけ言つと藤村教諭は「しゃわあかあてん」を閉めずに、入橋圭等を伴い男子便所を後にしていた。

「またまた困つた事になつたね、圭。」

白石雅がそつと隣に行く入橋圭に囁く。

入橋圭はうんざりした顔をして「だなア」と答えた。

「とりあえず糸の様子を見てくるよ。

あと警告の看板も作らないとね。

凌子様の所から騎士を辞めた男児が沢山来そうだし…。」

「うん、頼む雅。」

白石雅は入橋圭と藤村教諭から離れて、一人糸の様子の確認に行った。

「入橋が動くといつも大きな戦争が起きるな。」

藤村教諭はぼそりと白石雅を見送る入橋圭の背中に向けて呟いた。

入橋圭は肩で息を付き「ええヤダなあ」と呟いた後、

「俺はいつでも被害者ですよ、藤村センセ。」

といつも猫笑いで藤村教諭に応えていた。

(……ひどいな。)

糸は所々千切れていた。

自然と切れたものもあれば、すっぱりと切られたものもある。

(凌子様も、わざわざ切らないでもいいのに…)。

やれやれといった状態で白石雅は、そつと己の腕時計に触れた。

白石雅の腕時計には一つの針が仕込んである。

白銀の柄に女郎蜘蛛の彫刻が施されたそれは、普通の針ではない。

女王ベロニカから下賜されたいわゆる魔法の針である。

王子や騎士の中で特にベロニカから気に入られた者には、称号とその印が与えられる。

白石雅はその容姿とその優美な手から紡ぎだされる衣の素晴らしさ

に、随分前にベロニカから称号を賜っていた。

白石雅の称号は「Nephilaclovata」、すなわち「女郎蜘蛛」である。

白石雅が称号と共に得た「蜘蛛の針」は、あらゆる形状の糸と毒を思っがままに吐き出せた。

「雅……。」

白石雅が今まさに網を張ろうとしたその時、廊下の奥の暗闇から白石雅を呼ぶ声が響いた。

思わず白石雅はそれに向けて糸を放つ。

「うっ……あ……ちよつと……。」

そう言いながら糸に絡み取られて月光の下に暴き出されたその男児は、白石雅のよく知る人物であつた。

「七見^{ななみ}ッ！」

その男児は、ことり姫の騎士の一人、宇代七見その人であつた。

宇代七見は温厚な男児である。

喧嘩はからきしではあつたが、その穏やかな性格や手先の器用さからことり姫に篤く信を得ている騎士の一人であつた。

元来白石雅も争いごとを好まない。

故に二人はとても親しくしていた間柄であつた。

「どうして七見がここに……。」

白石雅が糸を解き宇代七見にそつと尋ねる。

宇代七見は「ちよつと待つてて」というとまた廊下の暗闇の中に引き返し、二つの荷物を両手に提げて戻ってきた。

一つは持ち運びの出来る「みしん」。
そして今一つは上品な「とらんく」。

「それは……………」

「ことり姫からです。」

これだけは雅に渡してと…。

本当は自分で来たかったそうですが、静馬さまの監視も激しく、あと少し熱をお出しになられてしまい……………」

宇代七見がそこで口をつぐんだ。

恐らくそれは白石雅の宣誓破棄による「しょつく」からだろう…。

白石雅はじつと宇代七見を見つめた。

「僕を恨んでいるだろう？七見。」

君になら殴られても構わない。」

「そつ……出来ないよ！雅。」

それは…僕もとても悲しかったけど、でもそれが雅の道なんだと思うし、そもそもことり姫がされなかった事を僕はしないよ！」

宇代七見の瞳が真摯に白石雅に訴える。

白石雅はこのどこまでも優しい宇代七見をととても愛おしく感じていた。

「有難う……………七見。」

月光に照らされる乙女かと見まごう美青年、白石雅。

その瞳は希望と慈愛に満ち溢れていた。

（ことり姫の言う通りだ……………雅、今までで一番綺麗に見える……………）

宇代七見は思わずぼんやりとその表情を見つめてしまっていた。

「あつ……………じゃあ僕はこれで……………」

早く戻らないと静馬様が怖いからね。

何だかすごくピリピリされているんだ。」

「それは……………大変そうだ。」

「ごめんね、七見。」

くすりと笑う白石雅に「本当だよ雅」と宇代七見が文句を付けた。国は違えど二人の間に温かいものが流れている心地よさに、二人の表情も柔らかくなる。

「それじゃ、またね。」

そう言つて暗い廊下の奥へと進んでいく宇代七見を、白石雅は穏やかな気持ちで見送っていた。

「ッ……！」

真菜月みするは、突如布団の上で覚醒した。

実はそれを真菜月みするは、もう何度も繰り返していた。

六畳の室内は月光を大きく取り入れて淡い光で満たされている。

夏の夜更け独特の涼しさの中で、真菜月みするは大量の汗をかいていた。

（駄目だ……今日も眠れないよ……）

真菜月みするは、一人寝返りをうちその額の汗を手でぬぐった。

そっと目を開くと、蚊帳の中からでもその輪郭も鮮やかに哀しげな光を放つ月が浮かんでいるのが見える。

（怖かった……。）

男子便所での凌子様の奇襲の情景がまざまざと蘇る。

その恐怖は、すでに「ないふ」で扱われたかのように心に深く刻まれてしまっている。

目をつぶれば襲いかかる暗罪凌子の姿が、そして血しぶきを上げる彼女の腕が脳裏をよぎって離れなかった。

（あたし、本当にどうなるんだろう……）

どうしてこんな事になっちゃったんだろう……

何でこんな怖い思いしなくちゃいけないんだろう……

もう、いいよ、帰らせてよ……）

月の光は孤独と悲しみを増幅させる。

真菜月みするの瞳からは自然と涙がこぼれ落ちていた。

次第に鼻の奥がつんとし、呼吸も苦しくなってくる、思わず嗚咽がもれかける。

けれど真菜月みするはそれを必死に我慢した。

この六畳には、真菜月みするの他に3人の男達が眠っている。

よくは分らないが自分を守ってくれる男達、彼等を起こさないよう真菜月みするは、体を固くして涙を流した。

「もしかして泣いてる？」

真菜月みするの肩に指先がそつと触れる。

耳元で小さく入橋圭の声が聞こえたような気がした。

真菜月みするは体をより固くした。

先程あれだけ裸で泣いている姿を見せたのに、またここで泣いている姿を見せるのは、あまりに申し訳なく、何より恥ずかしい事と感じたからだ。

真菜月みするは、寝た振りを試みようとした。

「あ、寝た振りしようとするんだ。

寂しいなア、みする。」

何故か真菜月みするの寝た振りを入橋圭は見破って話しかけていた。

（違う……今の、話しかけてない……。）

真菜月みするは、それに気づいた。

そう、入橋圭は言葉を発して話してはいなかった。

（うん、心に直接話してる。
俺達婚約してるからこういう事も出来る訳。）

入橋圭が心で話しかけてくる。

真菜月みするは、またまた驚いた、そして狼狽した。

（心に話すって……うそ、今あたしの心の中見てるの？）

（うん、昨日の今日だからまだ少しだけだけど。）

それはかなり嫌だった。

真菜月みするのに入橋圭に対する嫌悪感が膨れ上がる。

「うゝわゝゝ、みする俺の事メチャクチャ今嫌ってんね…。

これ言葉で言われるよりきついからやなんだよなあ…。」

入橋圭の呟いた心と共に少し悲しげな入橋圭の心が真菜月みするの中に、流れ込んできた。

言葉で言われるより…。

入橋圭のその言葉通り、真菜月みするから拒絶を受けた入橋圭の悲しげな心は、直接真菜月みするの心を打った。

（なんか……少し可哀そう…。）

自然と入橋圭に抱いていた嫌悪感が、少しずつしぼんでいく。

（ねえ……今から俺の庭行かない？）

（庭……？）

（そう、絶対誰も来ない場所。

どうせ怖くて眠れないんでしょ？

だから気晴らし。）

（でも……。）

（領地から出ても大丈夫？藤村センセがいないのに大丈夫？かあ…。

ま、仕方ないけどさ。今日助けたの藤村センセだし…。

大丈夫だよ、今みするに手を出せるのは姫だけだし。

そういう事する凌子様は当分来ないしさ。

とにかく何かあっても今度はみするの事、俺が絶対守るから。）

（……………）

心に直接話す入橋圭の心は決意と自信であふれていた。

影一つない太陽のような明るい感情、それは口先だけの薄っぺらな言葉ではない事が真菜月みするにはよく理解出来た。

ゆっくりと真菜月みするの心の中に入橋圭に対する安心が生まれてくる。

（よし！じゃ決まり。

ん？さつきも見たから気になんないよ、泣き顔なんて。

じゃ、窓からこっそり行こう。）

するすると自分の心を読み取られて真菜月みするは恥ずかしかった。けれどそれと同時に心の中に入ってくる入橋圭の温かく広い心が、とても心地よかった。

こっそりと窓から用務員室を抜け出す。

もしかしたら藤村教諭も白石雅も気づいていたのかもしれない、だが2人は起きてくる気配を見せなかった。

入橋圭が先に裸足のまま外に降り立つ。

真菜月みするが、裸足に躊躇しているのを見ると入橋圭はそっと両手を広げていた。

どうやらお姫様だっこをされているらしい。

（や……………。それは、ちょっと…。）

夜校内をお姫様だっこされて徘徊する自分と入橋圭を思い浮かべ、真菜月みするはさらに躊躇した。

入橋圭がそっと躊躇するその手に触れる。

（みする抱えてないと行けないトコなんだ。
大丈夫、俺を信じて。）

その言葉と心に邪な陰りは見られない。

真菜月みするはそつと窓に足を掛け、入橋圭の腕の中に己の体を預けた。

（……………わ、お姫様だっこ）

（……………わ、みする汗臭い。）

真菜月みするの乙女心に入橋圭の素朴な感想が突き刺さった。

無理矢理降りようとする真菜月みするを入橋圭は何とか抱えて用務員室の前から離れた。

（みする、危ないから暴れないで。）

少し用務員室から離れた所で、静かな響きで入橋圭が真菜月みするの心に囁く。

その真剣な心の色に真菜月みするは暴れるのを堪えた。

次の瞬間、重力が消えた。

「ッ……………！」

体が宙を舞っていた。

軽く二階の窓まで体があがっている。

と思ったら今度は体に負荷がかかった。

思わず真菜月みするは目をつむる。

耳元で葉のかすれる音がかさかさと聞こえる。

どうやら木の枝にいる――

と思ったらまた重力が消えた。
木の枝をばねにさらに上の階を目指している。

（何がどうなっただけ？）

真菜月みするは浮遊感の中目を開けた。
その先には空を目指して上を見つめる端正な入橋圭の顔があった。
孤高の獣を思わせるその面ざし。
その瞳は、今空の上に昇る月光の如く寂しげな淡い光を放っていた。

リ——ン………

（あ、あの鈴の音……何だろう……。
何でだろう……）

真菜月みするは再度の負荷に固く目を閉じた。
だむっと入橋圭が足で校舎を蹴りつける音が響く。
そしてまた訪れる浮遊感、その中で真菜月みするはまた鈴の音を聞いた気がした。

（やっぱり……何故か入橋くんの中から聞こえるような気がする……。）

3度の跳躍と負荷を繰り返すと入橋圭はそこに停止した。

「到着ですよ、みする姫。」

入橋圭は口で真菜月みするに目的地へ着いた事を告げた。
真菜月みするはまた閉じてしまっていた瞼をそっと持ち上げる。

「わ……。」

満点の星空の中、孤独な輝きに照らされる、赤の群れ。
二人の周りを真っ赤な花びらが彩っている。
鮮やかな無臭の華、彼岸花がそこには広がっていた。

「すごい……。」

「でしょ？」

入橋圭はそつと真菜月みするを地面に降ろした。
真菜月みするはその静寂の世界に目を走らせる。

「でも……。」

真菜月みするは、そつと入橋圭の腕に触れた。

「少し、悲しいね。」

「うん、そうだね。」

そう呟いた入橋圭は穏やかな表情で真菜月みするに微笑んでいた。
けれどその心は泣きそうな程悲しみに溢れている事に真菜月みするは気づいてしまった。

おそらく見てはいけない入橋圭の心に触れて、思わず真菜月みするは入橋圭の腕から手を離していた。

入橋圭はそんな真菜月みするにっこりとほほ笑むと、ずんずん奥へと進んでいった。

入橋圭は扉の近くにある梯子をよじ登る。
見上げれば満点の星空だ。

その段階で真菜月みするはそこが屋上である事に思い至った。

「ここ、屋上？」

「そうだよ。」

「あたし、昨日ここに来ようとしたけど扉開かなくて無理だった。」

「うん、中から来るのは無理かもね。」

「ここは誰でも来れる所じゃないから。」

さらりと前に行く入橋圭が呟く。

本来給水塔があるべきそこには、海水浴場にありそうな寝転がれる長椅子が2つ置かれていた。

隅には折りたたまれた丸「てえぶる」から細々とよくわからない収納箱が置かれ、日差し避け用の「ぱらそる」まで置かれている。

「はい、みするこっちどーぞ！」

一方の長椅子の上に積もった彼岸花の花弁を手で払い、入橋圭は真菜月みするに席を勧める。

真菜月みするはそつとそこに腰掛けた。

きしりとわずかに長椅子が音を立てる。

それを確認するともう一方の長椅子に入橋圭はごろりと横になっていた。

「みするも寝て見てみな。」

空綺麗だから。」

「うん……。」

真菜月みするは言われた通り、長椅子に横になってみた。

「きれい……。」

目の前に嘘のように輝く銀河が広がった。
普段真菜月みするの暮らす街からではとても見られないような小さな星々までが、自ら輝きを放つかのように煌めいている。
それはまさに銀色の河の流れを魅せていた。

「吸い込まれそう……。」

空を下から眺めているはずなのに、まるで空に落ちていくような錯覚を引き起こす。

その静かで壮大な光景を、真菜月みするはただじつと見つめていた。
隣にそつと目を映すと入橋圭も静かに空を見上げている。
その瞳は月と星の光で満ちていた。

「入橋くん、そういえばさっき飛んでたよね？」

「うん、飛んだっていうか…ジャンプ。」

「それも出来ないよ、普通。」

「だね、でも俺そういう「称号」持ってるから。」

「称号？」

「そう、ベロニカがゲオルクに気に入られるとそれぞれの特徴に合わせた「称号」と「印」がもらえんの。」

ほら例えば雅、雅は「女郎蜘蛛」って言ったでしょ？

あれが雅の「称号」。

正式名称は「Nephilaclavata」っていうらしいんだけどね。

それでその「印」として「蜘蛛の針」っていう針もらっててさ、それを使って雅は色んな系を使う。ピアノ線みたいなもので攻撃したり、網の壁をめぐらしたり、もちろんお裁縫もね。

今度一度聞いてみな、見せてくれるから。
すごい綺麗だよ。」

「ふうん、それで入橋くんは？」

「俺は「Cheshire Cat」。」

「つまりチェシャ猫？」

「そ、チェシャ猫。」

そう言つて真菜月みするに向けた入橋圭の顔は彼独特の笑顔、半眼に悪戯な感じでうつすらと笑う表情を浮かべて見せた。

「わかる気がする。」

「そ？俺もわかる気がする。」

そう言つて入橋圭は空を見上げていた。

真菜月みするも空に視線を戻す。

「だからすごいジャンプなんだね。」

「うん、猫だけにね。」

他にも猫っぽい事なら色々出来るよ。

爪が鋭くなつたり、夜目が効いたり…。」

「さつき目光つてた。」

「やつぱり？」

あれあんま好きじゃないんだよね。

何かドラキュラというか狼男みたいというか。」

「そうでもなかったよ、あたしは綺麗だと思ったな。」

あ、でも入橋くんが狼男っていうのには賛成。」

「え…何それ。何かすでに二日目にして俺の印象最悪じゃない？」

「…結構ね。」

隣で「そんなあ」と入橋圭が声を上げている。

真菜月みするはそちらを見ずにくすりと笑った。

「さつき飛んでる時……入橋くんから音がした。」

「……………」

「鈴の音みたい、風鈴みたいな音。」

初めここに来た時あたしそれを目指したの……。」

「そうなんだ…。」

「うん……綺麗な音だった。」

「……そう。」

「あれは何だったの？」

「あれは鈴だよ。「猫の鈴」、俺の「印」。」

「しるし……あの音が。」

「そう……あの音のする鈴が俺の「印」。」

「へえ、見たいな……。」

「……………」

しばらくしても入橋圭からそれに対する返事が返ってこなかった。

（え……寝ちゃった？）

真菜月みするは空から入橋圭に顔を向けた。

見れば入橋圭はしっぴかり起きていた。

しっぴかり空を見上げている。

「入橋くん？」

「無理……。」

「え……？」

「無理なんだ、みする。」

俺の「印」を見せるのは……。」

そういうと入橋圭は手を己のお腹の辺りに当てて少し撫でる動きを見せていた。

「飲み込んだじゃったんだ、俺の鈴。」

だからごめん、見せてあげられない。」

入橋圭は真菜月みするに向けて穏やかな笑みを見せた。

それは先程見せた笑顔と同じものだった。

（そう……同じ。だからたぶん気持ちも同じ。）

（本当は入橋くん、心の中では今にも泣きそうなんだ……。）

真菜月みするは唇を思わずかみしめていた。

入橋圭がまた空を見上げ浅く溜息をつく。

そして静かに呟いていた。

「俺さ、この前の国で姫に捨てられたんだ。」

「え……？」

「産木はなつていつてさ、大好きだったんだ。」

はなも途中までは俺の事好きだった。

でもさ、はなの奴他の国の王子の事途中から好きになっちゃったんだよね。

けど俺馬鹿でさ。

はなが俺から距離置き出した事とか全然気づかなくて。

気づいた時にはもう遅かった。

その王子の子供出来ちゃってるって事とか全部が一気に分かってさ。

「

「え……子供……？」

「いいの？」

「勿論駄目だよ。」

だからはなも相手の王子も「退学」させられたんだ。」

「退学？」

それって元の世界に戻れたって事？」

「違うと思う。」

校内放送でベロニカが魂を無限地獄に叩き落とすとか息巻いてたから……。」

「そんな……。」

「ごめん、怖がらせちゃったね。」

それで俺が何でこんな話を始めたのかだけど、俺が鈴を飲み込んだ理由がそこにあるからなんだ。」

「鈴を飲み込んだ理由？」

「そう、はなの心に気づいた時ってさっき言ったよね。」

あれさ、はなが俺の印貸してって言うてきた時だったんだ。

はなと王子はベロニカ達に子供の事言いに行く決心してたんだ。それでたぶん俺が止めると思ったんだろうね。

確かにもっと前からわかってたら絶対止めてた。

それなりに俺は強いから、普段の俺だったら絶対はなもその王子も止めてみせた。

でも俺は久々に触れたはなの心にびっくりして、はなが印を飲み込むのはなが俺の頬を張って隠れてた王子と共に逃げたのにも、何もする事が出来なかったんだ。」

「……………」

「で、数日後のベロニカの校内放送。

それが終わってすぐ俺の手の中に何故か印が戻ってたんだ。

それ見たら何かすごく怖くなってきてさ、また誰かに裏切られるんじゃないかって。

だから俺は印を飲み込んだ。

もう誰の裏切りも傷づくのも嫌だったから。

でも裏切りも何ももうあったもんじゃなかったただけだね。

結局姫がいないと国は成り立たないからさ、俺の国はそこですぐに崩壊したよ。

それで長い間用務員室でぼんやりして過ごした。

でも雅みたく俺の傍にそれでも付いてくれる奴とか結構いてさ、悪いから姿を消した。

それでことか6階のあの教室とかでぼんやりずっと過ごしてた。」

「6階の教室……あたしと入橋くんが会った所？」

「そう、みすると会った所。

そしてはなと俺が会った所。」

「えっ……………そうなの？」

「うん。

立ち位置は逆だったけどね。

何かすすり泣く声があるなって思ってあの教室入って教卓見たらさ、はながあの中に縮こまって「帰れない」って泣いてたんだ。

それが俺達の出会い。」

「じゃ、あの彼岸花は……。」

「はなの魂の弔いと俺の失恋供養。」

あーあ……。」「

入橋圭の溜息が空の闇へと吸い込まれていく。

それから入橋圭と真菜月みするはお互いの現世での暮らしや家族の事を話した。

真菜月みするは15歳の一人っ子で両親が共働きだという事、けれどペットのだんや中学からの友達の佳苗がいるので少しも寂しくない事等々……。

「へえ……それなのに家事出来ないんだ、みする。大丈夫？」

「ほつといてよ。」

一方入橋圭は16歳で二人の兄がいる事、聞けばその地方の地主である事、どうも進学の話で噛み合わなかったので確認してみれば何と入橋圭は昭和の始めの時代からこの世界に來ているという事、その時共にこちらへ來た多喜勇治なる友達がいる事等々……。

「でも昭和っぽくないね入橋くん。」

その頃普通丸刈りでしょ？」

「うん、始めはそうしてたよ。言葉だつてもっとしつかりしてた。」

でもさ、何かベロニカがさ不定期で校内雑誌配るんだけど、その流行を追わないと徳が上がりなくてさ。

あと丸刈りって最近後から來る姫にもてないんだよね。

徳が上がらないと卒業できないし、姫に氣に入れないと卒業できないし。

男児もお洒落に氣を使わないと生きてけないんだよ。」

「せちがらいね……。」

「そう、せちがらいの。」

でも姫は良いよね、お下げにセーラーなんて俺の頃と変わんないじゃない。

何で？そこは流行ってるの？」

「うーん、ある意味ある方面では神話的に流行ってるかも……。」

「ふうん、そうなんだ。」

そんな風に真菜月みすると入橋圭はたわいもない話を延々と続けていた。

遠くで笛の音のような音が聞こえてくる。

あれは福箱^{ふくはこ}芳乃^{よしの}というお姫様の笛の音だと入橋圭が教えてくれた。

何だか夢^{ゆめ}で木で出来た横笛を思わせるその音色。

かすかに聞こえるその音色に真菜月みするは心が静まるのを感じていた。

何となくまぶたが重くなってくる。

いつの間にやら真菜月みするはそのまま眠りこんでしまっていた。

真菜月みするが目を開けると、そこは蚊帳の中だった。

すでに藤村教諭のおさんどんの音が響き渡る。

隣を見れば入橋圭が背中を向けて眠りこけていた。

（夢だったのかな……。）

真菜月みするは一瞬そう思ったが、入橋圭のこちらを向く足の裏の汚れを見てそれはなさそうだと判断した。

「起きたかね、真菜月君。」

藤村教諭の声に真菜月みするは思わずびくりと体を震わせた。背^せ中^{ちゅう}ごしにもかかわらず、瞼^{まぶた}を持ち上げただけでもその覚醒を理解する藤村教諭の超直感には人間業とは思えないものがある。

（あ、でも実際魔法使いみたいな感じなんだよね、藤村先生って…。）

藤村先生「いこおる」魔法使いという、その外見からは不釣り合いなつなかりに真菜月みするは思わず笑みをこぼしていた。

「おはよう、真菜月さん。」

上から投げかけられるその声に真菜月みするは視線を向けた。
押し入れの中から白石雅は優雅に微笑んでいる。

見ればすでに身支度を整えて髪の毛を「ぶらし」で梳かしている所であつた。

そんな麗しい白石雅を寝ぼけ眼のぼんやりした顔でどうしようもない寝癖を付けながら見上げる乙女、真菜月みする。

「ッ………！」

思わず真菜月みするは「たおるけつと」をかぶってしまっていた。

（本当………なんなの、この共同生活う〜。）

どちらかというと朝は弱い真菜月みするではあつたが、自らの乙女を守る為に明日から早起きする事を決意していた。

「真菜月君、二度寝は止めたまえ。」

「う………はい…。」

有無をいわさぬ藤村教諭の言葉に、しゅしゅ真菜月みするは布団から起き出した。

「わ……すごい可愛い」。

これ全部白石くんが作ったの？」

「はい。」

白石雅は先日、宇代七見から受け取った「とらんく」の中身を、六畳間で広げて真菜月みするに見せていた。

藤村教諭は数日前から女子便所の配管を見ている。

入橋圭はその隣の男子便所で、数日前から貯めに貯めた自分の衣類を、泣く泣く洗濯し続けている。

時は夏の昼下がりに、すでに凌子様の襲撃があつてから数日が経過していた。

「もし良かったら真菜月さん着てみない？」

制服色々あつた方がいいでしょう？」

「え、でもいいの？」

これ白石くんのじゃ……。」

「お姫様より着飾る騎士なんてかつこ悪いからね。

もしお古で良かったらだけれど……。」

「あ……ありがとう……。」

「うん。」

白石雅は「すかあと」の丈や袖の長さなど、幾つかの事を真菜月みするに確認すると、黙々と裾直しの作業を開始した。

伏し目がちの瞳にかかる栗色の睫毛。

後ろで束ねた髪の毛の、白い首筋にかかるほつれ毛、

「はあふぱんつ」からすらりと伸びる足がどこまでも眩しい。

中世絵画の聖人の様に美しい白石雅に、真菜月みするは見とれてし

まっていた。

（綺麗だなあ……白石くん。）

「ん、あ、ごめん。退屈だよ、真菜月さん。」

「え……？あ、そんな事無いよ！」

白石くん見てるだけで十分面白いから。」

「え……？」

「ッ……！」

（面白いつてあたし……それは駄目でしょう！）

真菜月みするは、真っ赤になって沸騰した。

白石雅はそんな真菜月みするを見てくすりと笑むと、手元の作業を進めて言った。

「大丈夫、真菜月さん。」

僕そついうの慣れているから。

あ、慣れているって言うとなんだか自意識過剰だね。」

ぷつぷつと丁度良い裾の所で、まち針を止めていく。

とりあえず、真菜月みするはごめんとだけ小さく呟っていた。

「何か、白石くん綺麗だなアって、つい……」

ごめんね、男の子に綺麗だとか、あまり嬉しくないよね。」

「そんな事無いですよ。」

僕は男の子だけれど、綺麗にするのが好きですから。」

「……………」

（こちら白石雅。

女装好きの男の子。

基本女の子好きなノン気だけど俺の事だけ本気で好き。）

当初あまりのごたごたで聞き流していたその言葉が、真菜月みするの中で蘇る。

どう返答していいものか、真菜月みするは言葉に窮した。

しかしそんな真菜月みするに対し白石雅は、ためらいを見せず自分の趣向についてすらすと語り始めた。

「僕はね、小さい頃から女の子の格好に憧れていたんだ。

どう見ても男の子の格好より華やかで綺麗で、その形の種類も多いでしょう？

でも、だからといって男の子が好きだという訳ではなくてね。

あ、圭はちよつと特別だから、ここでは置いておくけれど——」

白石雅は自分の生い立ちについても細かく説明をした。
自分には両親と少し年の離れた二人の姉がいる事、その姉達の華やかな装いに心魅かれていた事、けれどそれを身に付ける事は許されなかった事（聞けば時は明治時代）、そして父親の跡を継ぐべく男子校に通わされていた人形のような日々、そんな16歳の時に神隠しにあい、ここに來た事。

「僕は初め一人の姫に騎士として仕えていました。

もう「卒業」してしまったのだけれど、とても良い人でね。

その人は僕に裁縫を教えてくれた。

その時、自分の憧れていた華やかな服を自分の手から作り出せて、とても嬉しかった事を今でも良く覚えている。」

「一緒に「卒業」出来なかったの？」

「うん、僕が断ってしまったから……。」

「どうして?。」

「……戻りたくなかったんです、元の世界へ。」

「あ……。」

戻ったとしても、そこには自分を家督として待つ現実しか待ってい

ない。

きちんと背広を正し、ただただ家長として構えていなければならぬ「器」としての現実。

白石雅には、それがたまらなく辛いものであった。

「それから僕は腕を磨き、いつしかベロニカ様から「女郎蜘蛛」の「称号」をもらい、この――」

そう言いながら白石雅は己の腕時計に触れ、そこから一つの銀色の針を取り出した。

「「蜘蛛の針」を下賜されました。」

「それが「印」？」

「あ、圭から聞いてる？」

「うん…へえ…見てもいい？」

「どうぞ。」

白石雅から受け取った針は、おしりの部分に小さな蜘蛛の装飾がある以外、普通の針であった。

よく見れば蜘蛛の彫刻の瞳には、赤い石まで埋め込まれている。中々凝った作りをしているものだった。

「普通の針みたいに見えるね。」

「けれど普通の針じゃない。」

そういうや真菜月みするの手の中にあった針は、白石雅の手の平へと戻っていった。

よくよく見ると二人の手の間を一本の糸が走っている。

白石雅が手に戻った針を一振りすると、その糸はもやのように消えていた。

「ね？」

「……うん。」

まるで「まじつく」のような白石雅の手さばきに、真菜月みするは目をぱちくりさせた。

「なまじ力があるから、「王子」として国に君臨する事が度々あったんだけれどね。」

僕は長続きしなかった。

だって卒業したくなかったから。

結局騎士として国に仕える事が多くなった。

騎士として仕え、好きな裁縫に明け暮れてそれを姫に献上し、信を得る。

そうやって随分、この世界で生きてきました。

本当はそれを自分で着たかったのだけれど、それをする勇気が当時の僕にはまだなくてね。

喜ぶ姫の顔を見て、それで僕はとりあえず満足していました。でも丁度そんな時に、とある国で王子をしていた圭に会った。それから僕は変わったんです。」

「……王子？」

あ、そうかはなさんの…。」

「あ、産木さんの事圭から聞いてるんだね。

でも違うよ、それより少し前の姫君に仕えていた時のお話で——」

「へえ！入橋くんそんなに王子してるんだ！」

「うん、圭も何度か王子をしている。

当時も一番の大国に君臨していた。

圭はあの通りの性格だから。

何かと僕達のような騎士にも声をかけてくれてね。

いつの間にか、僕は心を開いてしまっていた。

いつの間にか、僕は親友になってしまっていた。

そうして気づいたら僕は、打ち明けてしまっていました。

僕は本当は、女性のように着飾りたいのだという事を…。」

たんとんと語る白石雅の手に狂いは見られない。

持ち運びの出来る「みしん」を「せつと」すると、かたかたと袖を縫い始めた。

返し縫いを済ませてその糸を切ると、また口を開き話を進めた。

「告白した途端、とても怖くて恥ずかしくなってね、涙が止まらなかった。」

圭が訊いてきたんだ。何で泣くの？って…。

男なのに女装が好きなんて恥ずかしいからって答えたんです。そしたら圭は言ってくれた。

恥ずかしいが事ないって。

雅は雅らしくしている姿が一番だよって。

すごく嬉しかった。

生まれて初めて僕を認めてくれたのが、圭だったんです。

そしてやっと僕自身も、自分を認める事が出来たんです。

そうしたら圭を好きになっただけ、という訳…。」

「なる…ほど。」

真菜月みするは、目の前の美麗青年の同性への恋心を直に語られて、どう対応したら良いものか混乱したが、とりあえずそれだけ呟いた。その混乱を察した白石雅が、くすりと真菜月みするに笑いかける。

それはとても幸せに満ちた魅力的な笑顔、男女の性差を越えた真に美しい人の笑顔であった。

「何か……………」

「ん？」

「あつ…ごめん、変な事言っちゃった…。」

「いいよ、どうしたの？」

「あ…その、何か白石くんすごいなって…。」

自分の気持ちすごくはつきり言えて…。

でも、だから綺麗なんだなって思った…。」

「ありがとう。」

「…うん。」

そこまで言うつと白石雅はかたかたと「みしん」を繰り出した。

真菜月みするは、そんな白石雅をぼんやりと見つめていた。

そしてしばらくすると白石雅は、一着の「せえらあ」を真菜月みするの「さいず」に仕立て上げていた。

早速、真菜月みするはその場で試着してみた。

青春乙女の必殺技、着たまま着替えである。

「そういう女の子すごく上手いよね」と、わずかに目を伏せて、別の作業に手を動かしている白石雅が微笑する。

それは濃紺と白のせえらあだった。

りぼんも「れえす」の濃紺、襟の縁取りには銀糸で、細かな朝顔の弦と華が刺繍されている。

「か、かわいい……。」

真菜月みするは目を綺羅綺羅と輝かせて喜んだ。

思わずその場でひらりと一周回ってみせる。

「うん、真菜月さん、とても可愛い。」

そう言って微笑する白石雅は騎士であった。

思わず真菜月みするは頬を染めて困る。

（あ……でも……。）

「白石くん、半分こにしょッ！」

「え？」

「制服半分こにしょ？」

元々白石くのだし、白石くんだって着たいでしょ？」

「ん、でも僕は騎士だから。」

いざという時戦わなければならぬし、その時スカートだと――」

「そこにキュロットあるから大丈夫だよ。」

「あ……うん、まあね。」

真菜月みするは「とらんく」の中から覗く「きゅろつと」を目ざとく見つけて指さした。

白石雅は苦笑する。

「白石くん、綺麗なんだからもったいないよ。ね！」

「……ん。」

そう言つて俯いた白石雅の表情には、何とも言えない艶があつた。思わずどきりとする真菜月みするに、白石雅は追い打ちを掛けるかのように――

「ありがとう……。」

はにかみながら満面の笑みを向けていた。

「ッ………！」

真菜月みするはこの時思った。

男装なんてされてしまったら、かつこよすぎて死んでしまう……。

「うあゝゝ、手エいたあゝ……。」

入橋圭は一人「わいしやつ」に「はあふぱんつ」という中途半端な出で立ちのまま、男子便所で洗濯をしていた。

あいにく一台あつた洗濯機も、本日2回回した所でついに壊れしまい、今や手洗いで事を成している。

入橋圭はこういった事が苦手であつた、もとい嫌いであつた。

その為入橋圭の汚物は用務員室、押入れ、男子便所を合わせて、ゆうに1年分は溜まっていた。

「あゝゝ、もうくそッ！」

入橋圭は「しやわあ」室に汚物の小山を作ると、洗剤を乱暴にぶっかけ「しやわあ」を流すや服を着たままその山をぐしゃぐしゃと踏みつけに入つた。

どうせぐちぐちと作業をしている間に、たっぷり汗をかいてしまっている。

また洗う事になるであろうそれをそのまま流してしまおうという、入橋圭ならではの横暴であつた。

とにかく踏みつけ、泡が消えれば外へ出す。

それを何度何度も入橋圭は繰り返した。

それできちんと綺麗になつたかは甚だ怪しい。

（そもそも俺そんな汗つかきじゃないし…。
問題ないない。）

そんな言い訳を心の中で口ずさみながら、入橋圭は小山の洗濯物を次々に洗っていく。

（しかし困つたなア…。

洗濯機壊れたとかつて…。

雅も俺もそういうのは出来ないし…。

勇とかいれば良かったんだけど…。）

入橋圭はぼんやりとかつての友、多喜勇治を思い浮かべた。

多喜勇治は特にこれといった力も称号もないが誠実で、こういう類の事に秀でた男子である。

そもそも男子便所と女子便所に「しゃわあ」を引いたのも多喜勇治であつた。

（藤村センセ、女子トイレの配管は直してくれてるみたいだけど…。
シャワーはトイレのついでとか言つてたからなア…。

これは直してくれないだろうなア…。

ま、しょうがない。

当分は女子トイレの洗濯機借りるか…。）

前髪の水滴がまつげに落ちる。

それでも入橋圭はまばたきもせず、肩に当たる「しゃわあ」もそのままに、ぼんやりと考え込んでいた。

（勇、お前今何処にいる…？）

「ッテエ！」

入橋圭は突如おでこを襲った刺激に声を上げ、両手でおでこを押さえて苦悶した。

「ははッ…けえ。」

お前ぼつとしすぎじゃん？

てか服着たままなにしてんの？修行？

てかてかさあ俺が本気出してたら危なかったぜ？」

（うわ……まさか。）

入橋圭は「しゃわあ」室の上にある窓に、かなり嫌そうな顔を向けた。

鉄格子と白石雅の張った糸の先に、一つの木が生えている。

その木の枝の上に声の主が、腰に手を当てて立っていた。

逆光ながらもそのつんと尖った頭の「しるえつと」に、入橋圭は思い当たる者があった。

「けえ。」

悪いんだけど仲間にしてくんね？

いやあ俺今まで凌子様んトコいたんだけどさあゝあの女マジでやばくて——」

「…間に合ってます。」

そういうや入橋圭は「しゃわあ」室の窓を閉めていた。

（なんでよりによってアイツから来るかなあ…。）

入橋圭は外でまだ何やら騒ぐその人物をそのままに、ぐしぐしと洗濯物を踏みつけた。

その踏みつけには何処となく私怨混じるものが感じられる。

しばらくするとその声も聞こえなくなり、入橋圭は今の出来事を忘れて自分の作業に没頭し始めていた。
しかし――

「羽根井が女子トイレの窓の傍でぶつぶつとうるさい。君達は旧友だろう？」

聞けばきちんと入橋は話も聞いていないそうだな？

はつきり受け入れるなら受け入れる、断るなら断るかしたまえ。」

結局そう言って隣の女子便所から、悪鬼の形相で入ってきた藤村教諭の言に、入橋圭はしぶしぶ「しゃわあ」室の窓を開けて、かの人物と対峙する事となってしまった。

「ヒサシブリ、ハネー。」

「おう！ひさしぶりイ〜って何お前その棒読み！

元気ねえなあ、てかホント何してんの？」

かの人物、羽根井^{はねい}覚^{さつ}は、数分前に完全拒否された事をすでに忘れたかのように、夏の日差しよろしく眩しすぎる笑顔を入橋圭に投げかけていた。

「……センタク。」

「洗濯？？けえが？」

ハハッ！サイコー！お前も堕ちたなア〜。

すっげー良いザマ……

ってちよお〜、待った待った閉めんなって。

笑わねえって……あ！てかむしろ俺がやるやる！

仲間にくれたらお前の洗濯俺がやるって……！！

「えっ……ホントに？」

あ、じゃ仲間にするよ！」

「……え。」

「ちよつと待つてろ！」

雅に糸どうにかしてもらってくんから！

いいな？ちよつと待つてろよ、ハネー。」

「……あ、そんなん、ホントに？

あつ……けえ！」

入橋圭は濡れた髪の毛を掻き揚げると、ずぶぬれのまま嬉々として男子便所を後にした。

「俺の存在価値……。」

一人木の上に残された羽根井覚は、かなり己の「あいでんていい」を傷つけられて、たそがれた。

「雅！

ハネーが来た！

仲間にしよう！」

「……ちよつ圭！」

「……ッ……ギャア……！」

真菜月みするが白石雅に自分の生い立ちと暮らしを話していた頃、全身ずぶぬれで上半身に「わいしゃつ」を貼り付けた、服を着ているのにむしろ余計淫らな格好をした入橋圭が乱入した。

「へえ！

結構小さくて可愛い姫だね！

ねえ！名前何てーの？」

「ハネー、聞く前にお前から名乗れよ。」

「あつそう？そういうもん？」

「そついうもんだろ！」

何とも明るい、いやむしろ「ちゃらい」と言った方が的を射ている男児、羽根井覚は用務員室に招かれていた。

まだらな黒と銀の毛髪を額の真中の少し上の生え際辺りで、つんと立たせた奇抜な髪形をし、下唇と両耳には「ぴあす」が飾られている。

わいしやつを腕まくりし「のおすりいぶ」のごとく着こなしたその両腕には何故か沢山の色とりどりの輪ごむが、ちゃらちゃらとごっそり付けられている。

程よく日に焼けた薄くしまる胸板も露わに開襟し、だらしなく胡坐をかいたその姿には不良のそれを思わせる。

けれどその容姿に反して、羽根井覚の瞳はくりくりと可愛らしい純粹な少年の様な光をともしていた。

どうも信用は出来ないがどうも憎めない、そんな相反した雰囲気を羽根井覚は持っていた。

「えっと、じゃ俺、羽根井覚ね。」

羽毛の羽に根っこ書いて井戸の井で羽根井、で覚えるって字で覚。信用できないけど何か憎めない男って感じ？

って俺自分で言ってるし、ウケるッ！」

そう言うや羽根井覚はけらけらと一人笑いこけた。

「ま、こういう男だからみする。つまりただのバカね。」

「そう、それと本人の言う通り、全く信用の置けない男。」

「えゝゝ、ちよつとみやあ！」

全くはないんじゃない？全くはあゝ。

俺ちよつと悲しんだけど。」

「悲しいも何も本当だろ？」

お前すぐ鞍替えする傭兵騎士じゃんか！

この前ん時もお前回鞍替えしたよ！？」

「圭……そこまでわかってるなら何で彼を誘ったの？」

「え……や……それは。」

ねえ……？」

「入橋くん、簡単に鞍替えする弱い騎士ばっか集めた国は駄目だから、そういう人は始め取らないって言っただけ？」

「え？ちよつ……何？」

みするも反対なの？

てか覚えてたんだね…それ。」

「えー！」

ちよつとちよつとお姫様二人共反対？？

ってみするちん！

俺の事もう嫌い？

俺そんなに駄目な奴？？」

「う……えと。みするちん？？」

ちやらいながらも羽根井覚の純真な、子犬の様な輝きを持つ瞳に見つめられた真菜月みするは、わずかにたじろいだ。

(う…そんな目で見ないで…。)

「あつ！

そうそう！俺弱くないかんね！

だから安心してよ！

ほら！「Rubber Sniper」、これが俺の称号だし！」

そういうや羽根井覚は自分の両腕を持ち上げて、その色こむを真菜月みするに見せた。

ちやらちやらと羽根井覚のちやら臭さを高める為だけに、装飾されているものではないらしい。

「「LOVER」スナイピア…？愛の狙撃手？？」

「あ、それ！そうなんだよね！

そうなつちやうんだよね！

俺もその響き好きでさあ、ま、あながち——」

「嘘ではありませんよね？覚。」

白石雅が静かな声で言葉をはさんだ。

その隣で何故か入橋圭がもじもじと落ち着きを見せていない。まるで浮気現場を挙げられている男のような挙動である。

「そつえば覚、君今まで何処にいたの？」

自分の口で言ってごらん？

どなたの「愛人（LOVER）」をされていたのか。」

白石雅がにつこりと微笑んで、羽根井覚の痛い所を突き刺した。

（怖い……。）

羽根井覚のみならず、入橋圭、そして真菜月みするすら、その時の白石雅の笑顔にひやりとしたものを覚えていた。

「暗罪凌子様の所です……。」

観念した羽根井覚がぼそりと呟く。

白石雅が「本当に覚は駄目だねえ。」とはあつと溜息をついた。

「でもあの女絶対SMプレイに走るから体中痛くてさあ、絶対血イ見るし。」

んで、絶対当分背中、上にしないと寝らんないし…。

俺Mじゃないからマジそれが辛くて。

始めはタダでやれ——クウツ??！」

「こほんッ！」

「……。」

青春乙女真菜月みするは咳払いをして、一方白石雅は見えない糸で羽根井覚の首をつり上げてその言を遮っていた。

「女の子の前でそういうのはやめようね、覚。」

白石雅が羽根井覚の首を吊ったまま静かにたしなめる。

中腰の姿勢のまま見えない糸につられた羽根井覚は、首を掻き筆り息を詰まらせたままこくこくと白石雅に向かって何度も縦に頷いていた。

それを確認した白石雅がひゅっと腕を一振りすると、糸の解かれた羽根井覚はその場に崩れ落ちげほげほとむせる。

白石雅の隣で入橋圭は、そんな羽根井覚の状態を冷や汗を浮かべて見守っていた。

その顔はまるで自分も締め上げられたかのように青い。

「真菜月さん。覚はね「ゴムの狙撃手」なんだ。

ただの輪ゴムに見えるけれど、覚が使うとライフル並みの強化を付ける事が出来て戦力としてはとてもすごく頼れる騎士になる。

でもこの通り、かなり自分に素直な性格をしているからね。

信用を置くのは少し難しい。

でも――」

「王子はそれを許してでも彼をお望みなんですよね？」

最後の警告ですよ、と言わんばかりの白石雅の「ぷれっしやあ」に入橋圭はこくこくと頷いた。

「だいじょぶだよ、雅。

コイツそんな頭まわんないから大した裏切り出来る奴じゃないし…いざとなったら王子の俺が皆を守るよ。」

「…ってけえ、フオローんなってねえ！

お前俺裏切る事前提でしゃべってるし！

ま、俺も裏切らない自信ないけどさ！ははっ…ウケるー！！」

「お前こそフオローんなってねえよ！しかも笑ってんじゃねえ！

こっちがフオローしてやってんのに、そばで裏切んとか言うな！！馬鹿ッ！」

「えー、だってマジでわかんないし…。

俺すげー気まぐれだもん。」

「ね、この通り素直な性格だから。」

白石雅は真菜月みするに向かってやんわりと微笑んだ。

「何にしてもここは真菜月さんの国だから、あとは真菜月さんの気持ち次第。」

そう白石雅が言い終わると、入橋圭も羽根井覚も言い争いをやめて真菜月みするを窺った。

「えつと……あたしは……。」

入橋圭を見れば、真菜月みするに向かってしつかりと頷いていた。

羽根井覚を見れば、真菜月みするに向かって神頼みでもするかのように、手を合わせて祈りをささげている。

「……………じゃ、いいよ。」

「え？何？どっち？

オツケー？それとも遠慮しますのいいよ？

え、どっちみするちゃん！

俺の事要る？要らない？

どっちかで答えて！

どっち？?!」

「えつ……あ、羽根井くんの事、要る……。」

羽根井覚に迫られた真菜月みするがそれだけ言い切ると、羽根井覚は「おおっ」と両手を上げて体全体でその喜びを表し

「ありがとぉ、みするちゃん!!」

というや真菜月みするに抱きつくうとして、思い切り押入れに吹っ飛ばされてしまっていた。

「な……なんで……。」

押し入れの奥で壁に叩きつけられた羽根井覚が弱弱しく呟いた。

「い……いめん……。」

先日の男児の時もそうであつたが、拒絶の威力はすさまじい。

思わず真菜月みするも謝罪を口にしていた。

隣で白石雅が「謝らなくても大丈夫だから、真菜月さん。」と呟く。

「駄目だよ、ハネー。」

みするは乙女なんだから。

いきなり抱きついていいのなんて凌子様くらいだつて。」

「そ……そういうもんだつたっけ？」

「そういうもんだよ。」

入橋圭は押し入れの中に手を差し伸べ、羽根井覚を救出した。

羽根井覚はいててと言って頭をさすりながら、押入れからはい出てきた。

「ほ……ほんとにごめんね。」

あたし、跳ね飛ばそうとか力の加減とか、全然うまく出来なくて…。

「

「真菜月さん、それは仕方のない事だから気にしないで。」

「仕方がない？」

真菜月みするが白石雅を見つめると、白石雅はうんと一度頷いた。

「真菜月さん、まだ姫になつたばかりだから…。」

それに真菜月さんはまだ覚の事を信頼していないでしょう？

だから今会つたばかりの覚だと完全に拒絶してしまうのは当然の事なんだよ。」

「そう……なんだ。」

「うん、でもその内自分で制御出来ると思うから。」

「みするちゃん？」

羽根井覚がびくびくと真菜月みするを窺っている。

その横で入橋圭が「大丈夫だつて。」と囁いている。

何やら怪物女の様な扱いに真菜月みするは、少し胸の奥がつきりとした。

「ごめんね、羽根井くん。

でもあたしまだ制御とか出来ないから、いきなり触らないようにしてね。」

「うん……わかった……。」

心なしか羽根井覚の「とれえどまあく」の一つとも言えるつんと立っていた髪の毛が、くたりとしている。

それでもとりあえず羽根井覚持前の馬鹿、もとい素直さ故かすぐに気を取り直してにつかり笑うと、その手の平を真菜月みするに向けて突き出していた。

「じゃ、俺に祝福をちょーだい！」

「そこに？」

「うん、ここ。」

だって手の甲なんてダサいじゃん。

ここならほら、どーだあって見せられんでしょ？」

（別に、「どーだあ」なんてしないでいいんじゃないかなあ……。）

そこにいる皆が、その意見に賛同していないのに羽根井覚は全く気付かずににこにことしていた。

そこではたと気になった事を真菜月みするは羽根井覚に尋ねていた。

「えと、もしかして暗罪さんもそこ？」

何となく、あの女王様と同じ所に印を残すのは嬉しくなかった。でもその質問に対し、羽根井覚は否をとнаえて差し出していない方

の手で己の唇の端を指さした。

「うっん、凌子様は必ずここにすんの。

すっごい目立つしセクシーじゃん？」

あ、みするちゃんもどうせならここにする？」

「それは遠慮しとく。」

真菜月みするは即答した。

「みんな、目つぶってて。」

そういう真菜月みするの言に、白石雅はすぐに大人しく従い、瞳を爛爛とさせていた入橋圭や羽根井覚も「見てたら仲間にしない」という真菜月みするの言にしぶしぶと従いそつと瞳を閉じていた。

真菜月みするは皆が瞳を確かに閉じているのを確認すると、そつと目の前に突き出された羽根井覚の手の平に唇をほんの少し触れさせた。

また小さな淡い花火がそこに咲く。

羽根井覚が静かに瞳を開ける。

今度は羽根井覚が「宣誓」を行う番だ。

羽根井覚が自分の唇を指さし、もう一方の手で「何処に？」というように真菜月みするの体をあちこち指さす。

真菜月みするは少し思案したが、すぐ羽根井覚と同じようにその手の平を羽根井覚の方へ突き出した。

それを見た羽根井覚は嬉しそうににっこり笑うと、その唇をつんと真菜月みするの手の平に触れさせた。

小鳥のつえばみのような接吻の応酬、それも何だか小さく恥ずかしいものであった。

「はい、俺騎士ィ。」

羽根井覚の名乗りにも、入橋圭と白石雅が瞳を開く。

「見て見て。」と羽根井覚がその手の平を入橋圭に見せると、入橋圭は真菜月みするにまたいつもの意地悪な笑顔をにやりと向けていた。

(……セクハラだ。)

真菜月みするはぶいっ！と入橋圭から顔を逸らしていた。

「はいはい、じゃあハネー。

トイレ行こーねー。」

「おう！

仕方ねえ、こればかりは約束だもんな。

任しとけ、雑用は得意だ。」

「あつ…圭、まさか——」

「じゃあね、二人とも。

あ、みする。そういえばそのセーラーかわいいね。

じゃね！」

そういうや二人は用務員室を後にしていた。

「もしかして、入橋くん……」

そう呟く真菜月みするに、白石雅はうんと諦め顔で頷いた。

「洗濯させる為に覚を仲間に入れたみたいだね。」

藤村教諭は一人女子便所にて配管の整備を行っていた。

下水の調整を終え、今まさに「しゃわあ」の配管に取りかかろうとしている所であった。

どうやらしばらく使われていなかった間に、老朽化し途中の管が潰れてしまっていたらしい。

藤村教諭はまたもや「せかんどばっく」から、替えの管やら工具を

取り出すとてきぱきと修理を行った。

整然と並ぶ3つの個室、「たいる」を彩る沢山の土足の跡、くすんだ金の縁取りを施した楕円形の鏡面が設置された塵に埋もれた洗面台、埃をかぶった洗濯機、「しゃわぁ」と猫足の白い「ばすたぶ」、様々な洗面具が収納された豪華な手押し台。

（これ程栄華を極めておきながら。）

藤村教諭は冷静に配管を修理しながら一人思索する。

（堕ちるのは一瞬だったな…。）

はっとして藤村教諭は、背後を振り返る。

その視線の先には豪華な手押し台があった。

その上には「せかんどばっく」と出席簿が置かれている。

藤村教諭は作業の手を休めて、そっと出席簿を手にとっていた。

藤村教諭は慣れた手つきでぱらぱらとめくる。

とある「ぺえじ」で手を止めると、冷静にそれを見つめ

「そろそろ義務教育も終わりだな。」

と一人呟いていた。

「えっ？もうすぐ義務教育終わり？！

嘘？何で？だって確か王子一人、騎士四人からですよ？？

俺達、まだ3人じゃないですか、2人足りてないじゃないですかっ
！」

夕食の席で、入橋圭は藤村教諭の義務教育終了発言に驚きかみついた。

家族団らんのようだった卓袱台の周りに緊張が走る。

不可侵の力と権限を持つ藤村教諭がいなくなる、その事実はまだこの世界の実情に疎い真菜月みするをもってしても、重大な事である事がよく理解出来た。

自然と藤村教諭に皆の不安げな視線が集中する。

藤村教諭は顔色を変えずにまた話を続けていた。

「本来なら入橋の言う通りだ。

日もまだ浅い。

しかし君達はこの国の理をすでに深く理解している。

それに何といっても「称号」を持つ男児を、始めから3人もそろえている国などすでに脅威だ。

私はこの国に関しては十分国として建っていけると判断を下した。」

入橋圭は「あ、それが！」と呟くや、向かいで「ごおやちゃんぶるう」を旨そうにがつついている羽根井覚の方をじっと見つめた。

羽根井覚がその視線に気づき「ん？」と言いながらまだもぐもぐと

食いついている。

「ハネー、短い付き合いだったね…。」

「んっ……ぐべっ!!」

ちよつとちよつとけえ、何すでに俺切ろうとしてる??

早くない??」

羽根井覚がのどに「ごおや」を詰まらせながら何とかしゃべる。

「だって、お前力だけだしさあ。

しかもその力の証の「称号」が重しになるんじゃないさあ。

ほら、よく言うじゃん。

何万の国民の為に一人の国民を犠牲にする事を厭んではいけないと

か、まあそんな感じ…?」

「ひっ……ひでえ!!」

「うん、それはひどいよ圭。

圭が覚が良いと言ったんでしょう?

最後まできちんと責任もって面倒を見ないと。」

「みやあ、ナイスフォロー。

けど何か捨て猫扱いでちょい悲しい。」

羽根井覚がにこにこ笑いながら白石雅に話しかける。

しかしまた「とれえどまあく」の立てた髪の毛が心なしか傾き始めていた。

皆の動揺を一しきり眺めた藤村教諭は、眼鏡を少し押し上げると神経質な視線を皆に向けて語り出した。

「今すぐという訳ではない。

「もうすぐ」と言っただろう。

あと一人、あと一人騎士をこの国が得たら私はここを去り、義務教育を修了する。」

「あと一人……。」

入橋圭のぼそりと呟く声が狭い用務員室に響く。

天井からぶら下がる豆電球にぶつかる羽虫の音がやけに耳についた。

「誰を誘う？」

白石雅がその涼しげな瞳を入橋圭に向けた。

質問しているにもかかわらず、白石雅の瞳には何かしらの確信めいた光が宿っていた。

羽根井覚が「決まってんじゃん」と口をもごもごさせながらしゃべり出す。

「ゆうちんでしょ？」

けえの隣にゆうちんいないの変じゃん。」

「でしょ？」と羽根井覚も入橋圭にそのくりつとした視線を無邪気に送る。

（ゆうちん…？）

真菜月みするも入橋圭を見つめた。

「うん、勇は絶対初期の仲間になりたい。」

そう宣言すると、入橋圭はそつと真菜月みするに視線を送ってにこりと笑った。

「ほら、この前話した現世からの俺の友達。」

「現世からの友達…」

あ、えつと多喜……。」

「多喜勇治。」

俺の家に出入りしてた金物屋の息子。」

「ああ！入橋くんの幼馴染とかいう——」
「うん。」

その時だった。

突如用務員室の戸を叩く音がした。

藤村教諭をのぞく皆が緊張した。

何の警告の音もしなかった。

けれどそこに辿りつくまでには、必ず白石雅の網を潜り抜けなければならぬはずであった。

「みやあ、腕落ちた？」

「そんなつもりはないのだけれど……。」

「じゃ、まさかまた姫？どこの？？」

「あらちん」とか？

でも今いないよねえ、病人とか……。」

「「あらちん」て？」

「ん？」

あー保健室に住んでるお姫様。

本名は寿嵐。(ことあきし)

超不思議ちゃんキャラで、自分以外人類皆モルモットな変態女。」

「え……。」

「安心しなさい、学生ではない。
学校の者だ。」

まだ扉の外を見ずして、藤村教諭は相手を看破し、一人扉に向かっていった。

「夜分失礼いたします。
お手紙をお届けに参りました。」

藤村教諭が開けた扉の先には、一人の子供が立っていた。男の子なのか女の子なのかはいまいち判然としない。

紺のりぼんの付いた麦藁帽子を目深にかぶり、夏の開襟「しゃつ」に膝までの「ずぼん」という出で立ちで、肩から脇腹にかけてぽっこりと大きな蝦蟇がま口のついた黒革の鞆を下げていた。

左腕の所にはちょうど風紀委員や生徒会員がするような藍色の腕章が安全ぴんで止められており、そこに「勅使」の2文字が銀糸で刺繍されている。

その子供はぺこりと一度お辞儀をすると蝦蟇口から羊皮紙の巻物を取り出し、その場で開くや高らかに文を読み上げた。

「この度は建国誠におめでとうございます。

来る明日3時の「ちやいむ」の鳴る時刻、本国は茶道室にてお祝いと今後の両国の交流を深める場としまして、お茶会を設けたいと思っております。

姫君並びに王子様、御都合よろしければその旨、ご一報いただきましたく存じます。

姫、福箱芳乃ふくはこよし、王子、蒲池大々かまち（だいだい）」

それだけ読み上げるとその子供は羊皮紙を丸め直し、軍人の様なきびきびした動きで藤村教諭にその手紙を手渡した。

「だ、そうだが…どうする？」

真菜月君、入橋。」

藤村教諭が振り返り、入橋圭と真菜月みするを確認した。

（福箱芳乃…。）

それはあの夏の夜、笛を吹いていた主の名前ではなかったか？

真菜月みするは入橋圭を窺った。

「どうなの？入橋くん。」

これって大丈夫なのかな？」

「芳乃姫なら問題ないよ。」

いつもこうやって顔合わせするのがあの人の流儀だから。

上品な良い人だよ。

どうする？

断っても問題ないと思うけど……。」

「……うん、大丈夫なら。見てみたい、かも……。」

「じゃ、そんな感じで……。」

藤村センセ、書くものください！」

入橋圭は藤村教諭から羊皮紙と使いにくそうな羽ペンをもらつと

伺います。

と一言だけ記し、「王子 入橋圭」と署名をし真菜月みするに署名するよう手渡した。

「あ、俺の上にね。」

こういうの姫の方が優先だから。

あ、あと姫って名前の前につけて。」

真菜月みするは入橋圭に言われた通り署名を終えた。

書き慣れない羽ペンで書かれたみみず文字は、何となく馬鹿っぽくて頼りない。

真菜月みするがやつぱり書き直したいという前に、入橋圭はずんずん勅使の子供に近づくとそれを「はい」と渡していた。

「確かにお預かりいたします。」

とその子供は言い、ぴつと敬礼をするともやのようにふわりとその場から姿を消していた。

夜校内の廊下で姿を消す子供、まるで学校の怪談を思わせるその光

景に真菜月みするはぞくりとした。

「そついえば入橋、公式の訪問の際に着用する礼服が見当たらなかったがどうした？」

「エ……。」

入橋圭が固まった。

「礼服？」

真菜月みするは、白石雅を窺った。

「うん、他国への正式の訪問にはね、正装する事がマナーなんだ。例えば真菜月さん、お姫様の正装は、密編みに袴着かセーラー服である事、あと称号を所持している場合はその印を身に付ける事になるのだけれど……。」

「じゃあ、あたしはこのままでいいって事？」

「うん、今の真菜月さんはそのまま問題ないという事になるね。でも折角公式の訪問になるのだから、可愛いセーラーを選んであげる。」

それで圭だけれど王子の正装は少し面倒でね、白の学帽に詰襟学ラン、サーベルに手袋を着用しなければならない、もちろん称号を持つていたらその印もね。

この気候だからね、普段からそんな恰好をしているのは、ことり姫の王子の静馬位だよ。」

「へえ……。」

真菜月みするは、藤村教諭に尋問され狼狽する入橋圭に目を移した。

（学帽、学ラン、サーベルなんて…掃除した時なかったなあ…。）

「入橋、答えなさい。」

「う……その、前の国がごたごたしている間にどこにやったものやら、すっかり忘れてしまいました。」

入橋圭はしょんぼりうなだれながらそう応えていた。

藤村教諭がお決まりの詰まらないものを見る侮蔑の視線をそんな入橋圭に送りながら、やれやれと溜息をつき「せかんどばっく」を手にとった。

「…あれをどうしたら全て失くすんだ？」

……仕方ない。

一国につき一揃いの決まりだ。

新調しよう。」

「わあ、藤村センセ、太っ腹！」

そういうや華やいだ顔をして入橋圭は藤村教諭から真新しい王子の正装を受け取った。

まるで舞踏会へ着ていく「どれす」に心躍る乙女のように、入橋圭は正装を抱きしめてくるりとまわった。

「でも、これ袖長いですよね。」

入橋圭がぼそりと不満げに呟く。

「それは既製品だから仕方がない。

どうにかしたいのなら失礼のない程度に自分達で手を加えるように……。」

「雅イ~~~~~！」

「はいはい。」

入橋圭はすぐさま白石雅に泣きつき、白石雅はそれを了承した。

「どう、かな……。」

「う？」

おおッ！めっちゃくあーいイッ！

やべえッ！」

「問題ない、真菜月君。一国の姫君として十分及第点を得られる装いだ。」

「うん、とてもよく似合ってるよ。」

真菜月さん。」

あくる日のお昼過ぎ、真菜月みするは白石雅が選りすぐる裾を直した「せえらあ」に身を包み、皆の前で披露した。

薄手の白地の「わんぴいす」の上を菖蒲色の「れえす」で飾り付けた「せえらあ」は、上品に涼しげな雰囲気を出していた。

黒の襟もとを飾る「わいん」色のりぼんに白石雅の「せんす」を感じる。

「本当白石くんこれ上手過ぎるよ。」

絶対戻ったらお店出して売れるよ！」

「そうかな、制服なんて学校でしか着れないものだし。」

「あ、それは違うよ！」

白石くんの頃はそうだったかもしれないけど今制服で接客するお店とかあるし。

男の人でも買って着るんだよ。」

「えっ…そうなの？」

「そうそう！」

みやちゃん、今生まれてれば絶対良かったのにねえ。」

真菜月みすると同じく、この平成の御世に生まれた羽根井覚もそれに同意を示す。

羽根井覚、本編からいつの間にかあぶれていたのについてここに少し補記しておきたいと思う。

羽根井覚、17歳。ここ数年内に神隠し。

6人兄弟の次男で下の兄弟の面倒をよく見る兄貴であった。

当時某「れんたるしょっぷ」で勤務に勤しみ、同じく勤務に勤しむ女子大生に恋心を打ち明けるも空しく惨敗。

その帰り道の公園で一人男泣きしていた所を神隠しされた男児である。

「あとはその御髪を整えれば完ぺきだね。

真菜月さん、ちよつとここに座ってくれる？」

真菜月みするは白石雅の指示に従い、白石雅に示された位置に腰を下ろした。

白石雅はその後ろに膝立ちになると、そつと真菜月みするの髪を取り丁寧に梳いていった。

白石雅は手持ちの椿油で真菜月みするの髪を整えると、二つに分けて密編みを編み始める。

白石雅の細い指先が真菜月みするの頭、首筋に時々触れる。

その度に何やら真菜月みするは、乙女心を揺らしてときどきとしてしまっていた。

「はい、出来たよ。

真菜月さん、確認してみて。」

白石雅はそう言いながら真菜月みするに鏡を手渡した。

「うわぁ…白石くん。

上手い、すごいよ。あたしなんかやるより全然上手だよ。」

真菜月みするの髪は綺麗に艶やぎ、きちんと左右対称におさげが編みあげられていた。

「せえらぁ」の「すかあふ」に合わせた「わいん」色のりぼんが形良く結びつけられている。

「喜んでもらえて僕も嬉しい。」

そう言いながら優雅に白石雅は微笑む。

そういう時の白石雅の瞳はとても男性的な色を帯びるので、真菜月みするはどきまぎしてしまう。

（あたしって……ある意味今すごく贅沢な女子高生なんだろうな…）

そう思うと自然顔がにやけてきてしまう。

真菜月みするが思わず頬を押さえ、そのにやけを押さえようと悪戦苦闘し始めた時、用務員室の扉を開けて正装をした入橋圭が入ってきた。

純白の学帽、純白の学らん、純白の手袋、腰から下げた「さあべる」、袖は入橋圭の要望通りに半袖に揃えられていた。

「あ~~~~、暑い。」

だるそうに入橋圭が頭の学帽を手に取りぱたぱたと顔の周りを団扇代わりに仰いでみせる。

その姿すら制服の放つ気品ゆえか、とても見栄え良く瞳に映る。

「おッ！ けえ、いいじゃん！

チョー王子！」

「……本当、かつこいいよ圭。」

「……………う。」

（……………ほんとあたし、贅沢過ぎる。）

「どう、みする。

俺かつこいい？」

入橋圭が学帽をかぶり直し「ばおず」を決めて真菜月みするに質問する。

「ッ……………ヤダ、言えない。」

真菜月みするは青春乙女故の恥じらいで、その質問に正しく答える事が出来なかった。

「は……………？」

その答えを予期していなかった入橋圭は、思わずぼけた顔をして真菜月みするを見つめた。

けれどすぐにいつものいじわる笑いを浮かべると、「んふふうん？」と訳の分からない言葉を呟きながら真菜月みするにじりよつていた。

「言えないって何がア？

何々？みするつては俺にときめいちゃったりしちやってるう？しちやってるう。」

「うるさいッ！」

「ぶッ——」

入橋圭はまたいつものごとく座布団をくらつていた。

「どうして圭はいつもそういう意地の悪い事するのかなあ」と白石雅も不満顔で入橋圭をたしなめる。

「やあい、だつせだつせエ」とはやし立てる羽根井寛の顔に向けて、入橋圭が座布団を投げつけた所で藤村教諭が口を開いていた。

「そろそろ時間だ。

二人とも出発しなさい。」

「はあーい。」

すでにあぐらをかき始めていた入橋圭がよいしょと立ち上がる。

「じゃ行こうか、みする。」

そう言つて入橋圭は真菜月みするに手を差し伸べていた。

「うん。」

真菜月みするはその手の平に自分の手を重ねていた。

茶道室は一つ上の2階に位置する。

真菜月みすると入橋圭は人気のない廊下を過ぎ、上階へと向かう階段に足を掛けていた。

「ねえ、入橋くん。」

「ん？何みする。」

「いつまで手つないでんの？」

「ん？いつまでも。」

入橋圭がにんまりと微笑む。

その時真菜月みするは入橋圭の手を通してその心の色を知った。
どう見てもそれは邪な色に染め上げられている。

「やっぱセクハラじゃん！」

真菜月みするはすぐさま入橋圭の手を振り払っていた。

「えー、てか何せくはらって」とのたまう昭和育ちの入橋圭の質問に、真菜月みするは持ち前の淑女精神を振るい、その言葉の持つ意味とその邪悪さを入橋圭に熱弁した。

「まあつまりスケベって事ね。」

と入橋圭はひとりごちる。

「今度使ってみよ」と新しい玩具を見つけた子供さながらに喜ぶ入橋圭のその姿は、きちんとその言葉の持つ邪悪性を理解出来ていかはなはだ怪しい。

「誰に使うのよ。」

「勿論みするに。」

だつてたまにみするの視線「セクハラ」じゃん？

「ッ……！」

手近に座布団のない真菜月みするはただのか弱い青春乙女である。

「せくはらせくはら」と連呼する入橋圭を真菜月みするは必死になつて追い掛けた。

「ははッ！」

すごいなお前ら。

すでに夫婦漫才じゃん。」

一つ階段を駆け上がった先に一人の男児が立っていた。かなり身長の高い男児である。

きりりと鋭くぎらぎら輝く瞳、頭上で「ぽにいている」に纏めるもその先からくしゃくしゃと広がる蓬髪、極めつけの口の周りにわずかに生える不精髭はさながら戦国武将を彷彿とさせる。

(……違う、戦国武将っていうより……えっと、あれ……何ていうんだっけ……。)

真菜月みするはその怪人物の容姿をさらに凝視して、これぞというこの人物を表現するにふさわしい言葉を探し出そうとした。

指先で玩ばれる白い学帽、「まんと」のごとく羽織る白学らんとその下の真紅の「たんくとつぷ」、腰に当てた腕に咲く碧の花火、足元の今時珍しい下駄、そう……何というか――

「番長さん??」

番長、それは真菜月みするの暮らす現世ではすでに絶滅種と化した、青春時代の若大将の呼称であった。

しかし今現在目の先に立つ青春男児を形容するには、まさにこの伝説の言葉が何よりも適していた。

「おっ！わかる？いける口だねイお嬢ちゃん。

俺は蒲池大々、芳乃の旦那！よろしくな！」

伝説の怪人こと芳乃姫の王子、蒲池大々はからからと腰に手を当てて笑い出した。

「え……みするああいう番長系いける口なの？」

「ベッ……別にいけないし！」

入橋圭のすつとぼけた質問に、真菜月みするはひそひそと答えを返した。

蒲池大々にそれが聞こえた様子はない。

「じゃ行くか！」といういうや、無防備にも傍に立て掛けておいた「さあべる」を手に取るとからんころんと下駄を鳴らしながら前を進み出した。

二階の廊下に行くとそこには、大勢の男児達が両側に腕を組んで立ち並んでいた。

まるで応援団のごとく思わず圧倒されるその光景。

真菜月みするは躊躇した。

しかし入橋圭は躊躇を見せなかった。

真菜月みするの手をするりと取ると、軽く握り蒲池大々の後に続く。

「大丈夫、何もしてこないよ。」

入橋圭の言う通り、廊下に並ぶ男児達は真菜月みすると入橋圭をじろじろと見ていたがその場から足を動かす事はなかった。

2人が通過すると同時に軽く頭を下げてしばしそのまま停止している。

（すごい……。）

まるで軍人映画のような動きを見せる男児達に、真菜月みするは目を丸くしてしまった。

（みするの手、やゝらかあ……。）

真菜月みするは思いっきり入橋圭の手を振り払い、廊下に立ち並ぶ男児達を驚かせた。

「芳乃オ、今帰ったぞオ。」

蒲池大々が「茶道室」とかかれた札のかかる教室の前で止まると、まるで帰宅した亭主よろしく声をかけて扉を開けた。ひんやりとした空気が真菜月みするの体を通り抜けていく。それは夏の空気に決してあらず、されど冬のもでもない限りなく人工的なもの……。

（わ…冷房効いてる………！）

そこには一人の青春乙女が鎮座していた。淡い黄色地に水色のしぼりを効かせた浴衣を身につけ、下は黒の袴を穿いている。

何とも涼しげで上品な装いである。

顔立ちは真菜月みするのいる現世ではあまり見なくなった、穏やかな昭和美人の顔だちをその乙女はしていた。

ゆるやかな輪郭、瞳と鼻は小さくすうっと細く、その下の唇は薄い。額を露わにし、真中で分けられた濡れるような漆黒の髪は耳の脇で一度水色の「りぼん」を結び細いお下げを緩やかに流している。

「御帰りなさい、大さん。」

その青春乙女は、やんわりと蒲池大々に微笑んだ。

そして入橋圭と真菜月みするにゆっくりと視線を移す。

右手に碧の華を咲かせたその両の手を、三っ指にきちんと立てて深くその場でお辞儀をする。

乙女の頭が下がるのに合わせて、裾とおさげがゆっくりと華開くように広がっていく。

乙女の白いうなじが何とも清らかで眩しい。

（綺麗……。）

真菜月みするは、その流れる所作とうなじに思わず見惚れてしまっていた。

「本日はようこそおこしくございました。

私は福箱芳乃と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。」

ゆっくりと青春乙女、芳乃姫は顔を上げた。

その顔にはすでに穏やかな笑みが浮かべられている。

（お姫様って、ホントお姫様なんだ……。）

真菜月みするはゆっくりと溜息をついていた。

靴を抜いで畳にあがった入橋圭と真菜月みするはきちんと正座し、芳乃姫そして蒲池大々に対峙した。

ちなみに蒲池大々は下駄のまま畳の上にのし上がった。

欧米文化を取り入れているものなのかと真菜月みするはぎよつとしたが、それに気付いた入橋圭が真菜月みするの指先に少し触れ

（あの下駄が皆さんの「称号」だから。）

と心の内に告げていた。

見れば畳の上に敷かれた専用の絨毛絨毯の「るうと」を経由して自分の席と思しき座布団に腰かけている。

どうやら欧米文化を取り入れている訳ではないという事が、真菜月みするにも理解できた。

（みする！挨拶挨拶！）

「えッ… あ？ 挨拶。」

ああ、えと真菜月みするです。
よろしく願いします。」

一応今見た芳乃姫の挨拶に倣って、真菜月みするは挨拶を試みた。
けれども真菜月みするがそれを見ると、どうにもぎこちない。
三つ指がぶるぶるしているのに気付いた、隣の入橋圭と手前の蒲池
大々がぶつと笑った。

「ちょッ… 入橋くん！」

「大さん、失礼ですよ。」

二人の姫君が二人の王子をたしなめる。

その「たいみんぐ」があまりに同じであったので、やはり二人の王子は声を上げて笑い始めた。

茶道室での会談は穏やかなものであった。

見た目どおりに気品ある動作で芳乃姫がお茶を立ててくれた所で、
またもや真菜月みするはあたふたとろたえたが、見た目どおり豪
快な蒲池大々が「無礼講じゃあ。」と言うや立てたばかりのお茶を
豪快に片手でずびずびすすり切った。

「大さんたら、お客様からでしょう？」

軽く蒲池大々をたしなめた芳乃姫は「確かに無礼講ですからね。」
と人数分のお茶を立てると、「さ、作法など気にせずお飲みください。
い。」とお茶を勧めてくれた。

（なんか… いい人たち、良かった。）

真菜月みするは、お茶を少しすすりながら手前の二人を盗み見た。

一見優等生のような芳乃姫と一見番長のような蒲池大々。
真逆のこの青春男女が何故か妙にお似合いの、ほほえましい「かつ
ぶる」のように真菜月みするの瞳には映った。

「で？」

圭、今お前んトコ、人何人？」

「えっと…今4人です。」

俺でしょ、みするでしょ、で雅に羽根井寛。」

（え……………？聞くの、そういう事。

しかもそれに答えちゃうの？入橋くん。）

真菜月みするはぺらぺら内情を話す入橋圭をはらはらと見つめる。

それでも入橋圭の口は止まらない。

「日野宮静馬が放送かけた日あったじゃないですか。

あの日凌子様が奇襲掛けてきたんです、もう知ってると思いますけど…。」

「ああ…知ってる。」

少しうちにも流れ者が来たからな。」

「凌子様の罰則は徳の半減と1カ月の休学。」

だからもうすぐ動き出します、色々と気をつけて下さいね。」

「ああ、てかまず気をつけるのはお前んとこだろ？」

あ、でもセン公怖くて近寄んないか。」

「いやそうもいかなんですよねえ、藤村センセがあと1人で義務教育
終わりに言うんですよ。3人称号者がいるからって…。」

でも少なくともすよね？どう考えても…。」

「ちよっ…………入橋くん！

そんな話しちゃっていいの？」

さすがに真菜月みするは入橋圭の袖を引っ張った。
入橋圭がいつものうすら笑いをにんまりと浮かべる。

「もちろん良くない。」

「ちょッ……。」

「でも得るものもある。」

「え………?」

真菜月みするは入橋圭をまじまじと見つめた。

「そんなに見つめちゃセクハラよ。」と軽口を叩くと、蒲池大々に
向き直った。

「って訳で俺としては、最後の一人に多喜勇治を探してる訳です。
今どこの国にいるかわかりませんか?」

「おいおい、わかるかってそんな見くびった聞き方すんじゃないよ。
俺達の国を何だと思ってるの。」

なあ、芳乃。」

「そういう鼻を高くするのは大さんの良くない癖ですよ。
私嫌いです。」

「え……嫌われた?俺を捨てないでえ芳乃オ。」
目の前の芳乃姬がついと蒲池大々から顔をそらして、蒲池大々がお
ろおろとそれを取り繕うと悪戦苦闘している。
その間に入橋圭がこそりと真菜月みするにささやいた。

「芳乃姬の国はね、学園の食を支配してるんだ。
つまり学食ってやつ?」

大抵の国は大所帯だから自分らで毎日飯を作り切れない。
出来ものを仕入れると徳が無駄にかさばる。
そこに目をつけた芳乃姬は給食室を占領して学食統治を行ったって
訳。

食を提供する代わりに各国と協定を結んだり献上品をもらったりし

ていて、この学校の情報にかなり精通してるんだ。

「統治?! 協定?! 献上品?!?!」

そんなもの作んなきゃなんないの?！」

「まあ国によりけりだね。」

でも他国と何かしらの協定を取ってないと色々大変だからさ。

「なんか、本当に国家みたいなんだね…。」

「うん、ここでは本当に国家だからね。」

しかし青春男女が王子姫で国を統治、やはりどうにも現実味のもてない話である。

「つまり内情とかの秘密情報を教える代わりに、その多喜くんの居場所を教えてもらおうって訳？」

「そう、そういう事。」

「でもそういうのってまず相手に情報交換はそれでいいか了承してから始めるものじゃないの？」

「そう、その通り！」

「じゃあ今入橋くんがしたの情報のただ漏らしじゃない！」

「—うーん、いいえ」

入橋圭がへらへらと笑った。

信じられないと真菜月みするがそんな入橋圭を呆れて見つめる。

「でも大丈夫だよ、みする。」

こういふ話するのがいつもの手順だし。

ねえ！大さん！」

そこそこに芳乃姫の機嫌を取り戻した蒲池大々が、「ああまあな。いつも通りだ。」とそれに応じる。

「だが、主。」

そんなに他国を信用するもんじゃないぜ。

これで俺がそこに突け込んだらお前どうするよ？」

「俺は俺で復讐します。ついでに大さんは大さんで芳乃姫に嫌われます。」

「……ッ……. 違いない。」

苦しげに蒲池大々がかかと笑った。

それに合わせて入橋圭が高圧的にあははと笑う。

なるほど……どうやらこの件に関しては問題はないらしい。

校内放送をかける日野宮静馬とやらの国や、奇襲をかける暗罪凌子の国とはまた違った国のようだ。

入橋圭はこの国の性質を十分理解した上で、この会談に臨んでいる事を真菜月みするは理解した。

「それにね、みする。

大さん達が勇の居場所を教える事は、大さん達の得になるんだ。」

「そうなの？」

「そうなの。」

だつて勇が仲間になれば俺達の義務教育が終わるでしょ？

あわよくば、うちを滅ぼせる。」

「ッ……。」

入橋圭は「ねえ？」と手前の芳乃姫と蒲池大々に同意を求める。

それに対して芳乃姫は少し悲しげな顔でこくりと、蒲池大々は「まあな！」と笑いながら答えを返した。

「国を維持するのに怖い時はね、みする。

新しい国が出来た時なんだ。

新しい国が騎士をもぎ取りに必ず来る。

騎士の謀反がどこかしらの国で必ず起きる。

謀反のなかった国でもその波紋は必ず起きる。

そうやって何処の国も不安定な状態にさせられる。

下手をするとそれで滅んじやう国とかあるからね。

出来ればすぐ潰れて無かった事になってくれるのが一番良い。」

入橋圭がまた「ねえ？」と手前の芳乃姫と蒲池大々に同意を求めた。それに対して蒲池大々が「おう！」と明るく返す。

「でも——。」

不安そうな真菜月みするに、うすら笑いの入橋圭がゆっくりと答える。

「俺が王子の国は簡単に潰させない。」

「ねえ？」

入橋圭が蒲池大々を見据える。

いつものうすら笑いを浮かべているが、その瞳は強い光を放っている。

「さあなあ……。」

蒲池大々もそれに対してうすら笑いを浮かべて応じる。

瞳がざらりとしてその様子は戦を喜ぶ戦国武将さながらだ。

（う……何か空気がまずいんじゃない……。）

人並みに空気の読める真菜月みするがその空気を察して息を呑んだ時、二人の王子はげらげらと高らかに笑っていた。

「安心しろ！圭。」

お前らがうちの騎士、引き抜きに来たら全力抗戦はするだろうが、こっちから手を出すつもりは今の所ねえよ。

勿論今お前からもらった情報はそれなりに流すけどな。」

あつけにとられた真菜月みするに蒲池大々が軽く「ういんく」をする。

思わず真菜月みするははっとして頬を染めてしまっていた。

芳乃姫が「もう、大さん。」と軽くたしなめる。

蒲池大々はあはははとまた高らかに笑いあげた。

「という訳で、うちの持つ情報はそんな所。

……で、そっちの情報ほしいんですけど……。」

多喜勇治、何処の国にいるか、何処の国にいる可能性が高いか、教えてほしいんですけど…。」

入橋圭が芳乃姫、そして蒲池大々をゆつくりと瞳に映す。

蒲池大々は笑いをおさめ、隣りでしとやかに控えている芳乃姫をうかがった。

芳乃姫がゆつくりと口を開く。

「みするさん、圭さん。」

「あ、はい！」

芳乃姫の声に入橋圭と真菜月みするはぴしりと座りなおす。

芳乃姫の声は柔らかく温かな声で藤村教諭のような威圧感や露程もないが、気品があつて自然と背筋が正しくなってしまう。

「多喜勇治さんは、この国にいます。」

「えっ……！」

入橋圭と真菜月みするの驚きが重なる。

入橋圭は瞬時に驚きを冷静にすり替えると、目の前の芳乃姫と蒲池大々にすばやく瞳を滑らした。

「それじゃ俺達は、どうしたらいいですか？」

入橋圭は目の前の芳乃姫に話しかける。

芳乃姫は涼しげな瞳をふせ、顎を小さく横に振った。

「いいえ、何も。」

勇治さんにも確認を取りました。

圭さんの側につく事を希望されております。

ですから今回私は無条件で勇治さんだけは引き渡したいと思つています。」

「ホントですか？芳乃姫！」

入橋圭が大きな驚きと小さな喜びを浮かべて、芳乃姫の方へ身を乗

り出す。

芳乃姫はこくりと小さく頷いた。

「芳乃はな……。」

隣りに控える蒲池大々が、低く声を響かせる。

入橋圭が蒲池大々に瞳を映す。

蒲池大々は、好戦的な笑みを浮かべて顎をさすりながら、そんな入橋圭を見つめ返した。

蒲池大々が人差し指を一本立てる。

「俺からは一つ条件を付けたい。」

「何ですか？条件って……。」

「俺と決闘しろ。」

「……決闘……。」

真菜月みするの呟きが茶道室に響く。

「決闘ッ??！」

真菜月みするは驚愕した。

「勝たないと渡さないってヤツですか？大さん。」

「いや、勝ち負けに関わらず多喜勇治は渡すぜ。」

とにかく俺は——」

「——お前と戦りてえんだよ。」

不敵な表情を浮かべながら蒲池大々は入橋圭をじろりと見つめる。

入橋圭は薄笑いを浮かべながらやれやれと瞳をそらして溜息をついていた。

「本当、大さんは戦国武将なんだから。」

「じゃ、決まりだな。」

蒲池大々がすつくと立ち上がる。

「来い、圭！」

場所を変えるぞ！」

蒲池大々は誰の言葉も待たず、嬉々として専用絨毯を渡り歩き茶道室を後にしていた。

「ちよっ…え？」

決闘って決闘？！

喧嘩するの？？入橋くん。」

「うん、まあ何だかそういう成り行きになっちゃったね。

応援してね、みする。」

入橋圭は動揺する真菜月みするににこりとほほ笑むと、その頭をぽんぽんと叩いて茶道室を後にしていた。

「え……？え…？」

「ごめんなさいね、みするさん。

大さん本当に喧嘩が好きで好きで…。」

「あ…．．いえ。」

真菜月みするに目の前の芳乃姫に瞳を映した。

芳乃姫はゆつくりと袴をつかんで立ち上がる。

そんな芳乃姫をぼんやり見つめる真菜月みするに、芳乃姫はそっとその手を差し伸べた。

「それでは私達も参りましょう。」

「はあ…。」

「決闘場へ参ります。」

芳乃姫のその声を合図に、二人の長身の男児がそれぞれ日傘を持ち、芳乃姫と真菜月みするの後に付き従った。

思わずぎよつとして、真菜月みするはそちらを振り向いてしまう。男児達は表情を崩さない、じつと前を見つめる様はまるで訓練されつくした精鋭軍人のようである。

何やらぴりぴりとした空気に真菜月みするは落ち着かない。

「どうしました？みするさん。」

階下へと向かう芳乃姫が、そつと真菜月みするの様子を窺う。

真菜月みするは少し後ろを気にしながら、そつと芳乃姫に囁いていた。

「なんだか…後ろの人達、無表情だから少し緊張して…。」

「まあ、ふふふ。」

芳乃姫は軽くほほ笑むと、後ろの二人に向けて話しかけていた。

「渡さん、脩平さん、いつも通り楽にして下さって結構ですよ。みするさんもその方がよろしいようです。」

芳乃姫がそういうやいなや、渡、脩平と呼ばれた二人の男児はそれまでの無表情が嘘のようにへらりと相好を崩すと、「あーありがたいです。」と顔をふきふき、襟元をぱたぱたと仰ぎ出した。

いきなりあふれ出た二人の男児の人間臭さに、真菜月みするはあっ

けに取られる。

そんな真菜月みするを見て、芳乃姫はくすくすとほほ笑んだ。

「普段からこんな堅苦しくしている訳ではないの。」

他国を迎える時だけ特別にね。

普段は見ての通りこんな感じですよ。」

「そうそうこんな感じこんな感じ。」

「ねえねえ、みするさんお幾つですか？」

二人の男児が人懐こく真菜月みするにからんでくる。

真菜月みするはまだびくびくとしながらも、そんな二人の男児を交えて芳乃姫と歓談した。

校舎の正面玄関から面に出る。

飴色の観音扉はすでに開け放たれていた。

二人の男児がさつと芳乃姫や真菜月みするの頭上に日傘をかぶせる。見れば学らんのまま、肌を刺すような直射日光を浴びている。

「あの、大丈夫ですか？」

思わず真菜月みするは額に汗する男児を窺ってしまう。

勿論男児は「大丈夫ですよ、この位。」というしかない。

ちなみに、真菜月みするに傘を掛けている男児は渡である。

「芳乃さん、学ランは脱いでもらっちゃ駄目なんですか？」

もし礼儀で着ているとかだったら、あたし全然気にしないですから。

「

真菜月みするは芳乃姫を窺う。

芳乃姫はやりわりと真菜月みするにほほ笑んだ。

「優しいのね。」

ありがとう、みするさん。」

すぐさま芳乃姫が背後の二人に是を示す。

渡と脩平という男児は、「わぁ！ホントみするさん助かります！」

「死ぬ程暑かったんですぅ、あ、これ2人共若大將には内緒で願いますよ。あの人すぐ日本男児が何たるか始めますから。」と言いながら嬉々として、学らんを脱いでいく。

何だかその子供っぽい様子がとても微笑ましくて、真菜月みすると芳乃姫はくすくすと顔を合わせて笑ってしまった。

「芳乃、遅いぞ！」

立会人の姫がいなくちゃ決闘出来んじゃないか！」

そこにはうずうずとしびれを切らした蒲池大々が立っていた。

真菜月みするはその景色に目を疑った。

決闘場、そこは体育館の裏に設けられていた。

普通ならば体育館の影になりうす暗くなっているはずのそこには、穏やかな木漏れ日が漏れている。

そう、それはあまりに穏やかだった。

どう考えても先程までの夏の日差しではない。

それは穏やか過ぎて春の日差しを思わせる。

その証拠にそこは一面桜並木が群れをなし、桃色の花弁を乱舞させていた。

「芳乃さん、桜……咲いてるよ。夏なのに。」

真菜月みするはとりあえず、事実をぼつぼつと並べ立てる。

そんなぼんやりした様子の真菜月みするの初々しい反応に、傘持ちの二人の男児はくすくすと笑い合った。

「ええ…。」

何故かここには咲いているの。

ここだけいつも春の陽気なんですよ。
ベロニカ様の演出と言われています。

桜散る決闘なんていかにも絵になるでしょう？」

「……そう、ですね。」

確かに絵になるが、季節がこうも場所場所で変化するのは如何なものか、真菜月みするは今一つ納得できないまま目の前の現実を目をくれていた。

桜並木は体育館の裏一面に続いている。

その並木の間に、人が横並びに三人位は通れる幅の石畳が敷かれていた。

石畳の両端付近に、塗装の施されていないぼろぼろの鳥居が設置されている。

ちょうどその石畳の真ん中あたりに、蒲池大々と入橋圭は並んで立っていた。

「決闘の方法はどうされますか？」

そんな二人の元へ近づくと、芳乃姫が慣れた様子で蒲池大々に質問を投げかける。

「圭と話して決めた。」

これでいく。」

蒲池大々が己の手にする「さあべる」を肩でとんとんと叩く。

「称号は無しだ。」

そういうや蒲池大々は、下駄をぽんぽんと石畳の外の地面に蹴って投げる。

「芳乃、持つてろ。」

「はい大さん。」

芳乃姫はしずしずと散らばった下駄を拾い上げ、その胸元に抱え込んだ。

それを確認した蒲池大々は、入橋圭に向けて鞘のついた「さあべる」を示して声を荒げる。

「さあ圭！」

お前も称号捨てろ！」

（捨てるって……。）

真菜月みするは入橋圭に視線を向ける。

「ごめん、大さん捨てらんない。」

入橋圭がへらりと答える。

「何だその捨てられないというのは！」と蒲池大々が激怒する。
しかし入橋圭はどこ吹く風で蒲池大々に答えていた。

「俺、失くさないよう食べちゃったから。」

「何？」という蒲池大々の表情は一瞬怪訝な色に曇ったが、すぐにそれは固い表情に変わっていた。
芳乃姫の表情も陰りを見せる。

（この人達も知ってるんだ。）

真菜月みするはひそかに思った。

「大丈夫、持っても称号の力は使わない。

決闘でそんな情けない事するつもりはないよ。」

「仕方がないな。」と蒲池大々は一応了承を見せると、芳乃姫を呼び外套のように羽織っていた学らんと学帽をその腕の中に手渡した。

「頑張ってくださいね。」

「おう。」

蒲池大々はにやりと笑う。

芳乃姫は柔らかくほほ笑みを見せている。

（なんか……良いなあ。）

真菜月みするは、その青春絵巻のような二人のやりとりに思わず見とれてしまっていた。

「みするみする！」

俺の荷物もちよつと持つててよ。」

入橋圭が真菜月みするを呼ばれる。

真菜月みするはあたふたと入橋圭の側に近寄った。

入橋圭は足元の革靴と手袋をはずしにかかる。

「大丈夫？入橋くん。」

勝てそう？」

「さあ。一応手ほどきは受けてるけど…。」

ちゃんばらつて久しぶりだしなあ。」

入橋圭が足元に置いた「さあべる」に瞳を映す。

真菜月みするの視線も自然そちらに流れていた。

ふとある疑問が真菜月みするの頭をよぎる。

「それって、真剣……？」

「うん真剣。」

「ッ……何それ危ないよ！」

怪我するよ入橋くん。」

思わず真菜月みするは声を荒げてしまっていた。

格闘漫画でもあるまいし、いくらこんな現実味のない世界といえどもその命は現実だ。

こんな訳のわからない戯れのような理由で、命のやりとりをしてい
いはずがない。

靴下を脱いでいた入橋圭は少し驚いた顔をして、上気する真菜月み
するの顔を見つめ返していた。

「みする、俺の事本気で心配してんの？」

「あたり前じゃない！」

だって――」

（だって……何??）

真菜月みするは混乱した。

だって、何だというのだろう…。

「愛しているのよ！」これは違う、絶対違う。さすがにそこまで気
持ちは育っていない。

「友達だから！」うん、これは近いような気がする。しかし何か今
一つ……。

（あれ、あたし……入橋くんの事友達として見ていない??）

真菜月みするには男児の友達は現世にいない。

もっぱら女兒の友達である。

しかし真菜月みするが入橋圭に抱く感情は、女兒の友達に抱いてい
る感情とは少し異なるものであった。

真菜月みするはその事実にさらに混乱した。

（じゃあ……あたし、入橋くんの事何だと思ってるんの??）

（えっ……ちょ……え??）

混乱する真菜月みするの視界を何かが遮った。
入橋圭の学帽だ。

「あ……………」

「ありがとう、みする。心配してくれて。」

入橋圭の声は優しい。

学帽の縁を握る入橋圭の指先が目先の先にある。

真菜月みするはその学帽を頭からよけて入橋圭の顔を見る勇氣がなかった。

何だか恥ずかしくて、心が温かくて仕方がない。

「じゃ、行ってきます。」

入橋圭の指先が帽子から離れる。

「入橋くんッ！」

思わず真菜月みするは声を上げて入橋圭を呼びとめていた。

石畳の端に向かいかけていた入橋圭が、「ん？」と真菜月みするを振り返る。

「えっと……………今度から名前で呼んでもいい？」

真菜月みするは自分の顔が赤い事を感じていた。

「初めに言っただじゃん。」

入橋圭が優しく真菜月みするにこたえる。

（あ……………）

「俺の事は好きに呼んでいいからって…。」

（今までで一番穏やかな笑顔だ。）

いじわるな薄笑い、寂しげな微笑み、いつも心からの笑みを見せた事のなかった入橋圭。

その入橋圭が見せる心からの満面の頬笑みに、真菜月みするは思わず涙が出そうになってしまった。

けれど真菜月みするもそれをこらえて、入橋圭に満面の笑みを返して答えていた。

「うん、頑張つて……圭くん。」

「うん、頑張つて……圭くんつか!?

ひゅゝひゅゝ。見せつけてくれるねえ!

ご兩人。」

蒲池大々の冷やかに真菜月みするは一気に我に返る。

（そうだ……皆いたのに。）

見れば蒲池大々も傘持ちの渡や脩平も、にやにやと「せくしゃるはらすめんと」の表情を浮かべている。

入橋圭は入橋圭で「羨ましいだろ、お前らあゝ。」と、恥ずかしげもなく胸をはって自慢までしている始末だ。

（最悪だ……。）

真菜月みするは一人学帽のつばを抑えて、ぷるぷると羞恥に耐えた。

ぶるぶるしている真菜月みするが面白いのか、蒲池大々はなおもひゅゝひゅゝ呟いている。

それに合わせて二人の男児もひゅゝひゅゝ合奏を始めてしまった。しまいには冷やかされている入橋圭もひゅゝひゅゝ言っている。

「みなさん。」

芳乃姫の声が静かに響く。

その表情は頬笑みにあふれていた。
しかし――

「怒りますよ？」

その瞳は笑っていないかった。

真菜月みすると芳乃姫は、石畳のちょうど真ん中辺りに位置する見物用の桟敷席に移動した。

そこには一人の男児が控えていた。
背の低い男児である。

おそらく女子の平均身長より少し上といった所であろうか？

短く刈り込んだ黒髪に太い眉毛、印象の薄い二軍の球児のような風采をしている。

その男児は芳乃姫が桟敷に入ってくるのに気付くと、ぺこりと軽く会釈をしていた。

そして真菜月みするの方をじっと見つめると、同じく控え目にぺこりと軽く会釈をしていた。

芳乃姫が真菜月みするを振り返る。

「みするさん、彼が多喜勇治さんです。」

「えっ！」

真菜月みするは多喜勇治を凝視したまじまじと見つめられた多喜勇治は、かあつと頬を赤く染めたが真菜月みするにぼそぼそと語り始めた。

「はじめまして、多喜勇治です。」

「あ、こちらこそはじめまして、真菜月みするです。」

「……。」

「……。」

しばしの無言が二人を襲う。

そんな二人の空気に気を利かせて、芳乃姫がやんわりと話し始めた。
「勇治さんはとても人見知りなの。
でもとても真面目で良い方なのよ。」

「あ、それは……い、圭くんに少し聞いてます。」

「え……圭がおいらの事話したの？」

多喜勇治が小さく驚き、真菜月みするに質問する。

真菜月みするは多喜勇治を見据えてこくりと頷いた。

「うん、俺の大切な幼馴染と一緒に帰るんだって……。」

あと一人で義務教育終わりなら絶対多喜くんが良いって……。」

「……圭のやつ……おいらなんかいても役に立たないのに。」

そういう多喜勇治の顔には、やはり少し嬉しそうなものが混じっていた。

真菜月みすると芳乃姫は、そんな多喜勇治を見て温かい気分になせられる。

「さ、もうすぐ決闘が始まります。

席に着きましょう？みするさん。」

「あ、はい。」

芳乃姫に促された真菜月みするは、棧敷席の手前の席へと歩きかけ

た。

「あ、あの！みするさん！」

そんな真菜月みするを多喜勇治が呼びとめる。

真菜月みするはくるりと多喜勇治の方へ振り返った。

「さつきは……有難うございました。」

多喜勇治が深々と頭を下げる。

真菜月みするは何に対しての謝罪なのか今一つぴんときない顔をして、そんな多喜勇治の後頭部を見つめていた。

多喜勇治が顔を上げる。

背の低い多喜勇治の視線は、ほとんど真菜月みするの視線と同じ高さに位置していた。

まっすぐに正直な瞳が真菜月みするの顔を捉える。

「圭を、ちゃんと笑えるようにしてくれて……。」

「あ……。」

先程の入橋圭の満面の笑みと、真菜月みするの心の中を襲った、小さな温かい嵐の間隔がよみがえる。

「別に……あたしは何もしてないから……。」

もじもじとそれだけこぼす真菜月みするに対して、多喜勇治はぶんぶんと首を振るとまた深々とお辞儀をして感謝の言葉を述べていた。

「本当に……有難うございました。」

その声は、わずかに震えていた。

「多喜くん……。」

「おおーい、芳乃！」

早く開始の合図を出してくれよ。」

そんなしんみりとした栈敷の空気を打ち払うかのように、しびれを切らしに切らした蒲池大々の声が飛んでくる。

その言葉で、多喜勇治も顔を上げ朗らかに笑うと「どうぞ」と芳乃姫と真菜月みするを席へと案内していた。

「それでは私、姫福箱芳乃並びに姫真菜月みするの立会いの元、王子蒲池大々並びに王子入橋圭の決闘を執り行いたいと思います。」
芳乃姫が棧敷席の最前列で起立して両端の鳥居の下に立つ、両男児に目を走らせる。

「みするさんはまだ決闘の作法をご存じないかと思しますので、今回は私が――」
という芳乃姫の言に任せて、真菜月みするはその隣の席で座りこみ、その決闘の様子を傍観していた。

芳乃姫の手には、その平にすっぽり収まる小さな陶器の小皿が握られていた。

その小皿には、先程芳乃姫の手ほどのきの元書き上げた真菜月みするの名前と、芳乃姫の名前が記されている。

この小皿に姫自ら名前を記す事が決闘の承認となり、この小皿を割る事が決闘開始の合図とされていた。

「それでは参ります。」

芳乃姫のその声と同時に、穏やかな春の風がふわりと流れる。

それは棧敷席の中まで満たし、その流れに身を任せていた桜の花びらがひらひらと視界を横切った。

（わぁ……。）

真菜月みするがその花びらに心を奪われる。

また一陣の風が起こりその風は沢山の花びらを空へと巻き上げた。

これほど沢山の花びらが乱舞する景色を見た事のなかった真菜月みするは、どこまでもその花の流れを目で追ってしまっていた。多くの花びらは桜の木を飛び越えていずこかへと流れていく。

(え………。)

花の流れを追いかけた真菜月みするの瞳は、そこにあり得ないものを捉えていた。

桜の木の一際大きな枝の上に二人の人が立っている。

ひどく超えた女と小柄な男。

遠目にも乙女には見えないその女は、あひるを一匹載せているのではないかという程の量の羽飾りの帽子を頭に載せ、どっさりと「ふりる」と「れえす」を使った真つ赤な「どれす」をその春風になびかせている。

まるで化け物梟だ。

時折その太い足が見え隠れするのを、隣りの頭に小鳥程の羽飾りの帽子を載せた小男があせあせと抑えにかかっている。

(何あれ……。)

——ぱりいいいんっ！

「ッ………！」

突如響いた音に真菜月みするはびくりとした。

芳乃姫が合図の小皿を、棧敷の外の地面に設えられた大岩に叩きつけたのだ。

見れば鳥居に立っていた二人の男児は、正面の相手目指して突進を始めていた。

蒲池大々は走りながらすぐに「さあべる」の鞘を投げ捨てている。

嬌声を上げ嬉々として突進する様は、本当に戦国武将のようである。対する入橋圭は、鞘を抜かずに滑らかに突進する。

二人の男児は、丁度棧敷の正面辺りで衝突していた。

がきんと硬い物同士がぶつかる音が響き渡る。

蒲池大々が斬りつけた「さあべる」を、入橋圭が鞘で受け止めた、と思ったのも束の間、入橋圭は一瞬だけ衝撃を殺すとその身体を横にそらし蒲池大々の脇をするりと通り過ぎながら鞘から刀身を抜き出していく。

突如空の鞘を掴まされ、力の行き場を失くした蒲池大々はたたらを踏む。

入橋圭はいつもの薄笑いを浮かべながら、蒲池大々の脇を「さあべる」をひと振りして通り過ぎた。

蒲池大々の頭髪がばらりと広がる。

ぽつっという聞こえるか聞こえないかの小さな音を鳴らして蒲池大々の髪留めが地面に落ちたのと、入橋圭が刀を肩に置いて後ろを不敵に振り返ったのはほぼ同時の事であった。

「え……。」

真菜月みするは絶句した。

その間にも、髪をかき上げにやりと笑った蒲池大々と入橋圭は互いに打ち込みを開始する。

蒲池大々が猛々しい斬撃を繰り出すのに対し、入橋圭はしなやかな猫のように身体を動かしながら一瞬の隙を突く鋭い斬撃を繰り出している。

どう見ても玄人達の殺陣である。

（一応手ほどきを受けてるって……??）

え、剣道部とか入ってればこの位は普通??)

「相変わらず筋が良いですね、圭さん。」

今や真菜月みすると同じく腰を掛け観戦する芳乃姫がぼそりとつぶやく。

真菜月みするはそんな芳乃姫を凝視した。

「え、あの……相変わらずって…」

でもさつき圭くん、あんまり出来ないみたいに……。」

「それは謙遜です。」

圭さんがあまり出来ないなどという事はありません。」

芳乃姫が苦笑する。

真菜月みするは訳が分からないという顔を見ると、前を見据えて芳乃姫は口を開いていた。

「圭さんは一度、剣術で「称号」を賜った事がありますから。」

「えっ……!」

そうなんですか!」

「はい、他にも幾つかの称号をお持ちで、学内一の男児として一時は名を馳せていたんですよ。」

「え!」

あれ……でも。」

(今は、一つだよね……? たぶん。)

真菜月みするの疑問に気付いた芳乃姫は、はっとして話していいものか戸惑いの表情を見せていた。

まずい話だったのかなと真菜月みするがぼんやり思った時、後ろに控えていた多喜勇治がぼそりと口を開いていた。

「圭は一度全ての称号を返上した事があるんだ。

協定を結んだ三つの国を救う為に……。」

「他の国を救う為に……？」

「どうして他の国の為に——」

「それは……。」

「駄目です、勇治さん。」

今そのお話をしてはいけません。」

芳乃姫が静かにその言を遮った。

ゆっくりと先程真菜月みするが瞳を移していた方へと顎を少し傾ける。

「見ています。」

（見てる……？）

（あ、さっきのあの——）

「芳乃ッ！」

突如蒲池大々の声が芳乃姫を呼ばわる。

真菜月みするがその声に我に返った時、すでに事は済んでいた。

何かが弾ける音がこだました。

芳乃姫はすつくりと立ち上がっている。

前を見据える芳乃姫の横顔は高貴な光りをたたえていた。

ふわりと細い二本のおさげが風に舞って揺れている。

桜の花びらがはらはらと芳乃姫の気品を彩る。

「え………？」

音の正体も突然の芳乃姫の直立の理由もわからない真菜月みするは、ただただ芳乃姫を見上げていた。

「大さん、気をつけてくださいね。」

芳乃姫が蒲池大々に向けて声を発する。

真菜月みするは蒲池大々の方へ眼を向けた。

見れば蒲池大々も入橋圭も、先程までの決闘を一時中断させている。
何が起きたのだろうか？

決着はもう着いたのだろうか？

見れば入橋圭の手には「さあべる」が握られているが、蒲池大々は
素手である。

「いや、待ってくれ、芳乃。」

そつちに飛ばしたのはこいつだぜ。」

そう抗議するや髪を振り乱した蒲池大々は、入橋圭を指差した。
入橋圭は入橋圭でへらへらと「いや久しぶりだから」と何やらきま
り悪そうに照れている。

「大さんに腕があれば、こちらに飛んでくる事はありません。」

そついうや芳乃姫は、棧敷の壁に向けて歩き出した。

その先に何かあるのか真菜月みするにはまだ判別できない。

しかし後ろ姿で何やら手元を動かしていた芳乃姫の肩口から、刃が
見えたのを見て真菜月みするもそれを理解した。

何かどうかしているのまにやら、とにかく蒲池大々の手からこち
らへ向けて「さあべる」が吹っ飛んできたらしい。

「ごめんごめん2人共。」

怪我ないよね？」

そしてそれはどうやら入橋圭のせいらしい。

その事実関係に気付いた真菜月みするは、両腕に鳥肌がぞくぞくと立ち上がるのを感じた。

「ちょっと……本当に何処向けて飛ばしてんのよ！
危ないじゃない！」

真菜月みするは照れる入橋圭に声を荒げた。

「んー、でも真剣勝負だったからさあ。

あまりそういうのに目が行かなくなっちゃって……。」

「目がつて……！」

そういう入橋圭の二の腕はぱつさり斬り傷を刻み、ぽたぽたと血を垂らしている。

対する蒲池大々も頬や手の甲に小さな斬り傷を作っていた。

（ひい………血出てる……）

真菜月みするはくらくらとした。

「本日はもうよろしいですね、大さん。」

「えっ……そんな訳ないだろ、芳乃！」

まだ決着が着いて——」

「栈敷の中まで刀が飛んでいる状態ですか？

確かに決闘の性質は、命のやり取りです。

ですが今回は、王子同士の勝負は決闘の作法に則らなければ出来な
いから許可したんです。

その事は大さんともきちんとお話して決めましたよね？」

「……う、まあ……。」

（……意外と芳乃さんが敷いてるんだ。）

真菜月みするは凜々しい福箱芳乃をまじまじと見つめた。

きつちりと蒲池大々を見据えた後、芳乃姫は入橋圭の方へ視線を向

ける。

「本日の決闘は、姫真菜月みするの王子入橋圭の勝利です。」

芳乃姫が厳かに裁断を下していた。

「んだよ、くそっ！」

てめえ卑怯だぜ！わざと飛ばしたろっ！」

蒲池大々が芳乃姫には当たれず、傷口にぺろぺろ舐めた指をあてる入橋圭に八つ当たる。

芳乃姫はふうつと小さく息を吐き出してその様子を見つめていた。

「大丈夫ですか！」

芳乃さん、お怪我は……。」

決闘の決着を見ると、後ろに控えて座っていた脩平が芳乃姫を気遣い近寄ってきた。

そうである、先程衝撃音がし、棧敷の真横に刃は立った。

正面から飛んできた刀が真横にそれる事は物理上あり得る事ではない。

そう、誰かがそこに衝撃を加えない限り……。

その時芳乃姫は前を見据えて直立していた。

つまりは――

（芳乃さんが????）

「え、大丈夫ですか?!」

真菜月みするも事態に気付き、芳乃姫を気遣った。

芳乃姫はやりわりと気遣う脩平、そして真菜月みするに対してほほ笑む。

片手には先程引き抜いた蒲池大々の「さあべる」が、そしてもう一方の手には――

綺麗な彫刻と彩色を施した篠笛が一本握られていた。

「あ……それ……。」

（夜の笛……。）

「はい、これで弾きましたので大丈夫です。
私に怪我はありません。」

「その、木の笛で……？」

それは少し真菜月みするにとつて驚きであつた。
勢いよく飛来する大きな刃物を、このような細い木の笛で弾く事が
出来るとはとても思えなかつたからである。

それを察した芳乃姫がくすりといったずらな笑みを真菜月みするに向
ける。

「これは称号の印なんです。

ですから普通のものではありません。」

「えっ……！」

称号、それがっ！？」

真菜月みするはまたまた驚愕した。

「お姫様も称号とかつて持つんですか？！」

称号は男児が持ち力を使うもの、そうであると自然に理解していた
ためである。

「いえ、必ずしも必要なものではありません。
けれど——」

「こうした時に便利でしょう？」

「……はい。」

——この子、すっい……。

その時真菜月みするは、自分の隣でしゃんと背筋を伸ばしほほ笑む青春乙女に、静かに感動を覚えていた。

「圭！」

「おっ…あつ！」

勇、お前そこにいたのか！！」

棧敷席より芳乃姫や真菜月みすると共に表に出てきた多喜勇治に気付き、入橋圭は素直に驚きの声を上げていた。

「圭、お前——」

多喜勇治は真菜月みする達を足早に追い越し、そのままがつしりと入橋圭を抱きしめた。

かなり「しゃい」な男児に見えていた多喜勇治の、その「だいいくと」な行動に、真菜月みするは少しぎよっとした。入橋圭はというと奇声を上げている。

「勇！痛い！痛いって！」

俺の腕斬れてんから！

そこ痛いつて！」

それでも多喜勇治は入橋圭を放さなかった。

むしろそれまで以上の力を入れて抱きしめている。

入橋圭の胸からもれる多喜勇治のわずかな吐息は湿り気を帯びていた。

桜舞い散る中、抱き合う青春男児（ご丁寧にも1人お涙）。

桜が踊ると何でも桜色に映えてくるから不思議である。

と、真菜月みするが破廉恥な夢想を不覚にも抱き始めた時、多喜勇治は絞り出すように口を開いていた。

「良かった、元気で良かったよ、圭。」

「勇……。」

「お前あのまま死んじゃうかと思って……おいら。」

「ん……ごめんな。」

入橋圭は腕が痛いのもおそらく我慢して、まるで怪我がないかのよう
に穏やかな表情を浮かべて、多喜勇治の腕の中でですがままにな
っていた。

（そんなに……圭くん、傷ついてたんだ。）

真菜月みするはその光景を眺めながら、胸に一筋せまるものをこら
えていた。

今でも十分泣き出しそうな心をしている入橋圭、今では薄笑いを浮
かべて飄々と振る舞う入橋圭は、一体どんな状態にあったのだろう。

「それでは勇さん。」

「よろしいですね？」

入橋圭を抱きしめていた多喜勇治が芳乃姫に向けて顔を上げた。

その頬は涙にぬれて光っている。

涙に洗われたその瞳は、純粹に綺羅綺羅と輝き、強い光を帯びてい
た。

多喜勇治はおもむろに入橋圭からその腕を放す。

芳乃姫に向き合い、芳乃姫が近づくのをしっかりと見つめていた。

「本当に、今まで有難うございました。」

「……頑張ってくださいね。」

そういうと、芳乃姫は多喜勇治の頬を思い切り張っていた。

ぱぁんと乾いた音が、桜吹雪の中に消えていく。

人が人を叩くという行為は、どうしてもこんなにも胸に迫るのである

う？

別離と出会いを告げる花の中で、振り切ったその手をゆつくりと握る芳乃姫の後ろ姿にも、顔を振り切られたままの状態で無言に佇む多喜勇治の姿にも、真菜月みするは絞めつけられそうな切なさを感じていた。

春風は穏やかに吹雪き続ける。

儂い色を浮かべる花びらはくるくる、ひらひら美しく翻弄させられている――

まるで、ここに閉じ込められている青春男女のように。

「さ、これで多喜さんは私の国の者ではなくなりました。決闘は終わりです。」

もう場所を移しましょう。」

芳乃姫がやんわりと頬笑みを浮かべて皆に告げる。

「圭くん、腕大丈夫？」

真菜月みするは入橋圭に近づいた。

「ん、まあまあかな。」

入橋圭はいつもの薄笑いでへらりと答える。

しかしその腕の傷は未だに鮮血を滲ませていた。

入橋圭の肘を伝いぽつりと一粒、地面で揺らめく桜の花びらに落ちていく。

「みするさん、圭さん。」

本日は大さんのわがままに付き合って下さって本当に有難うございました。

傷の当てですが、大さんと合わせてこちらにお任せいただいてよろしいでしょうか？

先方への連絡はすでに済ませております。」

（先方への…連絡？）

「みするさんもお近づきになる良い機会ですし…。」

「お近づき？」

「どうやら茶道室へは戻らずに、何処かへこのまま行くらしい。」

「芳乃姫はその通りですよと言わんばかりに、真菜月みするを見つめて一つこくりと頷くと、言葉を発していた。」

「はい、今から嵐さんの治める保健室に参ります。」

真菜月みすると芳乃姫は、談笑しながら前に行く。

やはり同性同士の青春乙女といったところであろうか、会話はこと
の他華やぎを見せている。

その後ろに控えるのは傘持ちの渡や脩平で、その様はしかと目視で
きないが、その声の朗らかさからその空気に同調して同様に華やい
でいる事が容易にわかる。

そして少し離れた後方より、入橋圭、蒲池大々、並びに多喜勇治は
とぼとぼと後を追っていた。

ちなみに多喜勇治はまだ真菜月みするへの宣誓を済ませていない状
態で付き従っている。

宣誓と同時に義務教育は修了してしまう。

「自国で落ち着いてからされた方がよろしいでしょう。」という芳
乃姫の助言を採用した為である。

「もう行ったか？」

「のようですねえ、それなりに満足していただけたようで……。」

軽くおどけて手を上げる入橋圭、どうにもその軽薄な動作に蒲池大
々はいらいらとしてきてしまう。

故に蒲池大々の詰問の声は責めるような色を含んでいた。

「なんで棧敷を狙った。わざとだろ？」

「……死国同盟の話が出てたから。」

「あ……ごめん、圭。」

おいらつい……。」

多喜勇治がぼそりと謝罪を告げる。

「……なっ、死国って。」

てかお前、なんで聞こえる??」

「ん?それはほら「猫」ですから。」

入橋圭はそう言って耳をつんつん指差しにやにやする。

「聞いてたのか?お前。」

多喜勇治がわずかに驚く。

蒲池大々はぐつと大声をこらえて、入橋圭に詰め寄った。

「ッ……お前。」

決闘で称号使わねえって決めなかったかい?」

「ん?耳ならいいかなあって……。」

力が強くなる訳じゃないですし……。」

「だからって——」

「俺はベロニカの前で隙は見せたくない。」

入橋圭が静かに呟く。

ベロニカの名前に蒲池大々はびくりと身体を固くして、あたりを警戒する獣のように周囲を窺った。

「いないからってあまり下手な事言っんじゃねえ。」

「わかってる。」

そう言ってくすくす笑う入橋圭は、どこか楽しんでいるようにも見える。

蒲池大々はけつと呟くと入橋圭の腕にちらりと瞳を移した。

「悪かったな。」

俺の耳は普通だから全然気付かなかった。

お前の動きが一瞬鈍って好機くらいにしか思ってなかった。」

「ん?いいですよ。」

真剣勝負に意識飛ばしてる俺が悪いんですから。

でもおかげで、棧敷への刃物飛ばしも手負ゆえの暴拳に演出する事が出来たと思うし。

それで話も止められた訳ですし…。」

「あ、いや、圭。」

あの話なんだけど実は芳乃姫がもう止めてたんだ。」

「え？本当。」

うわ、手の傷に頭いつててそこ聞いてなかったかも…。」

「中途半端だな、お前…。」

それで俺の芳乃に飛ばすってなんだよ。

怪我させてたら本気で決闘入るとこだったぜ。」

「いやあ、それは本当にすみません。」

かなり久しぶりだったから、力の掛け方とかさっぱりんなっちゃってて。

でも芳乃さんなら絶対防いでくれるだろうと思ってたし。

でしょ？」

入橋圭が意味ありげな視線を蒲池大々にちらりと向ける。

蒲池大々はそれに対し、決まり悪そうな顔をして入橋圭から顔を反らした。

すでに一行は正面玄関より校内へと足を踏み入れていた。

真菜月みするや入橋圭の住まう用務員室とは反対の廊下を突き進む。一階廊下の行き止まり、そこに保健室は存在していた。

すでにその廊下からは、ほのかな消毒の香りが鼻の奥をつんと刺激する。

芳乃姫は保健室の扉の前に立つと、こんこんと手の甲で「のつく」をした。

中から物音は聞こえない。

芳乃姫はさらに一息息を吸うと、柔らかな声を高らかに響かせて来訪の意を告げていた。

「福箱芳乃です。」

私の王子、蒲池大々と真菜月みするさんの王子、入橋圭さんの怪我を診ていただきたいのです。」

まるで無人のように音がしない。

真菜月みするが本当に人がいるのかしらと疑い始めた時、扉はがりと音を立てて開いていた。

そこには一人の成人女性が立っていた。

少し「うえいぶ」のかかった肩までの髪を後ろで束ね、きりりと強い眉と少し鋭い瞳が印象的な気の強そうな女性である。

さらりとした白の「わいしやつ」とひざ下までの「べえじゅ」色の「すかあと」に身を包み、のりの効いていかにも清潔そうな白衣を着用している女医である。

「入りな。」

目の前の成人女性は、顎先で中を示してそれだけ言うと、そのまま中へと引き返して行ってしまった。

驚きを見せる真菜月みするに芳乃姫はそつと告げる。

「保健の鍋内先生です。」

こちらで学内の生徒の怪我や病気の治療を行っております。」

「保健の……先生。」

素直に「いたんだ」という言葉が真菜月みするの頭をよぎる。

「うん、でも治療には結構徳を使うから、あんまり厄介になれないからね。」

真菜月みする達に追いついた入橋圭が後ろから注射を入れる。

そして入橋圭は芳乃姫にぴつと敬礼をしてお礼を言った。

「お世話になります、芳乃さん。」

「そんなに固くならないで下さい。」

今日は無礼講だと言ったでしょう？圭さん。」

芳乃姫はくすくす笑う。

その笑いを遮るように奥から随分と「きやらめるばいす」な乙女の
声が響いてきた。

「あ~~~~あつちくなるからあつちいよオ！早く閉めてえ〜！

ハムちゃんと姫ちゃんの脳みそ、超デリケなんだから！」

（え、嘘、何？……このアニメ声。）

声の主を求めて首を伸ばした真菜月みするに対し、入橋圭がそつと
その背中に手を触れて小さく心の中に警告をした。

「気をつける、みする。刺激するなよ。」

（……………？

圭くん、怯えてる？）

煙草の紫煙のように、入橋圭の心の不安が真菜月みするの心をかす
める。

しかし好奇の瞳がその姿を追ってしまっていた。

保健室の中は中々広かった。

「かあてん」の数を見るに四つは寝台が置かれている。

しかしそこは保健室と言われなければ保健室にはとても見えなかつ
た。

何といっても血痕が激しい。

まるで近代「ああと」のように、寝台を囲む「かあてん」は、血痕
で彩られている。

一步中へ足を踏み入れる。

見れば床は全て「たいる」貼りが施されていた。そのまま洗い流しをする為であろうか、排水溝も幾つか設けられている。

たいるは塵一つなく洗い清められている。

真昼にもかかわらず白々とした光りを放つ蛍光灯に照らされて、まぶしい位に光を反射している。

しかし、どうにも見せかけの清潔さにはしか見えてこないから不思議である。

扉の近くの机には、先程の鍋内先生が回転椅子に腰かけて、こちらを刺し殺すような瞳で見つめていた。

藤村教諭もそうであるが、この学園の教師軍は、何故か異様な程殺意を剥き出しにしている。

（でも、性格は結構真面目で良い人だったりするんだよね。）

それでもまだ見知ったばかりの鍋内教諭は、かなり怖い。

真菜月みするは視線を鍋内教諭からその後ろに並ぶ銀色の薬棚へと移っていた。

病院などで見かけそうな医療器具が整然と綺麗に並んでいる。

しかしそれも一つ目の棚までであった。

その次の棚にはどう見ても中世の拷問器具にしか見えないものが乱立している。

暗罪凌子のように拷問に造詣の深くない真菜月みするにその用途等にはよくわからないが、ごてごてと鎖の付いた奇怪な道具や、獰猛な獣の牙や爪を思わせる禍々しい刃物達は、心の奥の恐怖心をざくざくと刺激した。

（え？……え？……え？？）

真菜月みするの視線がその先の壁に設えられた、水滴を表面に浮かべる大きな鉄の引き出し群に目が行った時、一番奥の寝台の「かあてん」がさつと開かれた。

「ヒッ……むう!!」

思わず怪鳥化しかけた真菜月みするの口元をすんでの所で入橋圭が食い止めた。

しかし驚くのも無理はない。

真菜月みするでなくとも大抵の人間は、彼女の姿を見たら息を飲むか悲鳴をあげるかはたまた気絶するか of 行動を起こしていたに違いない。

そこに一人の裸足の青春乙女が立っていた。

後ろで「ぽにい」にまとめた髪はおさを編みこみそこからばたばたと赤い滴を垂らしている。

動揺に滴を垂らす顔の判別は難しい、とりあえず眼鏡を着用している事だけはこの状態でも把握できる。

二の腕までたくし上げた白衣というには鮮やかなその衣の下には「寿」と記入された体操着を着用していた。

頭の前から足の指先まで血濡れの乙女、それが保健室に君臨する姫、寿嵐その人であった。

「こんにちは嵐さん。」

「ありよつすい！」

「ごきげん??」

「ふぁーん？」

「ちみがみするちゃん？」

「あんま可愛くないね。」

血濡れの眼鏡を、薄汚れた白衣の袖で大雑把に拭くと、保健室の姫君こと嵐ちゃんは、人を色眼鏡でしか見る事の出来ないような瞳で真菜月みするを凝視した。

（無理……！）

真菜月みするは、目の前の生臭い香りを放つ乙女、嵐ちゃんに対して一瞬にして完全無欠なまでの拒否感を抱いてしまっていた。

「愛想笑いも何にもなあゝいッ！

ほんとくあゝいくなあゝいッ！

あやつ？何々、もしかや人見知りなのかな？

だったらごめんね、ふわあゝほんとほんとごめんごめんね。」

ぷつくりと頬を膨らませて不機嫌を漂わせていた嵐ちゃんは突如、大層申し訳ないようなしおらしさを漂わせ、胸の前で両手を握りしめ、真菜月みするにずいといと近寄った。

全くつかめない嵐ちゃんの話しぶりと気分の転調は、まさに嵐のこゝとしてある。

真菜月みするは、何の反応も示す事も出来なかった。

「そうそう！

みするとっても人見知りなんだ。

ごめんね、嵐ちゃん。」

と、入橋圭がさつと助言をしたおかげで、とりあえず嵐ちゃんを納得させる事が出来たようだ。

「そうなんだあ。

うふん、そつかそつかあ。

人見知りは可愛いなあ。

いいないなあ。

みするちゃん可愛いなあ。」

と何かとても嬉しそうに微笑んでいる。

その間にもぼたぼたと体中から、鮮血を滴り落としている。全く気にしている様子は見られない。

それにしても、嵐ちゃんは何故こんなに血濡れなのであるのか？そこにいる誰もが、その事に対し少なからず疑問を抱いていた。しかし誰もその事について触れる勇気のある者はいなかった。

「奈津美ちゃん、このハムちゃん姫ちゃんが診るの？」

血まみれに満面の笑みを浮かべた嵐ちゃんは、鍋内教諭の方を向いてハムちゃんこと、入橋圭と蒲池大々を指差し質問する。

入橋圭と蒲池大々はびくりと肩を震わせた。

足を組んで頬づえをついてこちらを睨みつけていた奈津美ちゃんこと、鍋内教諭はぼそりと呟く。

「いや、私が診よう。」

姫ちゃんはずぶ濡れだろう？」

「あゝそつかあ。」と残念そうにする嵐ちゃんとは対照的に、入橋圭と蒲池大々はほっと胸を撫で下ろしていた。

誰しも血濡れの乙女より、折り目正しい白衣の女医の診察を受ける方が良いに決まっている。

「それと区切りが良いなら、きちんと着替えてきな。」

2人共大した傷じゃない。

たぶん姫ちゃんやダリンと話をするのが目的だろ？なあ？」

酷薄そうな顔をして、淡々と女性にしては低めの声で話す鍋内教諭が「ちゃん」付け言葉を口にするのは何やら不思議な光景である。

「はい、その通りです。」

と語る芳乃姫はこれまで保健室に来てから見聞きした不可思議がまるで堪えていないという風情で、涼やかにしているからさすがである。

「あ、しかしなあゝ」と鍋内教諭が、少し渋い顔を作った所で、扉

の近くの鍋内教諭の机とは反対側に位置する扉がぱたりと開かれていた。

「ん……？何、みなさん。」

そこには一人の青春男児が立っていた。

どうやら真菜月みする達の来訪にはこれまで気づいていなかったらしい。

目の少し上まで前髪のある「まつしゅるうむ」な髪型に、ほっそりと長身の青白い顔をした男児である。

その男児は「わいしゃつ」、黒ずぼんの典型的な学生服の上に半袖の清潔な白衣をまといていた。

右肩から左腰にかけて何やら大きな黒鞆を抱えている。

何となくこれから外出しそうな装いである。

「ダリン、こちら新しく姫になった真菜月みするさん。

挨拶だつて。」

鍋内教諭にダリンと呼ばれたきのこの男児は、おどおどとしている真菜月みするをついつと見つめた。

本当に認識して見ているのだろうかと思いたくなるほど、淡泊な視線である。

ぺたぺたと「すりっぱ」を鳴らして、その男児は、真菜月みするに近づいた。

「俺、一草清志。
いちくさ きよし

寿嵐の王子、よろしくね。」

音程の全く変化しない単調な話し方で自己紹介すると、一草清志はすつと右手を差し出していた。

どうやら握手をしたらしい。

とりあえず真菜月みするはその手を取って握手した。

一草清志は対して握りもせず、それで真菜月みするへの挨拶を良しとすると、とりあえず芳乃姫を筆頭に、そこにいる皆に対して「こ

んにちは」「ひさしぶり」等の当たり障りのない挨拶をした。

「じゃ、俺出かけるから。

ゆっくりしてって。」

それだけ言っと、もう皆への興味は失せたようにぺたぺたと扉まで歩き手を掛けていた。

と、そこでぴたと動きを止める。

どうしたのだろうと皆が見つめていると、一草清志は嵐ちゃんの方へと顔を向けた。

「姫、来て。」

一草清志が淡泊に嵐ちゃんを呼ぶ。

嵐ちゃんはまるで子犬のようににはしゃぎながら一草清志に近づいた。

一草清志がすつと身をかがめる。

慣れた様子で血濡れの嵐ちゃんの唇に己の唇を少し重ねると、唇にわずか付いた血痕をぺろりと舐めてそのまま無言で保健室の外へと出て行った。

「早く帰ってきてね、ダリン。」

嵐ちゃんはきゅきゅとすでに閉じられた扉に向かって手を振っていた。

嵐ちゃんが手を振るたびに血痕があちこちに飛び散っている。

（何……このカップル……。）

真菜月みするがあまりの温度差と狂気に、呆気にとられているとくると嵐ちゃんが振り向いて真菜月みするに向かってにつこりとほほ笑んでいた。

「いいでしょオ？」

「……うん。」

嵐ちゃんはそれだけの肯定で満足したらしい。

「えへへ〜。いいよねえ、いいないなあ。」と頭と頬に手を添えて身体をよじって照れると、「じゃ、綺麗にするね!」と言って今一草清志が出てきた扉に向かい、たたと入っていつてしまっていた。

嵐ちゃんの去った保健室は、まさに嵐の後の静けさに包まれて静寂そのものとなっていた。

入橋圭と蒲池大々がげんりとした表情を見せいでる。

多喜勇治はというと、何やら青白い顔をして床に飛び散る血痕を凝視していた。

傘持ちの渡と脩平はというと、お互い手を合わせて「ひひい〜。」と奇声を上げている。

（色々痛いなあ……。）

冷房の利いた室内は涼しいはずなのに気付けばじっとり額に汗を浮かべている。

真菜月みするは、手の甲でそれをぐいつとふき取っていた。

真菜月みする達の後ろでぎしりと椅子が音を立てる。

「ほら、診てやるからここに座んな。」

どっちから診る?」

鍋内教諭が入橋圭と蒲池大々に視線を投げかけた。

鍋内教諭の仕事はその見た目どおりきちんとしたものであった。

今やしっかりと折り目正しく入橋圭の腕に巻かれた包帯の下傷は、おそらく跡も残らない程綺麗に縫いつけてある。

「糸は姫ちゃんのお手製だから抜糸はいらない。」

勝手に皮膚の一部になって消える。」

汚れた綿や器具を流して片づけながら、鍋内教諭が淡々と語る。蒲池大々のわずかな斬り傷も「こんなの唾付けとけば治るよ、馬鹿が。」と散々悪態をつかれたがとりあえず「よおどちんき」を丁寧に塗ってもらっていた。

「一草さんはどなたか往診をされているのですか？」

鍋内教諭に用意された「ぱいぷ」椅子に腰かけた芳乃姫が扉に視線を向けて小首をかしげる。

鍋内教諭はそんな芳乃姫をじろりと見つめる。

「患者に対する秘匿義務は徹底してるんでね、芳乃姫。」

「そうでしたか、申し訳ございません。」

鍋内教諭の殺意の瞳をやりわりと微笑んで芳乃姫は流していた。

「そういえばこの国って、騎士がいらないんですね……？」

真菜月みするは回りをきよきよする。

「ああ、それは——」

「ここにはダリンと奈津美ちゃんしかいないのよ！」

ぱんつと音を鳴らして嵐ちゃんが扉を開ける。

男児陣の間に、うわもう来ちゃったよといった感が漂っている。

しかし嵐ちゃんは他人の空気を読むような事はしない乙女である。出来ないのではない、出来るけどしない乙女なのである。

この辺が達が悪い。

しかし嵐ちゃんは気にしない。

ここは自分の国である。

ここでは自分の気持ちを最優先していい事を知っている。

だから嵐ちゃんは、ふふんとご機嫌な足取りで皆の前へと近づいてきた。

先程の血痕は何処へやら、嵐ちゃんは清楚な白と焦茶色の「せえら

あ」に身を包み、頭のちょうど横辺りから左右対称に垂らしたおさが揺らしていた。

少し太めの眉と睫毛の多い瞳、小さな鼻とつんとした唇。こうして見るとそれなりに可愛らしく見えるが、やはりその目は人を疑うような目付きであり好感が持てるものではない。

「そこ姫ちゃんトコッ！」

嵐ちゃんが可愛らしい「あにめ」声で叱責する。

そう指差された渡と脩平は「ひッ！」と小さな声を上げると、すぐさま診察台の長椅子から飛びのき、地べたに体育座りをしていた。

「そこは汚いよ、まだあるからこれ使いな。」

と鍋内教諭が「ぱいぷ」椅子を2人の男児に提供する。

その間に嵐ちゃんは胸元から淡い桃色の「すかあふ」を取りだすと、ふわりと診察台の上に敷き、その上にぽんと座って足をぶらぶらし始めた。

「えつとなんだっけかな？」

うん、姫ちゃんの国の話してたんだ。

可愛い可愛いみするちゃん、もつと知りたいかなあ、姫ちゃんの事??」

「えッ……??!!」

あ……・あー。」

突如名指しされた真菜月みするは硬直した。

「あ、聞きたいって思ってるから。嵐ちゃん。」

入橋圭が真菜月みするの肩に手を置いてすかさず「ふおおお」を挟む。

「そつかそつか聞きたいかあ。」

可愛いなあみするちゃん。」

と嵐ちゃんの機嫌はさらに良くなっていく。

（どうしよう……こんなに気に入られても困るんだけど……。）

と何も話せず嵐ちゃん言う所の「人見知り」乙女と化した真菜月みするは、一人はらはらと思案していた。

（いや、嵐ちゃんには思いっきり気に入られてた方がよい……。）

入橋圭がそつと真菜月みするの肩から手を離す瞬間に心に伝える。

確かに反対に嵐ちゃんに思いっきり嫌われたらという事を考えると、どうにも命が無いような気がしてならない。

真菜月みするはとりあえず精一杯の愛想笑いをひくひく嵐ちゃんに浮かべこくこくと首を縦に振っていた。

「ふあ?！」

あはゝ笑った笑った！

笑ったんだよね、みするちゃん。

えへへえ、もう友達だねゝ。」

「ッ……………!」

真菜月みするの背筋に確かに戦慄が走り抜けた。

嵐ちゃんは自分の腰掛けていた診察台を少しずれるとぽんぽんと空いている場所を叩いている。

「……………?」

「ぽんぽん!」

「……………?」

「だからポンポンッ!」

嵐ちゃんがばんばんと診察台を叩いている。

嵐ちゃんの挙動に熟知している鍋内教諭がぼそりと呟いていた。

「隣りに座れつてさ。」

「え……………えッ??あたし???」

「そつ!あたしちゃん!」

嵐ちゃんはこのこと真菜月みするを指差している。

真菜月みするは思わず回りときよろきよろ見て打開策はないか探りを入れたが、回りのどの者の表情にもそれは見いだせるものではなかった。

皆一様に諦めの表情を浮かべている。

真菜月みするは断頭台上上がる気持ちで、かちこちと嵐ちゃんの隣りに腰かけた。

途端に嵐ちゃんが腕をからめてくる。

「ッ……！」

思わずいつものように怪鳥化しそうになった真菜月みするではあったが、寸出の所でそれを回避した。

ふんわりと金木犀のように優しく甘い香りが真菜月みするの鼻をかすめたからだ。

それは嵐ちゃんから漂う香りであつた。

（あ、良い匂い……。）

血生臭い印象しかない意外にも優しい嵐ちゃんの香りに、自然と真菜月みするの心がほころぶ。

嵐ちゃんは「んふー、友達だあ。」と猫のようにその腕にじゃれついていた。

「じゃ友達なみするちゃんには教えちゃう！」

姫ちゃんの国は騎士無いの！

ずっとここで暮すんだ。

だから奈津美ちゃんのお仕事とかモルちゃんで遊んでるのよ。」

「え、卒業しないって事？」

「あふゝ、みするちゃんに質問されちゃってる。」

そだよ、姫ちゃん卒業しないの。

ダリンともそだねって決めたの。

だからずっとずっとお姫様〜。」

嵐ちゃんがとろんとした表情を浮かべて幸せそうに陶醉している。

真菜月みするは少し混乱した。

「いいんですか？」

卒業しないと元の世界に戻れないって……。」

「あはあ？」

ホント可愛いなあみするちゃん。」

嵐ちゃんがにやにやと真菜月みするのおさを遊ぶ。

「いいんだあ。」

だって姫ちゃん帰る気ないもん！

ダリンとずっと一緒にいたいもん！

モルちゃんとずっと遊びたいもオくん！」

嵐ちゃんはきやらきやらと笑って言った。

真菜月みするは奥の血濡れの「かあてん」に瞳を映す。

確かに嵐ちゃんにとってここでなければ出来ない事があるようだ。

「全く、義務教育から抜け出したいとかいうねんねちゃんがいるとは思わなかったよ。」

ま、幸い趣味が似てるから色々手伝ってもらって助かってるんだけどさ。」

鍋内教諭が仕事を趣味と評して嵐ちゃんを評価した。

「えへへ、奈津美ちゃん。」

大好きい〜。」

ばちちゃんと「ういんく」を決める嵐ちゃんに、鍋内教諭は「おう。」と親指を立てて見せている。

一見相対する2人に見えるが、かなり深い所で信頼関係が結ばれているらしい。

真菜月みするは「そうなんですかあ。」とただただ感心した。

「じゃ、そろそろ帰るか、みする。」

怪我の治療も挨拶もそれなりに済んだしさ。」

入橋圭がさつさと話を切り出す。

どうやらあまり長居はしたくないらしい。

わからないでもないがと真菜月みするも密かに思った。

「そうですね、あまり多人数で長居してはご迷惑になりますし…。」
と、芳乃姫もそれに賛同する。

「え〜、寂しいなあ泣いちゃうなあ。

もっともつと姬ちゃんと話そおよ〜」。

ぶ〜〜つ。」

と、年不相応な駄々をこねて、嵐ちゃんが真菜月みするの腕に両手をからめたままその二の腕に頭をとんとんとぶつけていた。
甘い芳香が真菜月みするの鼻をくすぐる。

（匂いは良いんだけどなあ〜……。）

（はい、テストス。みするちゃん？

聞こえるかな？

あ、駄目驚かないッ！）

突如真菜月みするの頭の中を嵐ちゃんの声がこだまする。

真菜月みするの驚きは、嵐ちゃんの強い心の声に抑えつけられていた。

嵐ちゃんは見えた目、真菜月みするの腕に頭をすりつけ名残を惜しんでいるようにしか見えない。

嵐ちゃんはそのまま真菜月みするの心に一気に情報を叩きこんでいた。

これ「心察」っていうの、姬ちゃんだけの力なの！

診察は違っよ！心見るから「心察」！誰でも見れちゃうの！

んゝ、人見知りかなあ、怖いのかなあ、姫ちゃん怖くないない平気だよ。

だからビューっんってしてあげる！

……んはあゝゝ、でもみするちゃん姫ちゃんの事良い匂いって思ってるうゝゝ。

じゃ好きになつてくれるかな？？

やっぱりかな？うれしいかな、ふふん。

みするちゃん良い子良い子、とっても良い子。

困った事があつたらここに来てね！

姫ちゃん助けちゃうかも。

姫ちゃんすつごいからね、ホントだよ！

どんな病気も怪我も赤ちゃんもビューんって出来るの！
ん？？？

あれん？

みするちゃん圭ちゃん好き好きじゃないのかな？？

……でもわかんないよ。

とにかく困ったら姫ちゃんに聞いてね！

徳いっぱい取っちゃうかもだけど、ちゃんと治るよ。

元気が一番！

そうでしょ？

じゃあ――

「ばいばいね、みするちゃん。」

嵐ちゃんは真菜月みするの顔を名残惜しそうに見つめてそれだけ呟いていた。

「嵐ちゃん、何言つてたの？」

嵐ちゃんの所からの帰り道、入橋圭が突如真菜月みするに質問した。

「っ……どうしてそれを……。」

「嵐ちゃんの力は有名だからね。」

人の心を診る「心診」、別名心を殺すと書いて「心殺」。

「え……心を殺す???」

「そ…精神攻撃。嵐ちゃんに嫌われるとかなり怖いぜ。中から破壊される。」

「……幾らなんでも、まさか…。」

「みするさん、嵐さんの事今も怖いですか?」

突如芳乃姫が真菜月みするに質問する。

真菜月みするは考えてみた。

嵐ちゃんが怖いか、否か…??

血まみれの嵐ちゃん。

飛び散る血、変な欠片、あの生臭い匂い。

怖い、それは怖い。

でも嵐ちゃんは……??

????

「……血は、怖いけど、嵐ちゃんは怖くないです。」

驚きながらも事実をぼそりと口にする真菜月みするに芳乃姫がこくりと頷いた。

「それが「心察」です。」

嵐さんの称号は「God hand」、「神の手」と仰います。

嵐さんは卒業を希望しない少し特殊な姫君ですので、その手ごと「称号」に変えられてかなり強い力を与えられているそうです。

嵐さんはみするさんの事を好きになりました。

先程みするさんは嵐さんに「恐怖心」を治癒されたんです。」

「つまり心消されたって事。」

「えッ……!」

心を消された、何とも衝撃的な芳乃姫と入橋圭の言葉に真菜月みす

るは驚愕した。

真菜月みするは心が消える事は怖いと思った。

しかしどうしてもそれを行う嵐ちゃんに対する恐怖心が芽生えてこなかった。

ただただ不思議な気持ちにしかねないでいた。

「でもそれはそれで幸せな事だよ、みする。

ダリンはダリンだけって嵐ちゃん絶対俺ら男児になびかないもん。ねえ？大さん。」

「おオ。

おかげで毎回不気味で不気味で仕様がなげ。

あれは人間というより化け物の域に入ってるからなあ。」

「それは失礼ですよ、大さん。」

と、芳乃姫が軽くたしなめる。

どうやら芳乃姫も嵐ちゃんの事が怖くはないらしい。

それが嵐ちゃんの治療によるものか、もとの精神性によるものかは不明であるが……。

「それでは私達はこれで…。

本日はお越しくださいまして本当に有難うございました。」

芳乃姫がぺこりと頭を下げる。

気づけばそこは、もう用務員室の前、すなわち真菜月みするの国の前であつた。

「いや、芳乃姫。

結局勇とか引き渡してもらったんだし、こっちの方こそお礼を言いたい所ですよ。」

入橋圭が芳乃姫にすかさずお礼を言う。

芳乃姫は緩く首を左右に振る。

「全てが善意ではありません、そのように感謝しないでください、圭さん。」

「そうだぜ？圭。」

とりあえずこれで一つ貸しだからな。」

「芳乃姫にですけどね、大さん。」

という入橋圭を蒲池大々が「あ！こいつ。」とどつく。

「げっ… まじで痛いからやめて下さい。」と逃げる入橋圭と2人の無邪気に戯れる様は、中の良い友達同士のようなのである。

「また遊びに来てくださいね！」「あ！今度は雅さんと一緒に来て下さると嬉しいなあ。」と口々に言いたい事を傘持ちの渡と脩平が気軽に真菜月みするに話しかける。

真菜月みするはそれにうんうんきつとねと返事を返した。

芳乃姫とも両手を握りあって別れを惜しむ。

蒲池大々はというと「落ち着いたら呼べよ。」と入橋圭をばんばん叩いて豪快に笑った。

「それでは皆さん、ごきげんよう…。」

そう最後に芳乃姫は挨拶をして自分の国へと帰って行った。

12

「えゝゝゝっ！

じゃあゆうちん歓迎会並びに義務教育修了記念パーティーを始めた
 と思います！

かんぱあゝゝい！！」

羽根井覚の音頭と共に、皆の手に持つグラスは打ち鳴らされた。
 中には藤村教諭お手製の「おれんじじゅうす」が注がれている。
 最後という事もあり、食事は「ばあてい」仕様なものであった。
 ちらし寿司に「さんどういつち」や野菜の冷製「すうぷ」、
 「ばてとさらだ」に「ふるうつぼんち」、極め付けには七面鳥が一羽まる
 ごと卓袱台の上にでんと据えられている。

「義務教育修了の祝いの席では、いつも一羽絞める事になっている。」
 というのは藤村教諭の言である。

藤村教諭が片手を見せてそう語るのは、おそらくその手で絞め上げ
 たからであろう。

おそらく一瞬の出来事であつたに違いない。

「という訳で、早速我が姫みするちんからゆうちんにキスをしちゃ
 つてくださあゝい！」

とちらし寿司用のしゃもじを「まいく」代わりに、羽根井覚が「ば
 あてい」を進行させる。

さながら王様「げえむ」を進めるちゃらい若人のようである。

真菜月みするはぶうつと冷製「すうぷ」を嘔き出した。

「げえ！俺のメシがあ！」

と入橋圭が悲鳴を上げる。

それは思い切り取り分けた入橋圭のちらし寿司の上にぶっかけられ

ていた。

「お前のせいだ、ハネー！」

と入橋圭が羽根井覚の顔に冷製「すうぷ」をぶっつけた。

「何すんだ、けえ！」

鼻入ったろが！」

と今や取っ組み合いを始めている。

「もう…海賊の食事じゃないんだから…。」

白石雅はあきれ顔をして食事を進める。

「おい、圭、覚くん。」

あんまり騒ぐと——たッ！」

多喜勇治はとぼっちりで羽根井覚の振り回すしゃもじに鼻頭をぶつけて悶絶した。

「……お前達も七面鳥になりたいか？」

その一言に入橋圭と羽根井覚は、ぴたりとじゃれあいのような喧嘩を停止した。

勿論声の主は藤村教諭である。

自分のお手製の食事を粗雑に扱われ、かなりご立腹である事は明白だ。

こめかみにびくびくと浮き上がる青い血管の動きが、その怒りの情動を表しているようでとても恐ろしい。

藤村教諭の手元の皿にはちらし寿司が盛られていた。

いつものように「ふおく」と「ないふ」で食事を進めている。

思えば藤村先生は洋食和食を問わず、この二つで食べていたなあと真菜月みするはぼんやり思った。

「食事は静かにするものだ。」

しかし本日は最後のパーティーでもある。

節度を持つて戯れる分には多くの事に目をつぶる。」
と藤村教諭が、一応の無礼講宣言を発令する。

（中途半端に難しい事言うなあ…。）

そこにいる青春男女の誰もが思った。

「じゃあキッスキッス！」

とあまり空気と危険の読めない羽根井覚が、またまた気を取り直して真菜月みするをやし立てる。

「……………」

ちらりと気まずそうに真菜月みするは多喜勇治の方を見てみると、ちようど多喜勇治と真菜月みするの瞳はぴたりと一致した。

多喜勇治はぽぽという擬音が似合いそうな変化を見せて、その顔色を真っ赤に染め上げていた。

さつと真菜月みするから視線をそらして斜め下に目を向けている。

（う…．．．そんなに照れられると、こっちも気まずいよ。）

といささか手のキスにも慣れてきた真菜月みするは、その赤みが伝染したようにやはりぽぽと頬を染めてしまっていた。

「んん？」

お…………と恥じらいです！

青春です！！

今まさに青春の１ページでえすつ！」

と羽根井覚が実況中継を入れる為、真菜月みすると多喜勇治はどんどん赤みを増していく。

「やめなよ覚。」

と白石雅がそんな羽根井覚をたしなめた。

「ホント勇は慣れないねえ。」

と入橋圭がにやにやと笑みを浮かべる。

「だっておかしいだろ？普通こんな事。」

と顔を真つ赤にした多喜勇治が抗議する。

その意見には真菜月みするも賛成であつた。

「おかしいも何もここじゃ普通じゃんか。」

と入橋圭は何処までもへらへらしている。

「全く圭は順応が良すぎるんだよ。」

と多喜勇治がぼそぼそと呟いた。

「皆ににやにや見られてるのは嫌だよ。」

という多喜勇治の言により、また羽根井覚の時のように皆その場で目をつぶる事になった。

真菜月みするは多喜勇治のその手を取る。

良く日に焼けた短く太い指をしたその無骨な手は、昔の百姓の手を思わせる。

今時こんなにしつかりした手の青春男児は中々見られない。

真菜月みするは少し感心した。

真菜月みするはちらりと多喜勇治の顔を窺った。

多喜勇治はもう一方の空いている方の手で自分の両目を隠している。わずかに顔を向こうに反らす様は、まるで予防接種を怖がる幼児のようである。

（なんか人柄が見えるなあ…すぐく真面目そう、多喜くんって…。）

真菜月みするはちゃんと多喜勇治の手の甲に華を咲かせた。
多喜勇治がそおっと目の上の指をどける。

おそろおそろ自分の手の甲を確認すると、機械のような手つきで真菜月みするの手を取っていた。

そんな様子をじっと見つめる真菜月みするに対して、多喜勇治は無言で目を閉じるように指示を出す。

（本当真面目だなあ…。）

真菜月みするは多喜勇治に指示されたように、自分も目を閉じた。
どうせなので多喜勇治と同様に片手で目を隠す「ばおず」を取ってみる。

少しすると、真菜月みするは自分の手の甲に震える温かい感触を感じていた。

「これで義務教育は修了だ。」

藤村教諭は出席簿でその事実が正式なものである事を確認すると、ふうっと溜息をついていた。

何かが大きく変わった様子はない。

その事を真菜月みするは入橋圭に告げると、「そだね。」と頷いていた。

「でも明日から藤村センセはいないから。」

「そうですよね？ 藤村センセ。」

「ああ。」

明日の朝にはもうこちらを失礼して職員室へ戻る。
と藤村教諭は淡々と告げる。

冷酷で真面目だけれど素朴でかわいく見える事もある藤村教諭に対して、真菜月みするはそれなりに親しみを覚えていた。明日からもういないという事を聞くと、何やら胸に疼くものがある。

「別にもう会えなくなるという訳ではない、真菜月君。

私は職員室に常にいる。

君は私の教え子だ。

その事実はいつまでたっても変わらない。

相談したい事があつたらいつでも来なさい。」

「……先生え。」

何やら涙がこぼれてくるのを真菜月みするは止める事が出来なかった。

皆が大丈夫だよ、泣く事ないよと声を掛けてくれる。

真菜月みするは藤村教諭の別れの悲しみと、真菜月みするを慕う皆の温かさの嬉しさにぼろぼろと涙をこぼしていた。

次の朝、宣言通り藤村教諭の姿はなかった。

普段なら黒の「えぶろん」を身に付けた藤村教諭の後ろ姿が見える台所には、廊下からの朝の光が小さな曇りガラスを通して注ぎ込まれている。

真夜中にはまだあつた「はんもつく」の痕跡も何もない。

卓袱台の上には「学級日誌」と書かれた黒い板と羽ペンが置かれている。

真菜月みするの義務教育は修了した。

12（後書き）

終心表明

どおもです、銃です。

はい、見ての通りです。

かなりイタいです……・（滅）

本当何書いてんでしょうねえ？頭腐りこけてますよ、自分。

何度も何度も書きながら、「ありえねえ」（笑）」「お前ら何本気になってんの？阿呆じゃん？（特に静馬）」「ひいゝゝゝ、サブいぼサブいぼ（凍）」と腕をさすりあげておりました。

しかし今夏で暑いので寒い位の方がいいでしょう（開き直り）

今回は一気に書きましたねえ、脳みそぐらんぐらんになりました（廻）

6月中旬から始動し、途中風邪で脱落し、冷夏の波に乗って何とか8月で終わった次第です。こんなに短期間でこれだけ書いたのは初めてです。（でもそれで書いたのがこれ…（闇）そしてページ数短編区分。皆さんどれだけ書くのでしょうか？自分にはとてもとても…。）

絶対話つながってませんねえ、かなり展開早くておいしいな所とか色々と人物や動きの描写が浅瀬でおいおいな所とか多々見られる事でしょう…。（何と言っても昭和初期生まれの男児があそこまで碎けるはずはなし（死））

いやもう考えてらんないですよ（いや、元からそんな構成力強くないですが）、冷房無しきついんですよお（開き直り）

じゃあ何故書くですよね。

いやあこれだけの無駄な馬鹿妄想、頭に詰め込んで悶々と日々を送る事が苦痛でしろうがなかったのです。

とりあえず今回はこんな所です。

何か面白さを感じて下さった方いたらかなり幸いです。

もしまたこの「青春歌シリーズ」を書きましたらその時そこでお会いしましょう。（とりあえず今はもういい…。）
ではまた…。

というのが前回書いた「終心表明」でした。

どおもです、銃です。

で、これいつ書き終えたんでしょう？

日にちがどこにも書いてないんですよねえ…。

駄目ですねえ… 1年前の自分。

という訳で熱いです。

えっと今午前2時なんですけど室温31度ですねえ…。

ホントきついですよ、無冷房。↑我が家の残念な方針。

そういえば先日、マンションで無冷房窓5センチ開けの4畳半で寝るという臨死体験をしてみたのですが、みする達よくもまあ無冷房でむさ苦しく4畳半（じゃなかったですねえ…（汗）彼女らは6畳でした。狭いかなと畳多くしたんです。申し訳無しです。）で生活出来るもんだと、思いました。

きつと冷夏なんですね…。

最高気温も30度位なんでしょう。

ベロニカさん達も、いくら池麵池女でもすっぱい青春男女むんむん生活を観覧するのは勘弁でしょうし…。

くだらない話をしました。

しかしなんといいですかこれ、世界観と自己紹介で終わってますねえ…。

あ、あと読み返して気付いたのですが、「死国同盟」がどんな同盟だったか忘れちゃいました…。最悪ですね…（死）

いかんせん1年前投稿した時反応やばかったので、自分の中でこれ「捨て作」になってたのですよ（汗）

という訳で、続き書くかはまだ微妙です…。

一度自分の中で「終わった」ものでしたので、それをまた持ち上げるというのが、出来るものやら…。

やはり多くの人に読んでいただけるのは嬉しいので、書いていきたいのですが…。

うゝ…とりあえず今熱くて、真面目な事考えられないですねえ…。もう少し涼しくなってから再考します。

あ、こちらで投稿するにあたり、若干小話等は省いてしまいました。あとセリフ等も少しいじったような気がするのですが、探すの面倒で放棄しました。

もし書けましたら、投稿したいと思います。

あ！…あの世界を、いつきに冬にしちゃうのもありですねえ。

皆でこたつ囲むとかいいかも…。

そういえば、あと2つ国出てないですし…。

書きたいカップリング国あったんですよねえ…。

うゝん、検討の余地ありですねえ…。

本当ならだら書きました。（常態でもだらだらですが…。）

ではまた…。

暑い中、ここまでお読みいただきまして有難うございました。

0
年
8
月
2
8
日

2
0
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669m/>

青春挽歌

2010年11月6日13時31分発行